

734
22



0053381-000

734-22

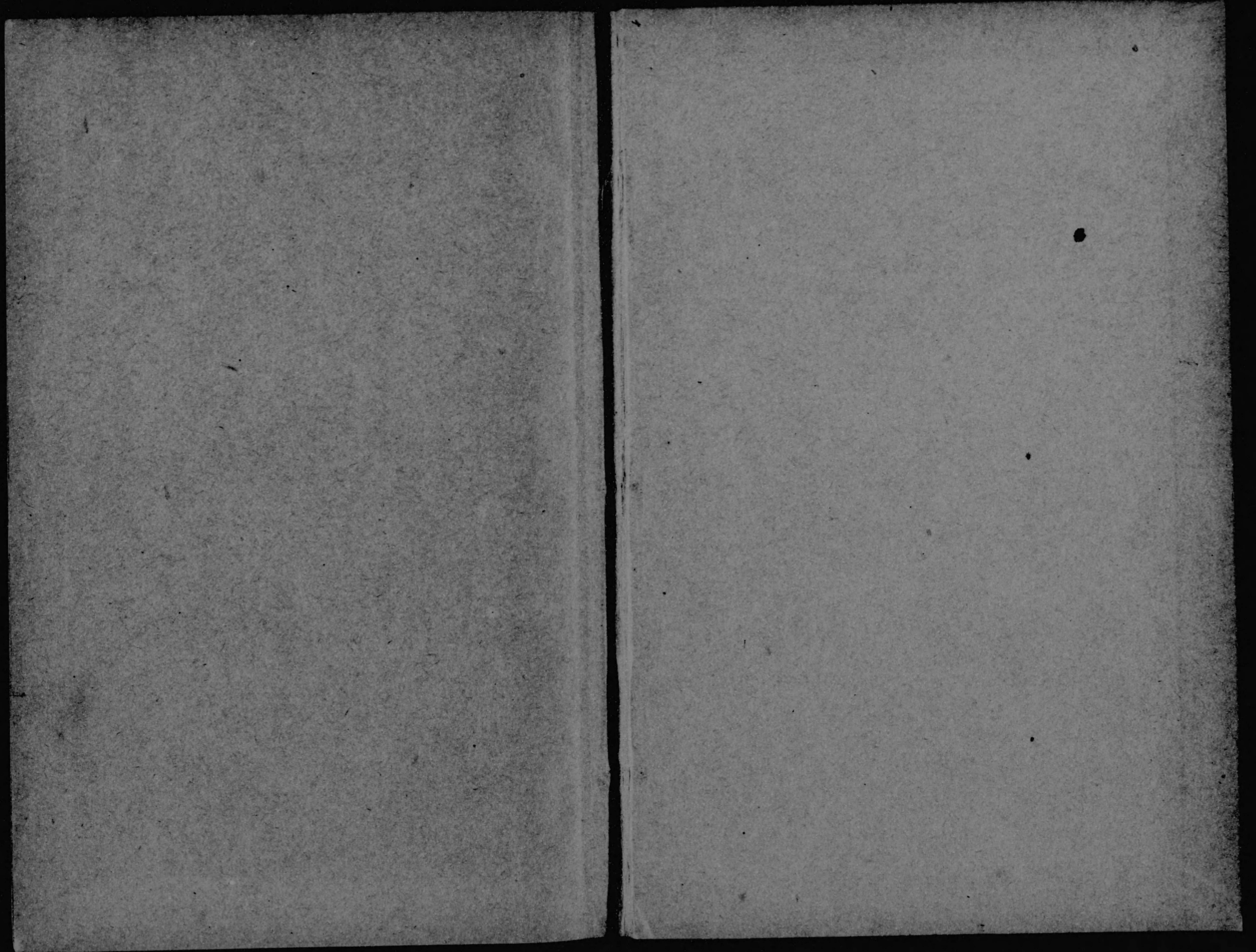
分類農村語彙

信濃教育会・編

信濃毎日新聞

昭12

AIA

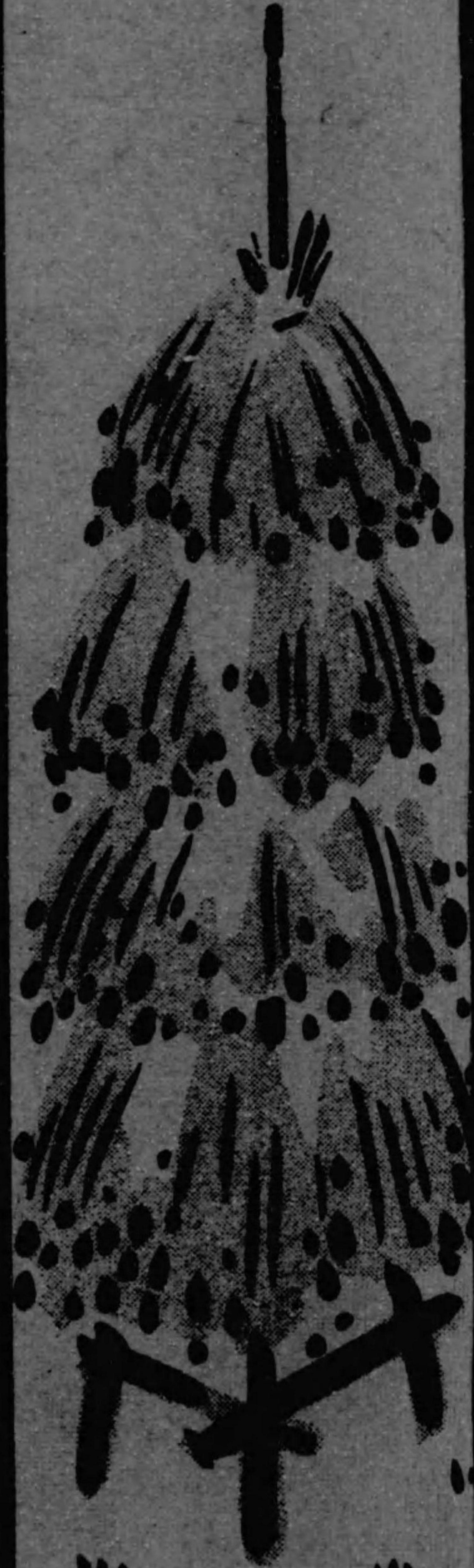


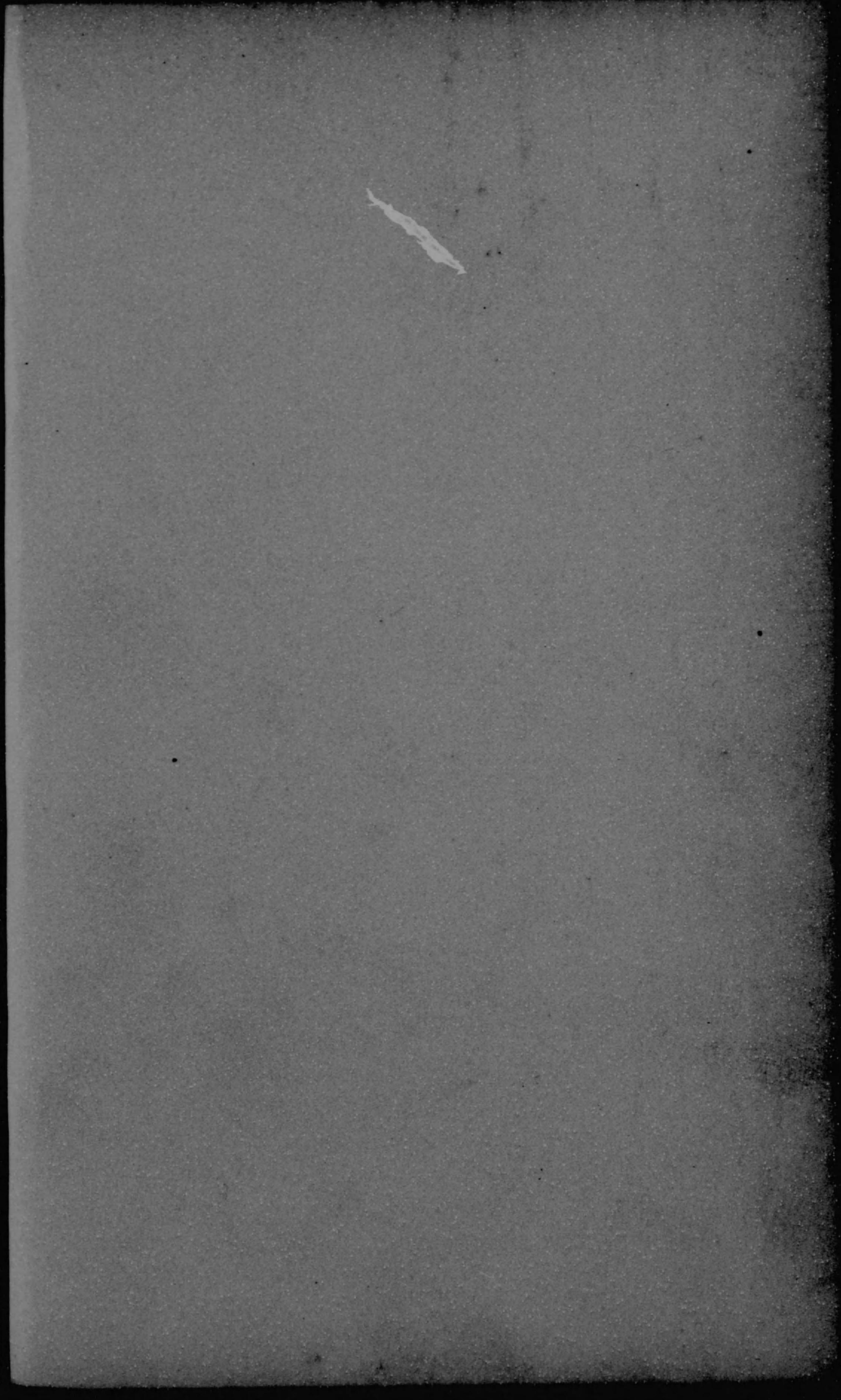
分類農語彙

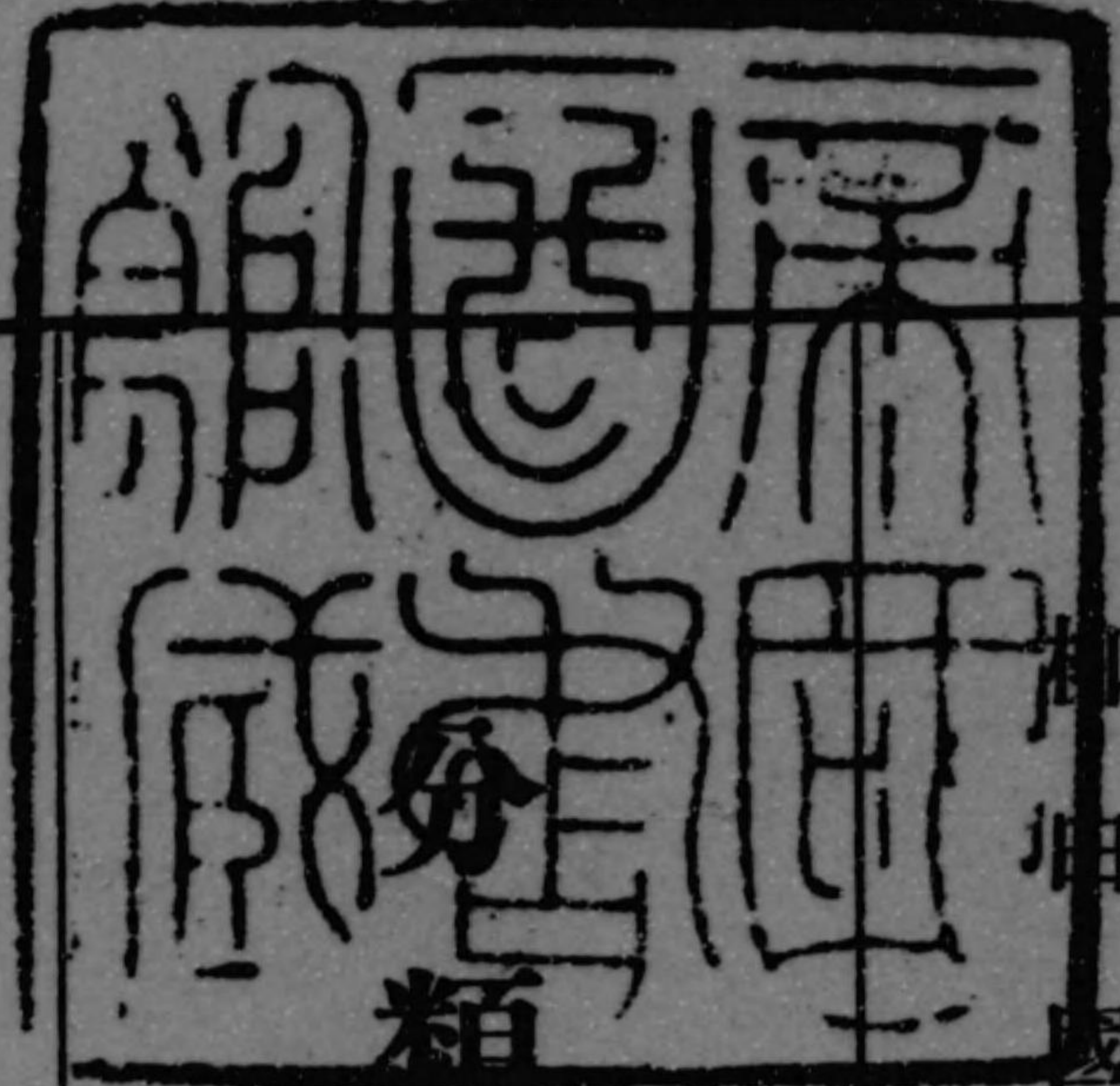
柳田國男著

信濃教育會編

734
22



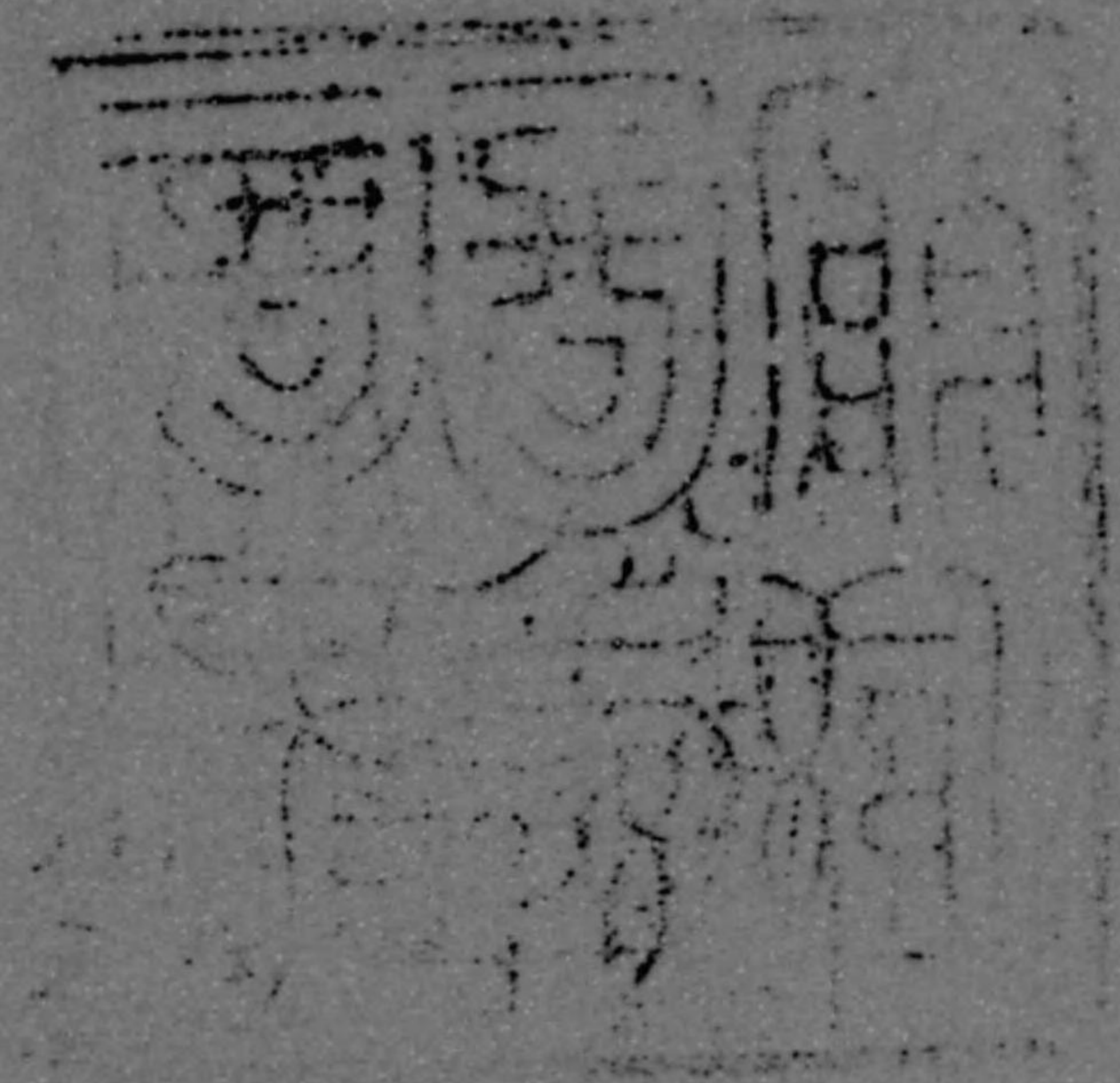




柳田國男著

分類
農村語彙

信濃教育會編



緒言

地方の言葉は、近頃の郡誌方言集等に採録せられて居るもの以外、人類學雜誌風俗畫報以來、自分が携はつた幾つかの定期刊行物までの中に、散見して居るものも數も相應に多い。是を出来るだけ寄せ集めて、整理し又比較して見たら、どういふ結果が現はれるであらうかといふことは、久しい前からの同志者間の話題であつたが、日増しに仕事が大きくなるので、つひ是に着手する勇氣が出なかつた。今度は愈々必要に迫られたによつて、前には先づ産育習俗と婚姻習俗との語彙を公刊し、第三次としてこの分類農村語彙を出すことにした。農村語彙といふ中でも、是は専ら生産に關する用語のみを、ほゞ其順序に従うて排列して見たもので、尙此外に消費生活に伴ふ語彙があり、村の組織に就ての興味ある多數の單語も纏まつて居る。前年農業經濟研究といふ雜誌に發表した農村語彙は、五十音順に此等各部の語を雜載したものであつたが、量に於ては却つて今回のものより少なく、且つハ行まで中絶してしまつた。もしこの様式を以て乙丙丁の分類語彙を出して見たならば、我々の學んだ言葉の數が、僅かの歲月の間に二倍三倍して居ることが明かになるであらう。

しかも一つの言葉を新たに知り、正しく記述するといふは決して輕少なる勞苦では無い。殊に書物の上には使用せられず、又往々不精確に言ひかへられんとして居る百姓の語を、注意し紹介しようとした諸君は、竝以上の同情と理解力とを、持つて居る人でなければならぬのである。さういふ篤志家の功績を蔭のものにしてしまふことは、自分としては誠に本意に背くのであるが、能ふ限り印刷を簡易にして、一日も早く利便を學界に頒つが爲には、是も亦止むを得なかつた。他日全體の日本民俗語彙を纏め上げる際には、必ず何等かの方法を以て、この共同の事業に參與した人々の名を、明かにしなければならぬと考へて居る。

次には採集地の問題であるが、是は資料の性質を明かにする爲に、至つて大切な點である故に、村名は之を略したが、郡島名は努めて記入して置くことにした。事實の直下に細注したものが皆それで、何れも郡誌類方言集又は雜誌の報告などに、印刷せられて居るものに據つたのであるが、その一々の出處は、自分を信用ある者として、之を掲げることを見合せた。たゞ原文が複雑であり又有益であつて、讀者に一讀を勧めたいものと、多少の疑念があつて責任の全部を私が負ひ難いものだけは、特に書名と雑誌の巻號とを表示してある。御斷りをしなければならぬことは、採集は多くは偶然であり、従つて一つの事實が或郡或島にあるといふ記述は、其他の土地には無

いといふ意味では絶対にないことである。自分は寧ろ周圍鄰接の郡島にも同じ事實あるは固より、時としては遠く離れた他府縣にも、偶然の一致は有り得ることを豫想しつゝ、たゞ其中の突留められた一二例だけを、明かにして置かうとするのである。それから今一つは、注記せられた郡島内にも之を忘れ、又は初から知らぬ人があるだけで無く、時には全く別の言葉を使つて居ることも有り得る。自分はたゞ少なくとも其地居住者の若干が、さう謂つて居るといふことを保障するのである。そんな事實は無いといふことを明言する人も折々はあるが、それは個人の殊に郷里を出て居るものに、到底許される斷定では無いのである。

ともかくも自分の語彙にはすべて根據がある。少しでも報告の心もとないものは、暫らくそつとして置いて第二の資料の出るのを待ち、いよいよ確かと判つて始めてこの系列に加へることにして居る。單に偶然其人だけが知らぬといふことを以て、誤謬と斷ずることは差控へてもらはなければならぬ。此書が代表して居る調査區域が、まだ全國の三が一にも及ばず、調査にも亦精粗の差が著しく、従つて遺漏脱落の多いといふことは、それは自らもよく承知して居る。しかし少なくとも利用者に対して受合ふことの出来る二つの點は、こゝに掲げた約二千の農村語は、何れも我邦のどこかの地に於て、誰かと現實につひ最近まで用ゐて居たものだといふことが一つ、次

には今ある幾つかの普通の字引の中に、是はまだ日本語として掲載せられて居らぬものだといふことである。この第二の點は一々に就いて確かめるといふことは出来ないが、大よそ心づき又は氣になる限り、悉く自分の手元にある辭典によつて、いやしくも内容の略同じものは皆削り棄てて、説明の重複を避けることに努めた。是は直接本書とは交渉の無いことだが、今ある多數の辭典は何れも互ひに他人の書いたものを切貼して居る。しかしこの分類農村語彙だけは、新たに今ある知識に附加することを本意とし、たとへ些かでもよその字引に既にあるものを、借りて來て量を増さうとはしなかつた。それで居てもう是だけの大きなものになつたのである。

勿論すべて皆誰かの知つて居る知識であつて、編者には何等發見の功勞があるとは言へないが、少なくとも本で學問をして居る都市の人々は知らず、田舎に住む者の多數も亦、互ひによそに在ることに氣付かなかつた。國全體から見ると大部分は新たなる收穫であつた。こんな簡単な又有りふれた事實をも知らずに、是まで一廉の物を言つて居た人が、多いといふこと迄は争はれない。さて是だけのことが國內の公有知識となつた曉、我々の人生觀はどう變つて行かねばならぬであらうか。自分は經國濟民の論議に、過去の精確なる歴史の缺くべからざることを痛感し、在來の農村史が史と稱しつゝ實は臆斷であつて、しかも改良の手段に乏しかつたことを經驗して居る。

新たなる文字以外の史料、記録以外の現前の事實に基いて、その歎かはしい弱點がどれだけまで補強せられ得るであらうか。その試みの第一歩を自分等は今踏出さうとして居るのである。後世この志を嗣がうとする人たちに、たとへ幽かにでもこの方法に見込があり、目的は決して間違つて居なかつたといふことを、承認せしめることが出來たら、自分等はそれで満足する。完全はもとより發願者の企て得る所では無いのである。

昭和十二年四月

柳 田 國 男 識

この本の編纂に關しては、財團法人
啓明會の援助を得て居る。茲に銘記
して感謝の意を表する。

分類農村語彙目次

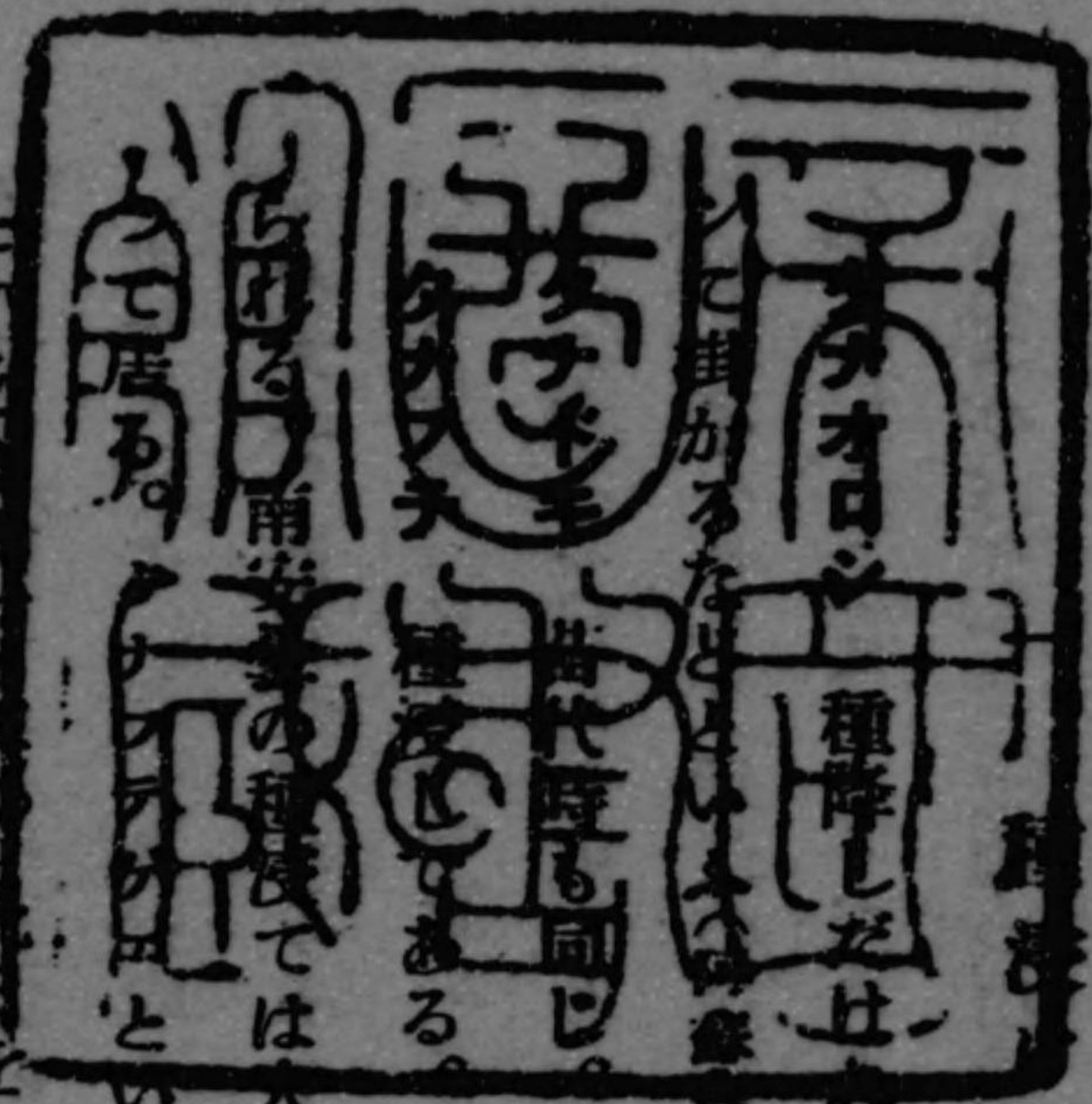
緒言.....	一
一 一種浸け.....	一
二 苗代ごしらへ.....	三
三 種播きと苗じるし.....	三
四 春田打ち.....	三
五 田地名稱.....	一六
六 水の手.....	三
七 肥 培.....	四
八 田 植 月.....	七
九 代ごしらへ.....	六
一〇 苗 取 り.....	七

一一	苗日苗止め	三七
一二	初田植	三七
一三	さんばい降り	三八
一四	田人と田植飯	三八
一五	花田植	三九
一六	代みて行事	三九
一七	草取り水まはり	四〇
一八	虫追ひ稻祈禱	四〇
一九	案山子	四一
二〇	掛穂行事	四一
二一	稻刈り	四二
二二	稻場稻架	四三
二三	稻村稻積	四三
二四	刈上げ稻上げ	四四

二五	庭仕事	四四
二六	白摺り俵造り	四五
二七	年買加徴	四五
二八	秋忘れ	四六
二九	田打正月	四六
三〇	地神降り	四七
三一	土地利用の段階	四七
三二	島作行事と名稱	四八
三三	作物種目	四九
三四	農具名稱	五〇
三五	牛馬飼育	五〇
三六	養蠶	五一

索引 三七九

農村語彙



種降しだけども、農事の始まりの意に用られる。雲雀が啼き出すとダナオロ
 ンと謂がるなどといふ(種降し事)。
 昔代時と同じ。關東にていふ。
 ヒタシを足利時代にはヒテと謂つて居るから、フテは其訛りと認め
 られる。南安の種降しは大抵四月十五日の諏訪祭の日に行ひ、諏訪様は田の神さまだからと謂
 いて居る。アサギといふ粥を食ひ、菜は必ず青物の浸し物、田の稻の青々と成長するやう
 といふ(種降し事)。此日をタナフタゲといふ者もあるが誤りであらう。

スチダハラ 種粳俵をいふ(北安曇)。種子をスチといふのは信州北部の特色で、古風かと思は
 れる。即ち血筋などの筋であるが、他ではもうさういふ意味には用ゐられて居ない。上水内・上
 高井でも稻種播きをスチマキ、小縣でも種粳をスチといふ。或は稻作だけに限られて居るのかも

種 播 け

一

表字略名誌雜用引

- (旅傳)..... 旅と傳説
- (旅)..... 同上
- (郷)..... 郷土研究
- (風)..... 風俗画報
- (人)..... 人類學雜誌
- (近)..... 近畿民俗

知れぬ。

タナキ 種籾を浸ける小さな池(志太)。池をタネ、又はタナイ(古志)、タナヤ(南蒲原)などと謂ふのは現在浸けずとも起りは皆種井であらう。井と池とは土地によつて屢々混同して居る。關東でも亦タネエ・タナエ(稻敷)、タナエド(長生)と謂ひ、越後には池をタナンボウといふ處もある(岩船)。

タナキ 東北で堀をタナキと謂ふのは(紫波)、是も亦種池であらう、或はタナギといふ例もあつて(津島)、タナキの訛かとも思ふが、會津地方へ來ると池をタナケ、近畿以西には明かにタナイケと謂つて居る土地も多い。

タナイケサン 近江の伊香立村では二月朔日に、種浸しの池に餅を供へ、此日を種池さんと呼んで居る(郷土風景三ノ七)。

タネキバラヒ 上總の山武郡では正月二十五日の行事として居る村がある。種井を浚へると共に男の共同飲食がある。女たちも此日オビシヤの祭をするといふから、休みの日を期して之を行ふのかも知れぬ。

タナイケサラヒ 長門大津郡など、種池は隨所田の隅に設けてあり、正月に日を定めて之を浚

へる。正月に種池さらひをする例は多いやうである。

二 苗代ごしらへ

オヤダ 苗代を親田といふ處は關東にも九州にもある(君津、大分)。

ナハマ 信州は一隅に苗代をナハマ、相州津久井郡でもナハマ又は單にマとも謂ふ。その他關東にはナイマダ(入間)ナマ(田舎)などもある。ナマもナハマの轉訛。

ノトコ 苗床。苗代のことをいふ(周桑)。

ノジト ナハシロをノジロといふ例が近畿四周にはあるから、このノジトもそれから轉じたものと思ふ。南牟婁などでさういふ。東北では一般にナハシロである。

ケタノウチ 常陸多賀郡で苗代のことを謂ふ。又單にケタとのみもいふ。歩いて廣さを測ることをケタを踏むといふから、區劃を意味する語かと思ふ。

ケジバタ 紀州の日高郡で、苗代の周縁をいふ。ケジは不明だがケタと關係のある語かも知れぬ。

ナハシロジメ 又ノシロジメといふのは苗代を作ることである。シメは占定の意であらうが、

苗代ごしらへ

苗代ごしらへ

此際現實に注連縄張る所もある(北島城)。

ナハマジメ 苗代作りを南北安曇ではネエマジメ、又ナハシロジメとも謂ふ。肥料を入れ整地をして、播くばかりにする仕事で、是がすむと神を祭り祝をする。東筑摩ではナガシロシメと謂ひ、此時ごしらへるシメモチをも又さう謂ふ家がある。

シメモチ 苗代ごしらへの済んだ日に搗く餅である。田の神様に供へる。苗間を青くすると謂つて、ヨモギ・チチコ等の青草を入れて搗くを例とする(東筑摩・南北安曇)。

ナハシロガユ 苗代押し即ち地ならしの終つた日、苗代粥を作つて苗代の水口を祭り、又神佛に供へ家一同で食ふ土地もある(東牟婁)。或は暮の餅搗きの日にマツカの餅といふのを作つて置いて、苗代の田打ちのすんだ日に皆でたべる例もある(南秋田)。マツカといふのは三本鉞のことである。

ハツテナハ 苗代の畔に鳥除けに張る綱(佐渡)。

フキリ 苗代地ならしの後に區劃を附けること、播き代幅約四尺、間に通路を設ける(君津)。

フは區分を意味する古い語である。

アクフリ 出羽莊内などで、苗代の雪を早く消す爲に灰を撒くことがある。それをアグフリと

謂ふ。灰は陽熱を引いて早く雪を消すのである(土の香二〇ノ三)。

モミフリ 上州新田郡の例、苗代は九十九夜頃にごしらへる。水口へ一尺四方くらゐのくれを切り、是に正月用のたハナカキを挿す。それをモミフリと謂ふ(民俗學二ノ五)。

ナハシロクサ 苗代の綠肥として入れる草。肥培としては最も古くから行はれて居た。播磨風土記大神宮儀式帳などにも、苗草敷くことが見えて居る。現在にも是に特別の注意を拂ふ土地が多い。

ヨテナハシロ 東北には苗代を二度作る處がある。その二回目のをヨテナハシロといふ(九月)。ヨテは物の端といふことらしい。

三 種播きと苗じるし

オマキ 越後粟生島では、苗代に種を播く日をオマキと謂つて居る。單なる日に對する敬語であらうと思ふ。正月の種々なる飾り木も、此日まで存して置いて焼くことにして居る(旅、六ノ一一)。

スヂマキ 信州北部では、苗代種播きの日をスヂマキと謂ひ、それを終ると休むことにして居

種播きと苗じるし

る。焼米を田の神に供へる外に、楊の枝を苗代に挿して、其枝の根つき葉を茂らするを見て吉兆とする風がある(上高井)。

タネマキオツコ 山に消え残つた雪の形に名を付けて、之を農候として居る土地は多いが、津輕の八甲田山の種播きオツコなどは、偶然にもその形が老爺の物を蒔く姿と似て居るので、一段と暗示を有方なものにして居る(栖家の山)。或は種まきちつさといふ雪の名を、傳へて居る土地もある。さう精確には似て居なくともよかつたかと思ふ。

タネマキザクラ 辛夷こぶしの花を、東北では種播櫻といふところが方々にある(仙北、紫波)。ちようど此花の咲く頃が、苗代種まきのしほになるからである。タウチザクラ又はイトザクラの名も同様の理由に出て居る。

トリノクチ 苗代の粗種蒔きがすんで後、焼米を作つて田の神様に供へることは、東日本一般の風と言つてもよい。その祭り方は、苗代田の水口に少しの土を盛り、そこに木の枝を立てて焼米を置くのが普通で、其木は栗又は躑躅の花などが多いが、西遠州ではカマヅカといふ木の枝を刺し(横志村民俗誌)、美濃には薄の枯穂と鳥の羽を三所に立てる處もある(郷、四ノ四)。斯うして置くと、鳥が先づ焼米を啄み、苗代の粗を食はぬやうになるからと謂ひ、鳥の口上げる又は鳥

の口にすゑるとも謂つて居る。焼米の外に、なほ鳥の口に麻の實を蒔く處もある(北設楽)。是も客鳥に對する機嫌取りのやうな心持がある。東北では糠除けのまじなひに焼米をあと水口に撒いた處があり(肥志和の若葉)、加賀では秋になつてこの鳥の口の行事をしたともいふが(物類稱呼)、現在も尙さうであるか否かを知らない。

トリノアシ 房州の苗代祭では、ヨセといふ水口の小土壇にイボタの木の枝を挿し、其下に、焼米を入れた小俵と共に、鳥の足の形をしたものを二つ、藁で作つて置いたといふ(土俗談話)。是も鳥の口祭の古い作法の名残かと思ふ。君津郡ではワガネといふ物炒りの具を、鳥の足に代用した。

ハトノクチ 九戸郡では、春の播種後の小宴を鳩の口と謂つて居る。此折にも焼米は食饌に上つたことであらう。

ミツカヤコメ 北安曇には三日焼米といふ語がある。種蒔きあまりの粗は三日の間に焼米にするものと謂ひ、又鳥の口を封じる爲に焼米にするともいふ。この焼米を作る時の粗穀ふるひ鎌は長蟲除けとして家のまはりに撒く。村によつては焼米をも其の爲にまく。

ヤキゴメモラヒ 種播き残りの粗は焼米として、神佛に供へたあとを、子供に分けてやるのが

普通である。上総君津郡では種まきの日に、主人又は作男がこの焼米を箆に入れて道の辻に行き一つかみづつ兒童に與へるのが習はしで、子どもは小さな袋を首に掛けて、それを貰ひあるくのを楽しみにして居た(民族二ノ四)。紀州の東牟婁でもヤコメ貰ひと稱して、村内の少年少女が袋を首にかけて、田の畦を貰ひあるく風が元はあつた。是も一種の呪ひの方式であつたことは、北三河でこの焼米貰ひを鳥追ひと謂つたのでも察せられる。或は鳥の口の祭がすむ前に焼米を食ふと、鳥のやうな口になるといふ處もあつた(讀名)。南北安曇では以前はこの日も盆と同じ様に、釜飯と稱して子どもが屋外の食事をした。

タナマツリ 苗代播種の日の祭をタナ祭、又は水口祭・タナバタ祭といふ土地もある。タナは種、タナバタは田端かと思はれる。炒豆焼米と共にキリコといふ小さな切餅を苗代の水口に供へ寄つて来る近所の小兒にも分けて遣る(飯南)。

タナダテ 阿波の麻殖郡では種播の日、苗代水口に萱の穂二本を牛王と共に立て、酒と焼米とを供へて祭をする。タナダテは其の焼米のことをいふ。

ミトマツリ 水口祭又は苗代祭のことである。山城相樂郡平尾のミト祭は種下しに先だつて行はれる。水口に土を圍く盛り、竹の棒に松輪、山吹馬野の花を括り付けたものを挿し、キリコ大

豆焼米の炒物を紙に包んで供へる。その松を松苗、神をオカギと謂つて、共にこの村の居籠祭の日に戴いて来たものを用ゐるのである(京都民俗誌)。

カラスヘイ 石城郡では種播きの日の水口祭に、牛王の札と共に十二本の烏幣といふものを立てる。それは正月神棚に餅を上げた紙を四角に切つたもので、篠竹又は茅に挿んで六本づつ兩方に立て、それに桜の花などを上げ、又種籾を供へ焼米も供へる(民族一ノ四)。

ナハシロガミ 水口祭の祭壇には季節の花、又は木の枝を立てる以外に、鳥の羽や鳥の足形をした藁細工なども置くのは、或は神の形代であつたかも知れない。正月十五日の粥かき棒を立てる處も信州にはある。常陸行方郡でも同じ日の釜火箸を、田植の日に田の中に立て、是を苗代神に上げると謂つて居る(民俗叢話)。

ヒビナホシ 種蒔き終りの焼米搗きも済んでから、慰勞の爲に與へられる休暇を、福島縣磐前郡ではヒビ直しと謂つて居る。ヒビの意味はよくは判らぬが、東京灣の海苔養殖に用ゐられる粗朶をヒビといふのと同じで、苗代に立てられる標識のことではないかと思ふ。

タナンボウ 苗代には播種終つて後、三本五本の楊の枝を、一列又は三角形に田の中に挿す風習が信州にある。是をタナンボウもしくはタナンベイ、或は田の神様の腰掛などとも謂ふ。木は

桂・うつ木・まゆみ・ヒヨウビ又は笹なども立てるが、楊が最も普通であり、且つ之に關しては昔戸隠様が、鬼の國から糶種を奪ひ取つて來られた時に、鬼が追つて來るので、之を楊の樹の下に投げられ、そこで芽を吹いたから云々といふ口碑もある(小谷口碑集)。さうして苗の芽吹きの様子にといふまじなひの如くにも考へて居る。苗取りにはタナンボウの周りの苗を取残し、田植がすんだ後の馬鍬洗ひの日に、之を三把に束ね、握飯を添へて神棚に上げる(南安曇)。此枝は根づいて木になると縁喜が悪く、挿してあるうちに枯れるのも不吉だとして、抜取つて川へ流す(同上)。上伊那でタガンボウと謂ふのも同じ語の變化らしいが、是は苗代の水口に立てる正月の粥かき棒のことで、勝軍木を以て作るから又ノリデ棒といふ村もある。タナベといふ名は小縣にもあるが、是は正月歳神棚に上げた十二ぜんの箸で、それを保存して置いて苗代の水口に挿すのである。

ナヘボウ 南安曇でタナンボウといふ楊の枝を、ネエボウと呼んで居る處もある。やはり三本又は五本、苗代田の中に又は水口に立てる。苗棒が根づき芽を出すことはよくあつて、其方は氣にしない。只それが枯れてしまふと近親に不幸があると言つていやがる(上伊那、小野村年中行事)。

ナヘジャク 下野芳賀郡では、苗尺と謂つて、苗代のまん中に棒を立てる。是を雷除けとも又

雷除けとも謂ひ、或は是によつて占ひをする風もある。中央より折れるは吉だといふ(民俗學二ノ一二)。此棒は埼玉茨城の二縣にも折々見かける。雷の落ちた場所を標示するなどといふ者もある。

ナヘミダケ 石城郡ではナヘミ竹といふ細い竹を、苗代のまん中に立てる。是については北安曇のタナンボウと、相似通うた言ひ傳へがある。大昔稻荷様が天竺から稻穂を咬へて來てそれを蒔き、よその者に荒らされぬ様に、心覺えに立てたのが此竹で、無い／＼と謂つて居たからナイ(苗)といふのだ云々。田植の日には此竹を二つに折つて見て占ひをする。兩方の長さが同じなれば思ふことが叶ふといふ(民族一ノ四)。苗見竹と書くやうだが、實は苗忌竹で、やはり田の神の依りましかと思はれる。

ナヘジルシ 奥州南部領では苗代に苗じるしといふものを立てる。材料は地竹の細いのが多いが、他に楊・うつぎの枝・又葎なども立てる處がある。普通は一本で、家により二本三本、稀には四本以上も挿し、其挿し方にも家々の流儀があることは、木じるしや陶器の竈じるしに近い(民俗學五ノ一二)。其由來に就いては二つの言ひ傳へが知られて居る。一つは五月二十七日に三粒でも雨が降ると、曾我の雨と謂つて曾我の五郎が苗代をあるいて踏み荒す。それを防ぐ爲に竹を

立てるといふもの、今一つは稻荷様が支那から稻種を盗んで追ひかけられ、之を濱へ埋めて覚え
じるしに葎を立てて置いた。それから苗代に葎を立てることになつたといふ。苗忌竹やタナンボ
ウと、起りが同じかつたことは是から推測し得られる。

ミナクチダケ 田の水口に竹を刺す風は、九州の方にも残つて居り、之を水口竹といふ處があ
る(肝属)。ただ其目的と方式が、今はまだ詳しく知られて居らぬのである。或は八十八夜には必
ず霜が降つて、苗を害するといふ言ひ傳へがあつて、此日は古笠を杖に被せて苗代に立てる土地
もある(遠賀)。是なども同じ習俗の残留かも知れぬ。

カベ 出雲八束郡の海岸部では、カベと稱して苗代のまはりに竹を立てる。

マボシ 飛驒の丹生川では、苗代に立てる楊の枝をマボシと謂ふ。之を以て苗の日負けを防ぐ
といふ。狩のマブシも目隠しの意だから、同じ言葉であらうと思ふ。

メボシ 種蒔き後十日乃至十四日目頃、田の水を切つて苗の芽を乾すことを芽乾しといふのは
マボシとは關係が無い。或は雀の害を避けて夜分に水を乾すので、之を夜乾しとも謂つて居る
(北葛城)。

タネマキガユ 苗代終りの焼米祭り以外に、別に種蒔祝をする土地もある。南安曇の一部では

種蒔粥を煮て田の神様に供へる。

ハツプロ 稻の播種後の祝祭は、近世次第に簡略になつたやうに考へられる。奄美大島に今も
行はるるハツプロといふ祭は種おろしの祝であつた。舊九月十月の境に近い庚申の日に、早蒔き
の種籾を蒔き、カネサル餅といふ巻餅をこしらへて一日遊んだ。少年少女竹の皮の假面を被り變
装して踊り、此餅をもらひあるいたといふことである(人、三七ノ四、旅、六ノ八)。南の島々の農
作行事は、比較研究の一方の出発點になつて居る。

四 春田打ち

タブチ 以前は春の農事の眼目は、田を打つといふことに在つた。二毛作が普及して、仕事の
半分は初冬へ繰上げられ、更にからすきの採用によつて、耕耘の方式が又變化した。田打ちとい
ふ語は、今は東北其他の片隅にしか残つて居ない。九戸郡などでは田を鋤き返すことをタウチ、
又はタウシキと謂つて居る。其シキも鋤きであらう。安藝の山縣郡では、ふけ田を人の手で切返
すことのみを今は田打ちと謂つて居る。

サラタウチ 飛驒では馬耕が既に行はるるに拘らず、田打ちといふ語がなほ用ゐられる。サラ

田は乾田でノマ田打ちに對する語、二種の田打ちは方法にかなりの差がある。共に苗代親蒔きが終つてから取掛ることになつて居る(ひだ人四ノ六)。

タウチザクラ 秋田縣では辛夷即ち南部などで種蒔櫻又は絲櫻といふものを、古くから田打櫻と呼んで居る。是も亦一つの農候であつた。此地方で種蒔櫻といふのは、彼岸櫻と近い紅の濃い一種の山櫻のことだつた(山本・孝毅の遺)。

米ダサレモチ 田打ち初めの日に作る餅をさう謂ふのは(鹿角)、追出され餅の意であらう。もう此日から内に居られぬといふことを戯れて名にしたものと思ふ。

タキリ 水田の土塊を碎く作業を謂ふ(三河西加茂)。或はシロキリ、又カネキリといふ處もある。是を夜の作業として居る土地では夜田切りともいふさうである。

タホドキ 豊岐では稲の刈株のある田をイナガラと謂ひ、それを鋤起した跡を更に鋤返すのを田をぼどくと謂ふ。ホドクは土を細かにすることと思はれ、島の土を持つて高みに戻す作業をもホドキと謂つて居る。

カツカベ 稲の刈株のこと(九戸)。刈株のある田をカピタ(石城)、又はカベタともいふ(佐渡)。

カピタヲコシ 春になつて株田を最初に起すこと(多賀)。其次の作業をここでは小切りと謂ふ。

カベツタウナヒ 株田転ひ。苗代田の初耕のことだといふ(君津)。即ち苗代以外の田は、冬前にもうなつてしまふのである。同じ地方では何故か是をハンタイとも呼んで居る。さうして第二耕をクレガヘシ又はキツカヘシと謂ふさうである。

アラタ 株田のこと(邑久)。

ワケウチ 佐渡國仲地方では、田を打つときに各自の持區を割りつけて、仕事のせり合ひをさせる。最後まで残つた者が皆の跡片付けをする。それで斯ういふ唄があつた(佐渡の民謡)。

とのはかべ田の分け打ちさうだ

おれも行きたや助太刀に

但し是は秋田打ちの時だといふ。

ムキタハネ 麥田を打ち起す田植前の仕事、又ハネ田ともいふ(三河東西加茂)。

パネヌク 莊内地方にて、パネとは田の底にある黒くて堅い土だといふ。道普請などの際、之を道に敷く爲に掘り出すのをパネ抜くといふさうだが(土の香一一ノ二)、抜くといふからには田の爲にも必要な場合があるらしい。パネは多分埴ハニと同じ語と思ふ。

カチウナヒ 田を人力で耕すこと(北葛飾)。馬耕に對する語である。

ヒキクハ 馬耕の行はるる以前、鉞に繩を付けて人が牽いて居た時代がある。其耕法を引鉞と云ふ(飛騨白川)。

チミ 田島を鋤起す時の鋤の及ぶ深さをいふ(淡路方言研究)。

フンガヘシ 田を鋤返すこと(九戸)。鋤踏むといふ言葉は弘く他の地方にも行はれ、又現實に踏んでも居る。

エボウナヒ 常陸では田の二度目の耕耘をさういふ。同國稻敷郡では又シモヲコシとも。

モクチイレル 讃岐仲多度郡で、サコ即ち一毛作田又は苗代田を鋤返すことをいふ。モクチは緑肥のことかと思ふ。是は塊返し後の第三次の作業で、それから引續いて代ごしらへの作業に移つて行くのである。

カツバラヒ 株拂ひの祝。田打ちが一旦終つた際の慰勞休みを、さう謂つて居る處がある(鹿嶋)。

五 田地名稱

トウモ 村の周圍の耕地をトウモといふ例は多い。それを短くトモと謂つて居る土地もある

(員辨、頓田)。田面か外面かはまだ明かでないが、兎に角に田圃などと書くタンポと、元は一つであつたことは想像せられる。田圃は思ひ切つた當て字で、少しも此語の説明にはなつて居ない。多分水溜りを意味するタンポと、このトウモとが合體したものであらう。

ドブゴウチ 埼玉縣南部の村落には此地名が多い。ドブは東京などでは下水のことだが、在方に行く沼又は濕地を意味する。それを拓いて田にしてから、土浮・土府もしくは土富耕地等の佳名を與ふるに至つたのである。タンポといふ語も或は是から出たかも知れぬ。湊の船溜めをタンポと謂ひ、淇浦などの字を宛てて居るのも、元は只水をたたへた處のことであつたらしい。

アカ 千葉茨城の二縣に連なるや、廣い地域だけで、所謂田圃のことをアカと謂ふ。縣あがたの略だといふ説もあるが確かでない。上總山邊郡では農民をアカウドと謂ひ、即ち山邊赤人は此地から出たといふ(俚言集覽)。此説もこしらへものかと思ふ。

ツリ 宮崎縣南部では、ツリといふのが田圃又は郊外のことだといふ(日向の言葉三)。九州の地名に多くあるツルと同じ語であらう。ツルは津留とも出流とも書いて、川に沿うた少しの平野を意味する。

コウトウ 仙臺附近で、田地の廣く續いた平野を、それぞれ何々コウトウと呼んで居た(撫子日

記)。關東などで耕地といふのに近い。是も耕土とでも書いたらうかと思ふが、兩方とも起りは河内では無いかと思ふ。

ウイ 紀州熊野では、山あひの一區の田地をウイと謂ふ。村の名の長追ナガオヒ・神上カウノウへのオヒもウへも、共に此ウイだといふ説が續風土記に見えて居る。熊野古來の三苗字といはれる鈴木榎本宇井の宇井氏も、是と關係があることは確かである。但し若狹の名田莊にも納田追ノタオヒといふ村の名があるから、元は相應に弘く知られて居た名詞のやうである。

カハメ 岩手縣北部から青森縣にかけて川目澤目といふ地名が多い。何れも流れを横ぎる交通から出來た名だが、澤目は狭くして谷合ひに該當し、川目の方は廣く平かで、しばしば田處といふ意味に用ゐられて居る。

シマ 信州遠山地方では田地の連なつた處をシマ、之に對して島をカイトと謂ひ、遠州の方でも田地をタジマといふ處もあるが(濱名)、他の多くの地方では川の岸に臨み、又湖沼に接した部分に限られ、且つ田島を併せてさう呼んで居る。上州の利根川、丹後の由良川、阿波の吉野川などの流域で、シマといふのは何れも流れに近い田園のことであり、紀州那賀郡では田島に行くことをシマ行きと謂つて居る。埼玉縣の丘陵地帯では、谷地ヤチの行止りに在る島地をシマと謂つ

て居る。つまりは水から取出した耕地だから島なのであらう。但しシマといふ語の用法は、地方によつて少しく標準語とはちがつて居る。沖縄ではシマは村落を意味し、島をばハナレと呼んで居る(シマの話)。美濃土岐郡でも部落をシマと謂ひ、路傍の石塔などに島内安全と刻したものを見かける。

タノシマ 越後の蒲原平野では、廣い水田の間に挟まつた僅かの島を田の島と謂ふ。

ことしや十三だよ田の島さゝげ

人が十六だと言うてならぬ

といふ俚語もある。この十六は娘の年と十六角豆とに引かけた語で、女の早熟を興じたやゝみだらな歌である。

セマチ 九州から四國の西半にかけて、田の一區劃をセマチと謂ふ。

腰の痛さよ せまちの長さ

四月五月の日の長さ

といふ有名な田植唄もある。肥後の矢部郷には百阡萬と書いて百セマチといふ處が、田毎の月の名所になつて居た(國志)。或は畝町とも瀬町とも字を宛てゝ居るが、恐らく狭い田區の義であら

う。町は元來は田積の單位であつた。一段が三百六十歩であつた時代には、四角な一町歩の一邊は長さの一町であつた。畝町は其一邊を細かく割つた長方形の名だつたかも知れぬが、後には形によらず田一枚のこととなつた。たとへば伊豫の浮穴の山村などで、セマチが小さいので一段歩の畔作りに、人の手が四十人もかゝるなどといふ。セマチを又ゴウラといふ地方もあるが(玉名)、其意味は判らない。

ウゼマツ 五嶋の奥浦などでは、最大の田畠をさう謂ふ。大セマチである。是に對して又小セマチの語もある。

ヨワタリマチ 田の一區を又單にマチと謂ふ地域も多い。世渡り町は家代々の田で、毎年の祝米を取る田をいふ。さういふ中でもカドマチ即ち門田は殊に大切にし、ヤゼは人手に渡してもカドマチは離さぬなどといふ(安藝山縣)。ヤゼとは爐傍の女房座のことである。

コジリノマチ 一番下の田、上から見て最終の田(周防熊毛)。壹岐島でも、島の一端、低い方をコジリと謂ひ、之に對して畠の高みをワネと謂ふ。

マチダホシ 小さい田を併せて大田にすること。即ち二つのマチの間の畔を取拂ふことである(石見那賀、鹿尾)。マチは田の一區を意味し、大きい田を大まちと謂ふ。

このまちはいかに大まち云々

といふ民謡も此地方にはある。壹岐では畦畔を崩して一枚の田にすることを、セマチダワシと謂つて居る。

ヲサナホシ 東日本は一帶に、田の一區をヲサと謂ひ、長ヲサ二枚ヲサ等の小字名が關東には至つて多い。耕地整理などいふ物々しい官廳語も、村では簡單にヲサナホシと譯して居る。ヲサといふ語は機織具の箒、菌の裏面や魚の腮などの、一枚々々をもいふから、大よそその古い心持はわかる。

ダン 飯島の或部落では田畠の一まちを段といひ、又或村では畠だけに段、田の方は一セマチと呼んで居る。耕地に傾斜があるので事實又段になつて居る。

キタナカ 五畝歩即ち一段の半分をいふ(日高、邑久)。面積の一段をキタと訓むのは古語である。是が段階の段から起つたといふことは想像しにくい。偶然に漢字が同じいのであらう。

ヒヤクカリ 田積の單位に百刈といふ語は方々に残つて居る。之を約一段と見て居る土地もあるが(平鹿)、必ずしも普通でない。又豊凶によつても無論ちがふべきだが、大體に鎌の二手打ちを一把、十把を一束とし、是を又一刈とも謂つたのである(民事慣例類集)。

ヨセ 畦畔のことをいふ(香取)。土を寄せる意味かと思はれる。(タナンボウの條参照)。

エゼ 飯島で段島の端の方をカメエゼ・シモエゼ。其下エゼを又前あぜといふ部落もあるからエゼがあぜと同じ語なることを察し得られる。

シハウアゼ 四方畦。路に面せず四方とも畦になつて居る田。耕作殊に收穫の時に不便が多いので嫌はれる(仲多度)。

アブシ 岩手縣中部では畔をアブ、豊岐島で田島の畦畔をアボシ、薩摩の葛輪島でも島と島との間がアブシで、多くは石垣になつて居る。沖繩ではアブシが田の畔のことで、アゼといふ語は無く、アジマー(アゼマ)と謂へば四辻のことである。校倉といふ木材を組んだ建物をアゼクラ、又アザナフといふ動詞などを考へ合せると、アゼは本來縦横に通つた線の意らしい。

ケタ 田の周囲の高い畦畔(大原)。

カイネ 淡路島では田島の地堺のみをカイネと謂つて居るが、他にもカイネンといふ語を屋敷境の意味に用ゐて居る處がある。越中のカイニヨ、關東東北のクネと、もとは一つの語かと思ふ。

サカタ 畔即ち田のあぜのこと(紀那賀)。古語で境を意味する。

ボタ 田畑の縁の斜面の草生地、又石垣にもなつて居るが、屋敷まはりの石垣はボタとは言はない。

ワモト 傾斜地に段々になつて居る田面のうち、上の田に寄つた部分をいふ(下伊那)。ウハモトであらう。之に對して下の田に寄つた方をアゼモトと謂ふ。

ゴン 田島の畔の外側(阿武)。

マド 上の耕地と下の耕地の間の地(佐渡)。アドともいふとあるが疑はしい。信州では之をハサコといふらしい(下水内)。

ナカアヒ 豊岐で田島の畦畔に附屬する草生地をナケエと謂ふ。

モジ 田の脇に在る僅かな林地(上新川)。關東でコサバといふのも、耕地周囲の山積きになつたところで、之を刈上地などと譯して居る(林業辭典)。

オホナ 田の中の小路をオホナといふ例は、關東にもあり、又青森縣の東半にもある。諏訪湖畔に此語存し、大繩即ち最初の分割線のことかといふ説は當つて居るやうだが、なほ別に田畑の外側をウナウーナと謂ひ、又田の畝をもウナといふ所があるから(濱名)、留保しなければならぬ。

ヤナ 上總では田島の周囲をヤナといふ。或は島のへりだけに限つていふ處もある(長生・津安

房)。

ウマイレ 耕地の間の路を、信州では又馬入れともいふ(南佐久・諏訪)。

マクラ 田畠の片端を枕と呼ぶ土地は廣い。實際に畝が枕のやうに、そこだけ横になつて居る。北葛飾では苗床の半ばなものをいふ。之をマゴ又はヒコサクとも呼んで居る地方もある。横枕といふ地名も地割りの際に、そこだけ堺の線を他と直角にしなければならなかつた地形らしい。フクラ 田地でフクラといふのは、畦畔が外へふくれ出て居る部分。鋤をはづさずに鋤き廻しをするので、十分に細かく鋤けない(上新川)。

ゼンダナダ 山の麓などの段々になつた田地。膳棚は臺所の膳を載せる棚のことである(肝屬)。棚田といふ語は廣く知られて居る。特に膳棚といふ必要も無いやうだが、多分はこの膳棚の珍らしかつた時代の命名であらう。地名としても數多く残つて居る。

ホツク 畠の間に挟まつた少しの田。茨城縣には地名になつて處々にある。發句・堀區などの字が宛てゝある。或はホツバとも呼んで居る村もあり、起りは開墾の意であつたのが、ホルといふ語の感じから、自然に狭いものだけに限られることになつたかと思ふ。

ホリタ 開墾地(水上)。此語は多くの地方では、今は主人に内證の私財のことを意味するやう

になつて居り、私生子をホリタ兒などいふ例さへ出來て居る。元は家族にも小規模な開墾を許したのだが、後々其場合しかホリ田とは謂はなくなつたからかと思はれる。

シンキリ 新切りも廣く開墾地のことであつたが、現在は土地によつて、切畑を田にしたものだけをさう呼んで居る(北安曇)。

カラメ 所謂干拓地のことを、開き又はカラメといふ處がある(藤津)。この動詞カラムは絡むでは無く、乾かすを意味する方言のやうである。

ツキチ 築地といふ語は市街宅地に限らず、埋立開墾の田畠にも用ゐて居た。多摩の川岸にある築地といふ村なども、地形によつて容易にそれを判することが出來た(新編武蔵風土記稿)。月田・築田といふ地名は越後その他に分布して居る。

ガウダ 平坦な所の田(小田)。郷田といふ語であらう。郷は此場合には民居の集まつた區域で、そこに近いといふことが名を分つ必要のもとかと思はれる。

オソモンダ 二毛作田のこと(上新川)。遅物は晩稻のことかと思ふが、爰では所謂裏作の意に用ゐられて居る。

ムギヨタ 九州南部では二毛作田をムギ田(肝屬)、即ち麥も作られる田の義である。愛知縣で

は之をムギヨク(知多)、即ち麥生の田であつて、なつかしい古語である。田麥澤といふ地名は中部地方の山地で折々出くはすが、是も多分そこに少しの二毛作田があつたといふ事實を談るものであらう。

ウエタ 田植をすませた田の意味に使はれるのが普通だが、大隅では馬耕が出来て田の植ゑらるゝ所、即ちムタと對する語だと謂つて居る。

サラダ 乾田即ち排水の出来る田(額田、飛騨大野)。

ハルタ 此語の意味は土地によつて逆になつて居る。備後では之を乾田のことだといふ處があるに對して(産品)、周防大島では水が溜まつて一毛作しか出来ぬ田だと謂ひ、岡山附近でも紫雲英を作る田といふ。淡路でハリタと謂ふのもフケ田と同じで、年中じめくして麥作は出来ぬ田とのことだが、ハリタ・ハルタはもと墾田であらうから、此解釋の何れが正しいかは言れ切れな。静岡附近では水田をハダと謂ふ、この水田も水のある田らしい。

ハツキ 乾田のことをいふ。ヒドロに對する語(登米)。

アゲシ 冬期落水をして二毛作の出来る田(一志)。或は之をアガリと謂ひ(仲多度)、又はアゲタといふ處もある(玉名)。土地が高燥で水害の患ひなく、又米の質のよい所をアゲといふのは古

語で、今もまだ方々にある(紀伊、淡路、土佐)。或は濱に對して岡方の村居を、一般にさういふ地方もある(天草、出水)。

ソリクボ アゲと同様に高くして乾きのよろしき田所を、土佐ではソリクボと謂つて居た。是に對して低地の方を只クボといふ(舊高知藩田制概略)。石州でも高地の田がソリである。

ナガレ 山峽の水利のよい田(知多)。

シド 水口から遠い田といふ(九戸)。

ミスイ 又ミスイ、水掛りの無い田。無水と解せられて居る(仲多度)。關東では天水場といふが普通である。

テン 諏訪で乾上つた田をテンと謂ふのは、テンコウボシの略といふ。他の地方ではテントウボシと謂つて居る。

ガラク 早魃しやすい田(讃岐)。カラク(乾く)といふ動詞からこしらへた語らしい。

カヘタ 土地が高くして屢々用水を汲込まなければならぬ田。又ハタケ田とさへ謂つて居る(印南)。カヘルといふのは水を汲むことを意味する方言である。

ヒホツダ 又單にヒホツとも、水もちの悪い田である(壺岐)。

コナダ 一毛作田をいふ(上新川)。中國地方でも、山あひの麥を蒔かない田をさういふ處がある(佐渡)。斯ういふ田は植付けが早い。或はさういふ田をクナともいふ(眞庭)。焼畑のクナと關係があるのかも知れぬ。

コガセ 一毛作田(高田)。コナダの訛りではなからうか。

ナメツタ 水の常にある田(伊豆)。

ヤダ みづ田をヤダといふ(磐城石川)。濕地をヤチといふのと關係がある語らしい。

アガリサコ 仲多度郡では沼田をサコと謂ひ、排水自在の田を意味するアガリと對せしめ、單に田といへば後者だけのことだといふ。兩者の中間にアガリサコといふのがある。或期間水は乾くが、なほ裏作の出来ない田である。

クロシロ 稲作のみをする水田(阿武)。岡山縣でも水のたまつた田をクロタと謂ふ。クロは斯ういふ田の岸のことで、アゼとはおのづから別の語だつたかと思ふ。

サビタ 谷あひの陰地に在る田で、冬の間落し水をして二毛作は出来ない田(一志)。三河の方ではサビタは乾田だといふ處もある。必ずしも水の多い田とも見えぬから、ザブタと關係があるとも言へない。

ザブタ 年中水のある田(小田、兒島)。ザブは田で無くとも水の多い所を謂ふさうだから、音から出た言葉かと思はれる。藝備の諸郡では濕地をソウダと謂つて居る。

スダコ 泥田(邑久)。

ヒドロダ 信州各郡では泥深い田をヒドロ又はヒドロ田。關東でもさう謂ふかと思ふ。秋田縣の南の方では窪地をヒドロツコ、山形縣にも略一様に、ヒドといふのが谷あひの濕地である。畚といふ宛字をこしらへて用ゐて居る。

フケタ 東國では泥深い田をいふ。フケは越前などでは沼又は池のことで、地名としては更に廣い地域に用ゐられ、泓・瀆・澗その他の漢字を當てゝ居る。つまり開發以前の地名を保存したものである。九州のムタも同じ例であつて、多くは濕原を意味し、一部分は沼田をさう呼んで居る。

カマタ ふけ田を八郎潟の周圍ではカマ田といふ。底無しカマ田、板カマ田などの名があり、後者は腰くらゐの深さで、下は盤になつて居るものといふ(寒風山麓農民手記)。カマといふ語は通例山川の小さな淵、又は湖底の窪みなどの名である。

ツミタ 排水の出来ない沼田で、田植をしても苗の育ちにくい所では親播きをする。種を摘ん

で入れるから摘み田である。種子量を多く要し、且つ除草に人手を費すことが多い故に、田の多い所では摘み田は作らない(粒々辛苦録)。東京の周圍にも元は多くあり、之を又蒔田とも呼んで居た。稻刈りにはカンジキをはき、植田と比べて筋つけつみ上げ株ぎめ等の餘分の作業があつた。

シヨツミ 濱名湖の四周でいふ。苗代を設けず、靱を一つまみづゝ直接に田に蒔く作業をいふ。シヨヅムは指先を集めて物を持つ、即ち摘むつまむを意味する方言である。

ミウエ 大隅肝屬郡では、摘み田即ち靱蒔田を實植と謂ひ、新開の田などで之を行ふことがある。或は田植に對して是だけをタツタイ(田作り)と呼んで居る。

ドギ 深田に入つて働く者の便宜に、其田へ入れて置く木。松でも杉でも、何年も腐らずに居る(一志)。

オホアシ 泥田に入つて行く者が履いて居る板製の大型の足駄。是に紐を附けて兩手に持ち、巧みに操つて土を均し、又刈敷や草肥を田に踏入れる。全國に亘つて用ゐられ、従うて色々の異名もある。東北には之を使ふ時の大足踏み唄さへ出來て居る(東磐井)。佐渡ではオアシ、安藝の山村ではオアセとも謂ふが、九州には之を只アシダと謂ふ所もあるから(肝屬)、大足駄の略であることがわかる。信州にもこの大足が行はれて居る外に、木曾では又輪かんじきをも大足と呼んで居る。

ミツゲタ 静岡縣では水田へ履いて入る大足を、水下駄・田下駄・稻刈下駄など、土地によつて種々の名を用ゐ、其製作にも若干の異同がある(旅、七ノ六)。南蒲原郡のヤチゲタは形もやゝ小さく、えぶりふませの用には供せられない。萱刈りの時にはくものといふ(越後三條南郷談)。

サハホクリ 土佐では窪田に田植をするときに、澤木履といふものを履く。是は木の枝を二尺五寸周りほどに曲げたもので、かんじきの方に似て居る。それへ板を張り緒を通して、木履のやうに履くのである(風、二ノ九)。駿河の富士郡などのアゼブクリは、附近の大足や水下駄と、さして異なる所が無い。

ナンバ 佐渡でナンバと謂ふのは、雪中に履いて出るかんじきの一種で、木又は竹を輪にして藁繩を縦横に渡したものだ、茨城縣の南部では、田下駄のことをナンバナバと呼んで居る。駿河のナンバは大足よりもすつと幅廣く、ごく深い所で履くのを三尺ナンバ、浅い田にはくものを草履ナンバといふ。三河寶飯郡のナンバは一尺平方の板で、主に沼田の稻刈に用ゐて居る。難場の用具なればにやといふ穿つた説もあるが(駿河志料)、名の起りは南蠻で、やはり近世の珍らしい發明を意味するであらう。

クブネ 田舟の用ゐられて居る田は、越後をはじめとし關東にも稀でない。人が乗るのでは無く、苗や肥料を配り刈稻を運ぶ爲で、隱岐では小さな箱だといふ。海に近い土地では農作以外にも、夙に利用せられて居た運搬法かと思ふ。

ナヘフネ 肝屬地方の苗舟は長さ鯨尺で二尺二寸五分、田人三人で一艘を使ふことになつて居るといふ。

キツソフネ 蒲原の低地で、やちの茅刈りに用ゐらるゝ舟。前後が共に尖つて居るのは、茅原の中を進退する便宜の爲であらう。各戸に之を持ち、常は肥料小屋などの梁の上に擧げて置く。

六 水の手

アテクチ 水口即ち水を當てる口。苗代ごしらへ又は田植の日、こゝを祭場として祭を營む例は多い。最も簡単な形としては、此水へ神酒を注ぐ處もある(日田)。

ミナクチガタツ 水口は水がまだ冷たいので、其近くだけは稻の成育が悪い。是を古くから水口が立つと謂つたらしい(東筑摩)。或はそれをサーダチと謂つて、こゝだけは稗を作つて置く例もある(東伯)。安藝山縣郡では水口をムナクトと訛つて居るが、水口の稻の穂を垂れぬことだけ

はミヅクチが立つと謂ひ、乃ち之を避ける爲に、特に冷水に堪へるミヅクチモチといふ糯稻をそこに作る。

ミヅクチイネ 籾又は赤米といふ一種の稻を水口稻と謂ふのも、是が能く水口の水の冷たさに堪へるからである。水口だけに必ず此苗を植ゑることにして居る村も折々ある。粒の赤い炊くと赤飯のやうになる米である。

アトクチ 田の水口に對して、出口の方をアト水口、又單にアトともいふ(隱岐)。東美濃では之を後口と謂ひ、田植終りのサナブリの祭の苗を、翌日こゝへ持つて來て植ゑる。即ち最後の植場である。

アトシバ 飛騨では田植前の支度として、アト水口に芝を踏込み、一年中の水加減の便にする。又アト松葉と稱して姫子(松)の三尺ほどのものを一本、そのアト芝の上に栽ゑて、水の流れるによつて穿れぬ様に土留めとし、或は松葉の代りに花菖蒲を植ゑて置く家もある。現今は多くアトムシロといふ蓆を使ふやうになつた(ひだ人四ノ六)。

ミノデ 田の後水口を出水口、又はミノデといふ地方もある(印旛)。田の祭は多くは水口の方で行ふが、この水の出の方にも正月のモチ箸などを立てることがある(芳賀)。

ミト 土佐ではミトを田の水口のことだと謂ひ、

春の夕焼けミトを下げ

といふ諺もある(土佐俚語集)。しかしミト水の間だから、必ずしも田毎の引口には限らなかつたらう。阿波の祖谷山では水を水車へ送るときは、分流から樋に移る所がミトだと謂ひ、紀州の西部諸郡でも、大きな山田の水を加減する爲の溝をミテといふさうである(和歌山縣方言)。

シド 津輕で水田の下をシドといふのは、下水溝をスドセキと謂ふのと一つの語であらう。外南部の方でも池などの水門をスドと謂ひ、又水流の下手がシトだとも謂つて居る。スドは多分流れが土砂を沈澱させて、浅くなつて居るからの名であらう。さういふ意味のスドは、富士山下の須津(スド)を始めとして、中央部には地名となつて幾つか傳はつて居る。

タンド 田の水がよくかゝる様に、水口などをよく浚へることだといふ(肝屬)。由つて來る所を知らない。

ウダリ 上の田から餘つて出る水(比美)。

ヌルメ 南安曇で苗代の水面部又は溝のことをヌルメといふのは、諏訪で用水の掛け口をヌルメと謂ふと同じ語で、冷水を稍温める爲に日に當てる場處の意であらう。山村としては是が最も

大切なわけで、他でも名は色々あるが、田の近くに若干の水面を置いた所はよく見かける。

ヒエボリ 水を温める爲の水路を、又ヒエボリといふ土地もある。冷堀かと思ふ。是と田との

間の畔をケミクロといふ(多賀)。ケミは濕地の意らしく、シツケミといふ地名が關東には多い。

ヨケミソ 水をぬるめ又は次の田に送る爲に設けられた溝。ふけ田にはその必要が無いから附いて居らぬ(安藝山縣)。

オンマシ 水口又は淵のことだと報告せられて居るが(印旛)、是も追廻しであつて、田に掛ける前に暫らく温めて置く爲の水面であらう。さういふ水溜めは多くは掘り窪めて深くしてある。

テビ 上總長生郡などで、灌漑用水路をスイジ又はテビといふ。スイジはキデといふ語の變形かと思ふが確かでない。テビは恐らくは手樋とも書くべき語で、即ちめい／＼の用水路といふことであらう。場所によつては田に接して畔が無く、一続きになつて境のつかぬものもあるが、それでも水路の分だけは深くなつて居る。即ち是も亦一種のヌルメである。下野東南部でテビは田の中の畦畔だといふのも、やはり此水溜りと田との區切りをいふのであらう。

ボク 筑後久留米の邊では、耕作の用水に設けた堀をボクといふ。

サヤ 遠江引佐郡で溝をサヤ。羽後河邊郡ではサドといふ。



ナサ 隠岐の浦郷で、ナサは溝のことだといふ。他ではまだ耳にしたことが無く、其起りも想像し難い。其隣の三度といふ村ではネキ又はネキジリ、赤井ではトテエアといふ由。

ツイ 奈良縣の平野地方で溝をツイ。是もまだ類例を知らぬ。

シンビキ 上水内郡で溝をシンビキ、小さい溝をセセナギといふ。二つの語は關係があるかも知れぬ。セセナギは普通屋敷の落し水の名に用ゐられ、昔から出た語のやうに想像せられて居る。

エギ 熊野では田の水の手のことだといふ(和歌山縣誌)。

ユミゾ 播磨神崎郡などは灌溉用水路をユミゾと謂ふ。川の堰をもユと謂つて居るので、是がキミゾの訛りなることを知るのである。北國は一帶に之をエンゾと呼んで居るが、それも同じ語の變化かと思ふ。

シタユ 讃岐の仲多度郡で、デスキ(出水、灌溉用水)の補助用のものをいふ。是も下堰の訛である。

ワゼキ 陸中稗貫郡で、ワゼキは小川のことといふが、やはり上堰即ち上水の訛りかと思ふ。田よりは高みに在る故にさう呼ぶのである。南秋田でも、水田用の水溜めをアゲ、諏訪でも井堰

の口をアゲトと謂つて居る。

タガヒ 伊賀阿山郡で、池の堤の少し切下げられた所をタガヒ又はアバケと謂ふ。高橋のタカビでは無いかと思ふが、ガを濁り又ヒをイに發音して居る。紀州の日高郡でも路を切つて溝としたのがタガイ、三河の南設楽でも、タガヒは道や田の排水のことだといふ。身持ちの女のある家で之を切ると、三ツ口の兒が生れると信じられて居た。淡路では堤防の下などを貫いて水を通すやうに埋設した木造の樋をユリと謂ふ。是は東京の近くでイリ又はユリと謂つて、扨の字を書いて居るものと同じ起りかも知れない。

ハヤクチ 用水路には調節の爲に早口といふものを設ける(北佐久)。不用の増水を早く流す口である。

ツツミ 池をツツミと謂ふのは九州各地、中國でも鳥取附近には其例がある。津輕方言考にもツツミは池、又は池よりは大きく沼よりは小さいものだと言つて居る。土を以て水を築ぐのをツツムといふ動詞は、既に新撰字鏡にも見えて居る。イケは越前その他では井戸のことであり、三河でも飲料用水の貯水所をイケと呼んで居る。

タツツミ 越後では、春の初めに雪消の水を田に溜めて用水とすることを田堤と謂つて居た

(北越雜記一七)。即ち直接に田を溜池として使ふのである。

ナタメ 溜池といふ語は東國には一般に行はれて居るが、是をたゞナタメといふと肥料溜めになる。肥前東松浦のナタメは用水池のことだといふが、此ナは多分魚のことだから、之れが養魚池を兼ねて居たか、さうでなければ漁村の魚圍ひ場の名を轉用したものと思ふ。

ハガネ 貯水池の周囲の築き固められた地(知多)。

ヨコキ 横堰。川の流れを横断して水位を高くした所(三豊)。此水を引入れて田へ送る大小の溝がキデである。

ヒンドキ 干土居。土居は堰堤のこと。水流を断ちて築く故に、下流の水が涸れる。夏の早の時には是で大立ちまはりとなることがある(久留米方言考)。

キデブクロ 川を堰いて田へ水を引く装置。斯ういふ所は同時に川を渡る道にもなつて居る。組毎に賦役で之を作る(隠岐)。

イカリ 堰の水閘を筑後ではイカリ。イカリは多分水位の高くなることであらう。東北では洪水をイカリ水と謂つて居る。

ドドメキ 又單にドウドウなどとも謂ふ。川の横堰を溢れて流れ下る水の音から出来た言葉

である。覚え易い地名として、弘く東日本には分布して居る。

オモノキ 大隅の百引村で、井手を構成する太い木のことを謂ひ、之を運搬する共同作業をオモノキヒキと謂つて居るが、本來はさういふ巨材を要する堰が、オモノキであつたのではないかと思ふ。

サルヲ 近江犬上郡など、堤防のことを猿尾といひ、公文書にも多く見えて居る。

マタ 讃岐では個々のテスキ(用水路)又は池の灌漑区域をマタと謂ひ、マタ毎に看抱水引等の世話人がある。愈々引水が始まると番の役が出来た。マタは水路の意らしく、諸國の山中にも北俣・南俣等の地名がある。岐の字も用ゐられる。

ミツシロ 堰筋の水を掛ける田の主が拂つて居る負擔金(上伊那)。現在水のかゝらぬ處でも拂ふ場合があるといふ。

キレウマイ 堰料米。泉元の村がある場合に、下流の村から其村へ納めることもある(伊豫國巡村記)。水利組合費だけでは無い。

ミツカケロン 五用水の争ひをすることを、水論又は水掛論といふ土地がある(北安曇)。此方が本の用の方である。論は訴訟の意味にも使はれる。

ケンダンギ 用水配分の際に、水の量を測る爲に立て、置く定木、其木の面に鏡を打付けたのをカネケンダンと謂ふ(佐渡)。懸段と書くとの説もあるが、多分は檢断即ち見究めの木であらう。バンミツ 番水。早の時に順番に水を引くこと。それを監視する爲に人が出て水口を守る(北秋田、民俗學四ノ二)。番は監視の意では無くて、順番の方であらう。

オヒミツ 田植を終つた田には追水を當てる必要がある。その追水の都合上、引入れ口の田から次々に下の田へ、植ゑて行くことにして居る例もある(ひだ人四ノ七)。

タワタシ 田から田へ桶を渡して、田の水を移し入れることを田渡しといふ(仲多度)。溝へ一旦放流するつもりが立つ故に、水不足の場合などに行はれる。桶渡しといふ地名も起りは是からかと思ふ。

トホシミツ 早の年用水を分配する一方法として、先づ上流の田に觸れをまはし、一日の間水を當てず、之を下流の方へ送らしめる慣行がある。之を通し水といふ(小縣)。

オホオトシ 周防大島その他の水の手の悪い島地で、以前は水が乏しくなると大落しと稱して川から引入れる溝の口を一夜半日の間残らず塞がせて、田から田へ順々に水を切落して行く慣行があつた。之を七日目位にくり返すと、稍暫らくは早魃の害を免れることが出来た(周防風土記)。

キリナガシ 用水不足の際の最後の手段として、一つの田に一ばいかゝるや否、直ぐに落しを切つて下の田へ送り流させる慣行(飾磨)。

ウチヲケ 低い所の水を田へ入れる方法として、桶に長い繩を付けて一ばいづゝ汲込む道具。

是には二人の手がかかる。濱名湖の邊では又取桶とも謂ふ。桶の上下に各二本の綱を付け、二人相對して上下一本づゝを持つて、水をかへ込むのである。

タタ 田の水波器の名(隠岐)。

キダテ 近江高島郡の一部で、五月氏神祭の後、各戸一人づゝが出て用水溝渠を修繕し、終つて慰勞宴を催すを井立てと謂ふ。献立ては毎年一定し、豊作を祈念する意味で、給仕人が飯を強ひる習俗があつた。丹後竹野郡では用水溝の手入れをキドタテ、同與謝郡では之をキネタテと謂ふ。

キアガリ 近江野洲郡では、この堰と溝の改修をキアガリと謂ふ。期日は八十八夜前後、年に二度の村もある。終つて後酒食の集まりがある。樋口のある部落へ酒を贈るといふ(郷、五ノ六)。オセキ 用水の維持は多く組合の事業で、且つ水の神の信仰を伴なふのが普通であつたが、現今は單なる慰勞の宴の如くなつて、もう神祭の式を忘れたものがある。芳賀郡でオセキといふの

は舊三月中、用水堀の水上げを終つた日の集會のことで、其頭番の宿をセキ親といふが、是を堰神の祭日と知る者は既に無くなつて、たゞオセキといふ女性の人柱になつた傳説だけが残つて居る(民俗學二ノ三)。

オミツカリ 水田を農業の中心とし、且つやゝ無理な間作をして居る我邦で、雨乞ひが大切な信仰行事になつたのは不思議で無い。雨乞には色々の方式があるが、何れも村共同の事務と認められ、信仰の無い者が假にあつても、役目の分擔を免れることは出来なかつた。御水借りといふのは靈驗ある神社に詣で、神水と共に雨を降らす力を授かつて来る方法であつた。其神水は驛傳の形で手から手へ移し渡して持つて來た。是を地上に置くと其土地で降つてしまふやうに信じられて居たのである。

アマヨロコビ 雨悦び。早の時に雨を得ると、祈つた場合と否とを問はず、業を休み神を祭つて感謝の意を表する。土地によつては之を雨遊び、雨休み又は雨降り正月などゝも呼んで居た。

七 肥 培

ヤシナヒ 養ひは肥しの古語であるが、九州はほとゞ一般に、之を山野から採取する草の葉や木

の芽立ち、普通に刈敷といふ肥料のことに解して居る。即ち是が最も古くからの養ひであつたのである。コヤシといふ語もさう新らしくはないかも知れぬが、土地によつては今も之をタスケといふ處がある(多賀)。

ヤマゴエ 山肥。刈敷即ち山から採つて來る緑肥(豊能)。

カシキ 刈敷を信州などではカリシキとはつきり謂ふやうだが、關東奥羽では普通はカツチキ又カツシキ、九州ではカシキといふ地方が多い。暮春初夏田植に先だつて草や若木の小枝を、刈込んで田に敷くので、肥培法の殊に古風なものだが、今以て持續して之を用ゐる村々も決して少なくない。薩摩では木の葉の緑肥を山カシキ、草を野カシキとも區別して居た(成形圖説)。或は秋カシキと稱して堆肥として貯へて置くものもある。カシキを入れると田に癖が付くが、秋カシキは癖が無いとも謂ふ(阿蘇)。近年農會が奨励する青刈大豆の緑肥を、豆カシキといふ處もあるが(長島)、單にカシキといへば山の木草の若葉を意味する。之を田に踏入れる作業をカシハマといふ語も出來て居る(肝屬)。阿波でカリコエと謂ふのも専らこの刈敷のことであるらしい。

カリシキヤマ 以前用水權が個々の田に附いて居た様に刈敷を採る爲の一定の山林が、家毎に割渡されてあつた村もある(上伊那)。新種の肥料の多く使はれるやうになつてから、其刈敷山は

荒れて藪になつた(藤原二ノ一)。入會山で刈敷を刈る處では、是にも山の口の規約があつて、其口開けの日は成人も子供も、新調の野良着で刈りに行つたといふ(旅、七ノ六)。

タシロヤマ 北秋田では刈敷を探る山を田代山と謂ひ、處々にさういふ名の山があつた。田の神の依代の茅又は木も茲で探るといふのは(郷、七ノ七)、もし想像説で無いなら注意すべき事實であつた。

シロジタキ 近畿から中國にかけて、刈敷をシタキと謂ふ土地は廣い。是を其まゝ田に入れる場合の外に、一旦既に入れて牛馬に踏ませてから使ふ者もあるが(鹿足)、此方は田植の間に合はぬ。直接青葉青草を田に入れるものを代ジタキといふのは(豊浦)、其爲である。九州の方では、シタキは秋刈つて山に積んで置き、翌年春の刈敷にまぜて使ふものを謂ふ處(東松浦)と、牛舎に入れて腐朽させた後に、麥島などに切込む厩肥をシタキといふ處(壹岐)とがある。名の起りは共に下木かと思ふ。

シボミ 奥羽地方にもカツチキといふ語はあるが、別に苗代の肥料にする草木の嫩葉を、シボミと謂つて居る土地もある(青森縣方言訛語)。或はこの二つの名には、若干の意味の相異があるのかも知れない。

ハゴエ 大隅の一部では刈敷を葉肥と謂つて居る。

コカシバ 春さき櫛などの若葉をこいて来て、積肥にねかすことを木の葉こき(常陸)。そのこいて来た葉をコカシバといふ(印旛)。

ゴハ 福島縣の岩瀬郡などでは、刈敷即ち田に入れる若葉をゴハと謂ふ。ゴの意味は不明だが中部地方で松の落葉をゴ、もつと西の方でコスバ・コクバといふのと關係がありさうだ。

ホトラ 滋賀郡鶴川村で肥料用の雑木をホトラと謂ふ。オドロヨドロも同じ言葉で、燃料などにも刈る灌木の叢生のことかと思ふが、仰木村では肥料用の若草のことだと報じて居る。

ノミギ 雑木や竹の枝の、肥料として田に入れるもの、又ネドシともいふ(君津)。

ウメギ 畠の中へ入れる草木の緑肥を、埋め木又は埋め肥ともいふ處がある(肥前神埼)。刈敷は南の方に行くときまゝ畠作にも應用し得たのである。

タダカレトリ 飛騨では春先に雑木の枝を刈取つて、田に入れて肥料とするのをタダカレと謂ひ、それを刈りに行くことをタダカレ採りと謂ふ。このタダカレの意味は既に不明になつた。それで田の畔などの草を刈つて田に入れることが、タダカリだと解する處もあるのである(周防熊毛)。

タタカリボネ 下伊那では之を刈敷と同じとし、又は刈敷の成長し過ぎたものがタタカリで、早く刈敷をせぬとタタカリになるなどいふ村もあるさうだが、一方にタタカリ山といふ名稱もあるのだから、何か別の意味があつたのかと思ふ。このタタカリは枝だけが長く田に残るので、それを引上げて燃料にする。之をタタカリ骨と謂ふ。越前大野郡で見たのも、之を田のあぜに積んで雨に洗はせて居た。後に持還つて風呂などに焚くのだと謂つたが、土地で其名を何といふかは聞かなかつた。

タビラ 下伊那で刈敷を採る山をタビラと謂ふ。ヒラは山の側面、即ち田に面するヒラだから刈込みに便であつたのである。

シノギヤマ シノギは田に入れる肥料の本草、是を刈りに行く共有地をノシギ山又はカツチ山といふ(君津)。カツチは即ち刈敷、此地方ではK子音が脱落する。

コクサヤマ 三河では肥料用の本草を採取する共有山をいふ(西加茂)。但し是を本草山と書くのは恐らく誤りで、このコは堆肥をコゴエなどいふコであらうと思ふ。

アラメ 肥料にする草、緑肥(東伯)。

ソグサ 田へ置く草(一志)。

キリコミ 田植前に田に草肥を入れることをいふ(榊斐)。

ハメクサ 大隅肝屬郡などで田植前、野の草大根の莖その他色々の青葉を、大規模に田の中に撒き散らして肥料とする。之を總稱してハメ草といふ。

カルカキ 静岡縣で春の草刈りをいふ。是も肥料用である。

ハバクサ ハバは田島の端の草の生えて居る崖。その草を刈つて多くは堆肥にするといふ(南巨摩)。

ヨセカリ ヨセも田の畔のこと。その草は刈つて直ぐに田に入れるに便である(多賀)。

カマガカリ 棚田段島の地塚の草は、上の耕地を持つ者が鎌の届く限りは刈取る。是を鎌が、り又は鎌拂ひと謂ふ(小城、東松浦)。其残りは下の方の地主が刈る慣行になつて居る。それを同じ地方でコチバラヒといふのは小露拂ひで、コチ即ち陰になる樹の枝を伐り下す時と同じ名である。又下露はらひとも謂ふ。

クロカリバ 土佐では山林と田地との中間の地の草は、田の方から鎌を持つ手の届くだけは刈取る。それを山林の所有者は拒むことは出来なかつた(舊高知藩田制概略)。それをこゝでは畔刈場と謂つて居る。飛騨の大野郡でも田の塚のボタの草は鎌だけと稱して、下の田の持主は鎌で刈れ

るだけの畔刈りを許され、残りほとんど上に田持ちとするのが通例であつたが、時には半分わけ又は丸刈りの定めのももあつた(ひだ人四ノ七)。吉野の山村では畔の草は下の田の草にする習はしであつたといふ。

カノカガリ 鹿角郡の例。カノカは芝生のこと。カヌカ又カツカとも謂ふ。その草を刈つて肥しにするのである。或はクレギリと謂つて、土と共に切つて來ることもあつた。

フマセ 田植の代ごしらへの前、田に入れた刈敷緑肥を踏込みむる爲に、馬を牽いて田の中を廻る作業は、今でも信州をあるくとよく見られる。之を踏ませといふ語は弘く又久しく行はれて居た。木曾などは大抵馬一頭のやうだが、奥州では幾匹もの馬を牽入れて踏ませた。馬の無い處又は餘りのふけ田では、人が大足を履いて此フマセをして居る。二度踏み小踏みなどの名もある(東筑摩)。

タグルマ 上伊那では、フマセの代りに田車といふものを用ゐるといふ。又ドレッツといふものを馬にかけて廻しても居る。ドレッツは即ち *tréte* であらう。古い農法と新らしい器械との結合である。

タブト 紫雲英をいふ(北葛飾)。肥料としての名かと思ふ。北國から信州にかけて、是をハ

と謂ふのも花肥の略らしい。其他の異名は大抵は形からで、農業とは關係が無い。

ヘボロ 野蒜に近い一種の球根草。上總では苗代の肥料として好んで之を入れる。其追肥には煤を用ゐる家がある(君津)。

モバ 海に近い農村では、藻葉と稱して海藻をも肥料にする。是には出て刈るものと流れ寄るのを拾ふだけの處とがあるが、以前は採取が多かつた様である。歌に詠まれた玉藻刈るも、目的は田畠の養ひの他にはなかつたかと思ふ。

ヨリモトリ 暴風の折には山の様に藻が寄つて來る。それを引揚げて乾して積み貯へる。但し寄藻は生藻ほどの效き目が無いといふ(香岐島民俗誌)。

モキリ 藻切り。肥料にする海藻を採取することで、冬季の作業。嫁入りも多くは年の暮にする故に、嫁に行くを藻かたぎに行くといふ隠語がある(長門角島)。

モバカギ 藻葉を引掛けて採るカギ、二股になつた木の棒である(隠岐)。スマルと謂ふのも三つ股にしたカギだが、是には一端に重りの石、他の一端に綱を附けて、深い底まで投げ入れて揚げるやうにしてある(長門大津)。

ヨケ 肥前平島などで、麥の肥料に入れる海藻。ヨケは植物の名では無くて、施肥の方法から

出た名らしい。又クセといつて磯草も肥料とする。

エドロ 巖に生える一種の海草。島の肥料にする(志摩)。

ヒグサ 刈敷以外の山の草は、刈つて其場にニホの様に積んで置いて、用に臨んで持ち下す風が處々にある。秋に刈つて次の年の春まで置くものをヒグサと謂ふ(一志)。諏訪の神事の干草のたゝへ、或は正月のツクテ場の行事などを思ひ合せると、是にも田の神出入の信仰を伴なうて居たことが推測せられる。

フルコ 刈敷の緑肥。春焼きをした野に生えた草だといふ(米島)。

コエカリ 半夏生の日から野山の口が開き、肥刈りが始まる。毎日牛を牽いて草を刈りためる(豊能)。

ヒルグサ 夏の土用の田の仕事の切れ間に、晝中も山に往來して草を刈つた。晝草は朝草に對する語で、既肥用の草の採取である。千把刈ると米一俵に當るなど、謂つた(比美)。

クサアソビ 夏の草刈り仕事の中休みを謂ふ。通例三日目に休む。是をコクサオロシ又はコクサワスレといふ處もある(三河東西加茂)。

クサゴエ 草を既へは入れずに、其まゝ積肥にする所もあつて、之を草肥と謂つて居る。牛馬

の少ない農村では、木の葉や塵芥も、斯うして貯へて居た。

モチゲ 初秋に山の萱を刈り、之に土を被せて置くのをモチゲと謂ふ處もある(西白井)。持肥ではないかと思ふ。或は土肥と謂ふ地方もある。

コエトボシ 豊岐島ではシタキ即ち既肥を島に運び、播種に都合のよい様に二ヶ所三ヶ所に分けて積み、其上に麥稈の覆ひを掛ける。是を肥トボシと謂ふ。トボシは斯ういふ覆ひ葉の名で、古語のトボサと同じく、本來は一種呪術的の用途があつたかと思ふ。このコエトボシには土塊を載せて居る。

ダゴエ 既肥。又牛屋肥(有田)、駄屋肥ともいふ。上總でデエギ、加賀河北郡でダスベといふのも、特に念入りに作つた苗代用の既肥のことらしい。

アラゴエ 瀬戸内海の沿岸地方などで、既肥をさう謂ふ。どうしてアラといふかは不明だが、山芝なども其アラ肥の中に算へられて居る(農務行事後篇)。

メエノコ 諏訪上伊那等では既肥をメエノコといふ。メエは馬屋だらうか。堆肥をメカシといふ處もある(珠洲)。

クモシゴエ 堆肥のこと(深安)。他でもクモシ(岡山)又はクマシ(阿山、伊都)といふ處は多い。ク

マスといふのは腐熟させることかと思ふ。

コゴエ 伊豆でも伊豫でも又豊後の一部でも、厩肥を堆積して腐熟させたものをさういふ。即ち水肥に對する濃肥ではなからうか。讃岐ではコマゴエといふのが堆肥で、塵芥などを集めて積んで置く場所をコマゴエ場といふ。

コヅケゴヤ 山形縣莊内で堆肥小屋のことをさう謂ふ。

バラケ 淡路では堆肥をツミゴエとも又バラケともいふ。バラケルは散らすことだが、之を田畠に施すことをバラケフルといふ。

イワゴエ 厩で馬に踏ませた藁や柴草。麥畠の肥にする(美濃加茂)。

ツクテ 東京西郊から遠く相甲信の三州にかけて、堆肥をツクテ又はツブテ、其置場をツクテフバなど、謂ふ。正月十四日の年取りの日に、粟穂稗穂を作つて此上に立てるのは、こゝが農作物の成長する力の源といふ考へから始まつたかと思ふ。

コエツカ 肥塚。山形縣の各郡で堆肥もしくは塵捨場のことをいふ。秋田縣へ入るとコエツカ、又コンズケなど、發音するが、何れも肥料の置場のことである。正月行事の肥引きにも、屋敷の明き方や近い田畠に是を築き、或は又コエモリといふのを見ると、本來何か信仰の感覺を作

なうて居たのではないかと思ふ。奥州の鐵道沿線にも田の中に小さな肥料の堆積を作つたのを見く見る。是も亦肥塚と呼ばれて居るのである。

ソトマヤ 塵捨場を、上總山武郡ではソトボリ、又はソトマヤと謂つて居る。外厩の意ではないかと思ふ。同木更津の方ではタメボリ又はタンブリ、穴を掘つて貯へるからである。

タンボ 農家のかど先に石を積上げて、圓又は方に圍うたもの。毎日の塵芥をこれへ掃込み、一年一回ぐらゐ、全部引揚げて肥料にする(一志)。

マクタ 塵芥(新居)。

ドサ 掃溜めの芥類を、下ノ關ではドサといふ。土草といふ宛て字もあるが當つて居ない。以前は近郡の農民が來て之を買取り、肥料にした(長門風土記)。

ススガラ 豊岐では農家の屋根はもとすべて麥稈で葺き、其あがりを牛の敷かせもんとして之を堆肥にした。近年は瓦屋が普及したけれども、なほ此用途の爲に少なくとも牛舎一棟だけは麥わら葺きにして居る(民俗學四ノ一)。その堆肥の料を煤殻と謂ふ。

ウチゴエ 灰・煤・スクモなどを内肥といふ。焼土・削り土・溝土・壁土・クモシ土の類を地肥といふ(農稼行事後篇)。

ヤツドロ 焼土。芝を割いでヤブの上に載せて共に焼き、之を肥料に使ふ(南松浦)。

ハヒビヤ 灰小屋、又焼土小屋といふ地方もある。壁を厚く塗つた小屋で、此中で塵芥を焼き灰を其まゝ貯へて置くもの。東日本にはあまり多くないが、是が到る處に季節毎の、農村の香をたゞよはせて居る。

ハンヤ 北國では灰小屋をハンギヤといふやうである。今は灰ばかりでなく雑物の置場にもして居る。民居を少し離れ耕地に近く、微小な建物の散在するのが汽車の旅人にも目に着く。安藝の北部でハンヤと謂ふも是で、藁や農具も入れて居る爲に、言葉のもとの意味が不明になりかゝつて居る(方言四ノ一二)。

クエシバンヤ ハンヤは灰屋のことなのに、其中で焼土を作る小屋だけを、特に又クエシバンヤと謂ふ處がある(比婆)。クエシは又クヨシともいふ。燻土。

クヨシ 芥や草を集めて焼くこと(燻枝)。クヨスは動詞クユラスの訛のやうである。比婆地方の謎々に、

一里さきの大グヨシなあに —— 煙管

といふのがある。即ちさせる灰皿から煙の立つのを、此クヨシ場に見立てたので、灰小屋の外で

も芥火を焚いて居たのである。

クグシ 塵芥を積んで焼くことをクグシ(阿武、山縣)。クヨシ・クエシから更に轉訛したのである。

イケビゴヤ イケビとは塵埃を焼いて灰肥とすること。多分埋火であらう。大隅百引では之を焼く小屋が、何れの家でも屋敷の傍に一つづゝある。中には背戸の山の岩穴を之に宛てたものもある。

アクヤシバ 常陸の北部山村で、藁やすくばを燃して灰を作る所。小屋は無くても場所は家々で一定して居る。アクは灰、クヤスは燻らすで、是も肥料用であつた。

アゲツ ごみ焼き(上雨伊)。

ヨケゴエ 桶肥、主として下肥のことをいふが(肝屬)、水肥は他にも色々ある。

ナゴケ 佐渡の外海府などで、下肥などを入れて背に負うて行く桶、長桶と解しても形はよく合ふが、或は魚のナと關係があるかも知れぬ。

ナワシ 佐渡ではスケトウといふ魚の洗ひ汁や廢物をナワシと謂ふ。農家が之を買入れて肥料にする。ナワスといふのは腐らせることでないかと思ふ。

ヌリダメ 魚類の廢汁、肥料用(藤原)。

トキタガ 肥料桶(神貫)。

フリヲケ 下肥を入れて運ぶ桶。東北でも關東でもいふ。

ヨツヲケ 東筑摩で下肥桶をいふ。馬に負はせるもの、四つを一駄とする。

イツカガケ 土地の面積の單位として此語を用ゐる處がある。即ち肥桶一荷の施肥を要する廣さ(東加茂)、この邊では約一畝である。或は一荷まきといふ例もある。

コエタテヲケ 肥立て桶、又腐かし桶ともいふ。大きな蓋が附いて居る。食ひ切れぬ鯛などを是へほうり込んで、肥料用に貯へる。五月田に入れるに何よりよい肥料、島では以前どこの家にも之を備へて居た(周防大島)。

コガビヤ 肥料小屋、石見那賀)。コガは九州でも關東でも桶のことだが、下肥用とは限つて居ない。

トメコガ 肥料だめの太コガをコロガシと謂ふのは、持つては運ばれないので轉がして行くからであらう。其轉がしを地中に埋めたのを留めコガといふ(鹿足)。

ヲカダメ 東京近くの農村では田島の近くに、大形の肥し溜めを設ける。現在は皆方形、之を

ヲカ溜めといふ。豊岐島ではホリタンポー、之に對して大桶を置くのをスエタンポー(方言六ノ一)。タンポーはドブ・タンポーと一つの語で、塵捨場をタンポーといふのも内容の變化であつた。

ノツボ 肥溜め、又センチツボとも、京都附近でいふ。

ヤツボ 肥壺(薩摩長島)。

イドノ 家の傍に在る肥壺を、イドノ又はユドノといふ地方が多い。もとは沐浴の水も是へ落した事實はたしかにあるが、さて尙之をドノといふ理由がわからない。

キゴエ 和歌山縣はほぼ一般に、下肥を居肥と謂つて居る。キは家居、野外の作場に對する語である。東北はズキといふ。

ムダテヤシ 下肥のことを何故かさういふ(相樂)。忌籠りの間は之を使はず、又田植以後も之を忌むといふ。

八 田植月

オリタチ 下り立ちといふ言葉が、福岡縣の北部にはまだ残つて居る。愈々忙しい水田の作業に着手する際の祝宴らしく、是には其年の傭人を招くことになつて居る。或は此準備の事務を四

月とも謂ふ處がある(早良)。

オヒタチイハヒ 肥前の山村で生立ち祝ひといふのも、下り立ちの祝を謂ふかと思はれる。舊五月田植より約七日前、村中の神祭り酒盛りがある(民族三ノ六)。此期日は少しづつ早くなつて居る様である。佐賀郡北部では苗代作りが終つて一週間位、或は舊三月中にオヒタテと謂つて春祈禱を行ふ例さへある(社会史研究九ノ二)。何れも大切な休み日として農民の酒盛りがあり、又行商人等が多く入込むといふ。

カイノウ 茨城縣の各郡では、田植期間をノウドキ又セイノウ、其開始をカイノウと謂つて、前日にカイノウカミゴトがある(多賀)。カミゴトは神事だが、今は主として休みの意味に用ゐられて居る。

ノウタテ 下伊那では春置終りの頃の農休み、嫁掣の親里へ還つて行く日である。タテは開始の義であるが、休みを慰勞としか認めなくなつて、之を後から来る作業とは結び付けて考へぬのである。

シツケドキ 田植期間のことを、關西では一般にさう謂つて居る。シツケは勿論苗を挿すことであらうが、之を前後の作業の總稱にして居るのである。

サツツイ 田植をサツキといふ地方は北國から奥羽にかけて廣い。それからして十五日正月の前夜、田植の色々の行事を豫行する田遊びをもサツキと稱し、其爲に却つて五月の本務の方に、別の名を必要とした處もある。サツキが田植の月の意味であることは、多くのサといふ語の用例からも證明し得られるが、どうしてサと謂ふのかはもう判明しない。上總の夷隅郡で挿秧をサツツイといふのもサツキである。此邊では屢々カ行の子音がバ行に變つてしまひに脱落する。

ヨヒサツキ 能登鹿島郡でも田植を一般にサツキと謂ふ。此邊は家の田を全部一日に植ゑ終る習はしである故に、もし一日ですまぬと見るときは、大抵は其前日に家の者の手で、近い田だけを植ゑて置く。之を宵臯月といひ、之に對して當日を本臯月と謂つて居る。

サナハ 田植の日に使ふ繩、通例正月十一日の仕事始めの日にこしらへて置く(名取)。早苗や早乙女の早の字も宛て字である。五月雨を今ではサツエ(佐渡)サツユといふ土地が多く、俄雨夕立をサダテ(宇和)サダチと謂ふのも、やはりサの月に大切であつた爲かと思ふ。

セツダ 田植は五月の節の日から始める處があり、又は此日を目標にして其前後の日をきめる處もある。田植を節田と謂ふもの、節が田植と深い關係があるからだといふ(南設楽)。

セツノニシカゼ 節の西風雨でそろといふ諺が三重縣にはある(天災豫知集)。或は田西秋北な

どとも開つて、田植の季節の西風は、雨をもたらしものとして寧ろ喜ばれて居るのである。
チユウハスラセ 中はすらせ半夏は待つなといふ諺が、阿蘇地方にはある(郷、七ノ三)。即ち此地方では五月の「中」といふ夏至の日を少し過ぎて田植を行ふのである。半夏は夏至から十日目だといふ。廣島縣のどこかにも、半夏半作ちゆう二割といふ處がある。是は夏至でまだ少し早過ぎるといふ意味かと思ふ。信州のやうな田植の早い山地でも、なほ五月の「中」といふ日を重んずるのは、多分南國とは反對に夏至の以前に植付けをすませる必要から、之を注意するのかわと思ふ。

ハンゲハンケ 半夏半毛、田植は半夏生を過ぎてはならぬといふ心得を諺にしたもの。三戸郡でも半夏を過ぎると一日に一粒づゝ不足するといふ由。寒い北地としては稍悠長に過ぎるやうに思ふ。

タウエバナ 田植花と呼ばれる植物は、土地によつてちがつて居る。美作吉田郡では卯花、越後では谷うつぎ、奥州九戸郡では花菖蒲を田植草といふ。此花は東北で廣くサヲトメバナと名づけられて居る。一つには花葉の鮮麗な色が、植女の衣裳や手拭を聯想せしめるからであらう。

ノノコダテ 以前は田植の日が寒冷で、布子を着るやうなことがあつて、是を布子立てと謂つ

た(玉名)。此タテも亦田に立つことであらう。近頃はさういふことも無いといふのは、晚種が増加して植付の日が遅くなつた爲らしい。信州でも上伊那あたりには、

田植ぬのこに裸麥

といふ諺がある。田植の頃には寒く其前の麥刈り時には却つて裸でもよい様な日があるからだといふ(藤原三)。

タウエイチ 田植の前に一日、田植に入用な物品を買入れる市がたち休む日がある(珠洲)。是も起りは下り立ちの祭であらう。佐賀縣の生立祝の日にも物賣りが多く来る。愈々田に下り立つと買物などをして居られぬからである。

タウエゴゼ 田植休みの日をあてに、もとは旨の歌うたひの入込む風があり、是を田植ごぜと呼んで居た(下水内)。替女は古風なもので、其往來には隠れたる前からの慣行があつた。或は單に娛樂の爲だけではなかつたかも知れぬ。

九 代ごしらへ

タゴシラへ 植田用意のこと。代掻きから帆すりまでの仕事を總稱していふ(比婆)。是を前日

代ごしらへ

までにすます處と、田植の當日に端からこしらへる處とがある。土地々々の労働組織の相異に伴なふものである。東筑摩でシロコセエと謂つて居るのは、田の土を平らにする最終の作業だけはいふやうだが、それは只代のこしらへが是を以て完了するだけで、本來はやはり右の田ごしらへと同じことを謂つたと思ふ。

シロカキ シロは植代即ち苗を挿す地面のことで、其田の土を碎き柔けて、最後に田の底を均らすまでが代掻きの作業である。東北では之を田掻きともいふ(九戸)。阿波美馬郡などでは、二毛作田の周圍に土を塗り付け、水の流出を防ぐ仕事に代掻きだと謂つて居る(方言四ノ二)。

ウエシロ 肥後の阿蘇郡などで、田掻きの作業をウエシロといふのは、植代かきの略語かと思ふ。その一つ前のアラグリを起す作業を、荒代と謂ふのも同じ言ひ方である。

ホンジロ 本代。植代掻きの作業を本代といふ處もある。是にも多くは牛を使つて居る。

シロハマ 是から植代にする田。安藝山縣郡などでは、其作業に八つの段階がある。(一)あぜかき、(二)畝どり、畦近くの土を細く碎く、(三)あら起し、(四)くれ返し、(五)あらち、(六)駄屋肥入れ、(七)代打ち、平畝で肥を埋める、(八)植代掻き。このうち(四)と(八)には牛を使ふ。ふけ田にはくれ返しは無く、人の手で切返しをする。

シロダシ 牛を初めて田へ出すこと。苗代起しの日には鋤初め祝をする(安藝山縣)。

シロミサクラ 代掻きの時に馬につける鞍。之に馬銚をかける綱を代掻きはヤ緒といふ(多賀)。

シカドリ シカといふ語は東北でしか聞かぬ様だが、水田を掻き均らし又緑肥を土中に押込む一種の馬銚で、馬に引かせて使ふ。其シカを扱ふ者をシカドリ、又はシカ押しとも謂つて居る(鹿角)。

ヤソ 田の代掻きに使ふ農具の名と謂ふ(藤原)。

シンドリ 馬を使ひ馬銚を押して、其刃を田の土に入れて行く役をシンドリといふことは、關東の各地も信州も同じである。シンドリは鼻取りに對する語で、後取りと書き、古語である。

ハナドリ 代掻きの時に馬の口を取る役。ちかに口繩をつかむものと竹竿を附けて引きまはす方法とがある。是もほゞシンドリと同じ區域に行はるゝ名である。

ハナトリサホ 代掻き馬の口取りに、口竿を用ゐる處は今でも中々多い。其竿を鼻取竿といふ(安蘇)。東北では又サセ棒とも謂つて居る。

シツチヨダケ 馬銚を使用する際に、馬の左側に結び付ける長さ六七尺の竹(中新川)。鼻取竿サセ棒も同じもので、シツチヨは多分馬を激勵する掛聲から出た語であらう。

サセトリ 田掻きの馬の鼻を取るために取附けた棒を、北の三縣ではサセと呼んで居る。綱と比べて便なのは、牽くだけで無く押して向ふへ遣ることも出来る點で、之を執る役は通例少年又は女子、よつてサセゴとも呼んで居た。サセトリ又はサヒトリは其作業の名である(寒風山麓農民手記一〇四頁)。中世以後の牛を使ふ言葉に、左へ向けをへウセ、右を向けをサセと謂ふのは、此竿の名のサセと關係あることは疑ひが無い。即ち右へと念ずるとき牛が左へ向かうとすると、此竿が左の方から突出すからサセである。棒をサスといふのは多くの土地の方言であつて、もと牛馬の爲のみに出来た語ではないらしい。

ホラシヨガキ 代掻きをさういふ處がある(村山)。ホラシヨも耕馬に對する掛聲かと思ふ。

シロカキバヤシ 代掻きの日に用ゐらるゝ囃し言葉(君津)。ハヤシといふが實は掛聲である。馬鉞を執るシンドリがホイショウといへば、鼻竿をもつハナドリがホラショウと、交るゝ美聲を揚げて節面白く囃すので、馬もよく其調子に乗つて動いた。廣い耕地だと幾組もの代掻きが出て其聲が田植唄と相和して面白いものであつた(民族二ノ七八八)。

アラグリ 土地によつて僅かばかりの意味の差があるが、何れにしても代ごしらへの第一期には屬する。アラグレ即ち大きな土塊を、起して碎いて水に浸して掻き均すまでの作業の、全部又は

は何れかの一部をさう謂つて居るのである。奥羽の北端から、關東北陸にかけて此語があり、或地では關西で謂ふ所の、荒起しをも含むらしいが(磐城・石川)、主たる目的はアラチ即ち整地に在つたやうではをアラグリと動詞風にいふのも、やはりアラグリカキと同じ心持であらう。

ヘシ 苗代などのあまり柔かい田は代鋤きをせず、馬を入れて掻くだけの處もあつた。飛騨では之をヘシデヤルと謂ふ(ひだ人四ノ七)。このヘシも馬を追ふ掛聲であらう。

カアラガキ 鋤起した田の土を、馬鉞を以て細かくすること(上新川)。

ナカシロ 中代。第二回の代掻きのこと(北葛飾)。

トリアハセ 中河内郡の例。田ごしらへの牛犁作業には、(一)アラヲコシ、(二)マルメ、(三)クレガヘシがある。土性の特に粘り田では、第四次の作業としてトリアハセといふことをする。それから馬鉞でアラコ・ナカコをして、田の水の切れぬやうにする(近、一ノ三)。

エブリオシ 木の股のさきへ板を附けたエブリといふもので、田を押し均らすこと、是で植田の代が完成するのである(東筑摩)。或は之をエブリサスといふ地もある(鹿角)。

ヨブリ エブリは通例帆の字を宛てる。信州には之をヨブリといふ處もあるが、東北では普通インブリ又はエンブリと謂ふ。起りは多分田の泥を汰り動かすことがイブル又はエブルであつた

のであらう。奥州八戸附近のエンブリスリなどは、春の初の田遊び舞の一つの曲目となり、田植月には却つて其名を用ひないが、あの間拍子はやはり代ならしと労働に基づいて居る。或は穀物乾場や炭竈の口だけで使用する道具の名だけになつて居る處もある(津久井)。九戸郡には姪婦がエンブリを跨ぐと、鬼唇の子を産むといふ俗信もあるが、由る所を知らない。

タスリカギ 常陸では水田の代を均す農具を田摺鉤、又エブリといふ語もある(風、三九九)。スルといふのは地面を曳くこと。カギは股になつた木のことだが、こんな小さな器械でも、便宜によつて土地毎に色々改造せられて居る。

ヤチウマ 田をならす道具、エブリとはやゝ構造を異にするやうである(最上)。

カジロ 出雲仁多郡、エブリスリに該當する作業がカジロといふ。畝代掻きの略かと思ふ。

ムラナホシ 代ならしのことといふ。苗間に使ふ道具(上伊那)。

ナヘコミ 代掻きがすんでから、手鋏で田の泥を打込み柔かにする仕事。多くは男の手で田植の前日に行ふ(北設楽)。

クロカケ 畦作り(東茨城)。之をクロアゲ又はキシ塗りといふ處もある(中河内)。

シロカキモチ 小縣郡などで、田を掻き終つてから田の神様を祭るに餅を搗く。是を代掻餅と

いふ。郡の吾妻郡では此餅を苗代餅と謂つて居る。田植を手傳つてもらふ家々にも配るといふ(旅、九ノ二)。

一〇 苗取り

イネトリ 苗代の苗を取るにも、以前は定まつた方式があつたやうで、其名残とも思はるゝものが、少しづつ各地に残つて居る。青森縣の上北郡などで、苗取りといふ正月行事は田遊びの一種である。若者等隊を組んで各家を廻り、苗を取る演伎をするのに、頻りに好い苗だ好い苗だと苗を譽める(舞、四ノ六一六)。苗取唄といふ歌も現在は田植の日に歌はれて居るが、是には苗を取つてしまふとイナゴは何處へ行くといふ様な文句がある。南安曇その他で苗取りを稲取りと謂ふのも何か言はれのあることでないかと思ふ。

ノウデ 又ナヘデ若苗を束ねる一尺ほどの藁である。能登鹿島郡では小正月の前夜此邊でサツキといふ晩に、其年のノウデ藁は打つて置く習ひになつて居る。美濃加茂郡のナヘデ作りは今一段と念入りであつた。正月は五束の稲を、穂先を吉方に向けて土間に飾り、二日の挽き初めに之を挽いて米を取ると共に、其藁をナヘデに切つて苗取りの日まで藏つて置くのであつた。今はも

う其風習が無い(民族一ノ七五六)。濱名郡では十一月の頃の荒神祭に、一束の新葉をきれいにすくつて供へ、其葉を翌年の苗取り用にする。此地方ではそれをナヘジと謂つて居る(民俗學二ノ一二五)。

ノウバ 豊岐では苗をくくる葉をノウバと謂ふ。正月に此葉の穂先を粥の汁に浸して根殻をぬり付け、是に牛王を巻いて神前に供へて置き、田植の際になつて卸して使ふ。石城郡でこの苗葉をナイバといふのも同じ言葉らしい。是は正月の年縹のオフサを残して置いて使ふといふ。出雲でも注連の子を苗束ねにする(民族三ノ七五六)。

ツカネワラ 苗代の苗を束ねる葉だけを束ね葉といふ處がある(小城)。他の物を束ねる場合には別にムスデといふ語があるから、是は正月詞の一つであつたかも知れぬ。

ナヘデバシ 安藝山縣郡では苗手をただハシと謂ひ、伊豆賀茂郡では之をナヘデバシといふ。之を使はぬ前に棄てることを忌む。もし田に踏入れて其上に生えた稻で眼を突くと、一生治らぬと謂つて恐れて居る。苗を結はえて用が済んだ束ね葉も、取扱ひ方に非常に注意する處がある。其束の間から成長した稻は、葬式の日の米になるなどといふ。

ヲナゴタバ 田植の苗の根元をよく揃つて居らぬのを女束(仲多度)。苗取りは男の役だから男

の方が上手である。

キノボリナへ 木登り苗。根元をよく揃つて居ない苗束(北設楽、安藝山縣)。

クロナへ 苗代の四邊に成長した苗。色が濃く比較的よく發育して居る。之を五六本づつ束ねて恵比須棚に上げ、又他の神佛にも供へる。子供は之をもらつてカンヅラサマを作る(濱名)。越後西蒲原では又之をクロボコ苗と謂ふ。

アモト 苗代の周圍に成長した色の好い苗。是は田植には使はず田に鋤き込んでしまふ。虫が付きやすいからだといふ(仲多度)。ところが一方には宗像郡の昔の苗取唄には、

苗とらばアモト取らんせ

アモトに米が千石

といふ章句もあつて、反對に話がなつて居る。アモトは畦元の意らしい。

ホトリナへ 邊苗。苗代べりに近いよく成育した苗のことをいふ。備後双三郡の田植唄に

ホトリ苗をよりに取れ

ホトリ苗にこそ

千石の米がなる、ホトリ苗に

苗 取 り

筑前のアモトの歌と同じ心である。

シマナへ 北安曇では、朝の四つ前に蒔苗を二本見ると思ふことが叶ふといひ、又は蒔苗を七本植ゑると思ふことが叶ふとも謂ふ。

ナヘダハラ 苗俵は寄生蜂の繭。之を豊年の兆とする(攝津三島)。害虫を多く食つてくれるからと説明する者があるが、言ひ傳へは之を知る前からあつたらしい。

エビスナへ 三河北設楽郡、苗取りの日に糶の苗を二親ある者に取らせて、之を恵比須様に供へる。多くは娘に取らせる。此日は夕食に味飯を炊いて田植祭をする。翌日が田植の日だからである。中部地方の農村は一般に、エビス様を田の神として祀つて居る。もしくは田の神をエビス様と稱へる。

ミツカナへ 取つて三日目の苗は、三日苗と謂つて植ゑることを忌む(北設楽、有田)。

スエナへ 上總では田植の餘り苗を、他日の缺を補ふ爲に、一握りほどづゝ集めて植ゑて置く。之を据苗といふ(南總ノ俣俗)。飛騨の大野郡ではシヤナゲと謂つて、やはり一握り苗を田の片隅にかためて植ゑて置き、後ぼれや浮苗の補植とし、一部分は田草取りの頃までも残して置く。シヤナゲは捨苗と書いて居るが、恐らくは亦据苗であらう。

トリコ 補植用に残して置く餘り苗を、讃岐ではトリコといふ。是が養子を意味する日本の語と一つなのは、我々には興味が深い。

サカサナへ 宇都宮附近の農村では、残り苗を片付けて置く場合にも、竹のさきに苗を少しばかり逆さに結はへ付けて立てて置く。之を逆苗を打つといふ。此苗入用、他人持去ることを禁ずの意だといふ(旅、セノ一)。他の地方では刈草又は草刈場にも是と似たものを立てる。ホデ又はポントンなどと謂つて居る。

カンヅラサマ 不用になつた苗は、子供が貰つて人形などを作る。東北では稻株あねこなどといふ。駿遠諸郡のカンヅラサマも此類で、苗の葉を上臈の髪に見立てて、是に衣裳を着せるのである。若竹や筍をはたいて人形にして遊ぶのを、オカンジャケと謂ふのも御髪下げで、共にもとは貴きものとしてかしく遊びだつたらしい。

ゴキアラヒ 苗代しまひ終れば、植付用の農具を洗ひ整理し、苗を釜の肩に載せて祭る。之を御器洗ひといふ(加東)。御器は食器、田植に先だつて一旦食器を淨める習はしがもと有つたらしく。

一一 苗日・苗止め

ナヘビ 苗日といふ語は、二つ以上の意味に用ゐられて居る。混同があつたかと思ふ。苗日に苗を取らぬといふのは忌の方らしいが、是にも日の算へ方が區々になつて居る。那須地方の苗日は種播きから四十日目、此日避けて其前後に取り(郷土史話)、或は又四十二日目と四十九日目、此日田植をする苗が病むともいふ。三河北設楽郡の田嶺では、苗日は親時きと同じ干支の日、この日田植をすると稲の發育が悪いといふが、六十一日目ではあまり遅過ぎる。中河内郡の苗日は親おろしから四十九日目、此日は苗代の場(跡か)に入ると祟りがあるといひ、是非植えようとするには人を備ふといふ(近、一ノ三)。斯ういふ障りのある日を苗日といふには、何か原由がある筈だが、苗日といふ意味も實はまだ明かになつて居ない。攝津の豊能郡にも四十九日目の田植を嫌ふ風はあるが、苗日といふのは舊四月初、現今は五月一日で、此日までに播種を終る習はしになつて居る。又同じ郡の或村では、種まき後二十日目前後に苗日がある。此日は休んで神に詣で酒を酌み、又村の入口に注連を張り病の入るのを防ぐといふ。是で見ると苗日は苗代の爲の新晴の日であつた様にも思はれる。

オホナヘビ 越後では種まきから三十三日目を、以前は大苗日と謂つて田植をしなかつた。又播種の日と同じ干支の日も大苗日と謂つたといふが(風俗問答)、此頃まで田植を続けて居たかどうかは不明である。或は十二支十干の何れかが同じ日といふことも知れぬ。

ナヘミノイハヒ 阿波名西郡の例は、播種後四十九日をナヘミと謂つて苗を採らぬ。沼津市附近でもやはり四十九日目に田植をせず、もし植ゑると稲の出來が悪いとか、家に祟があると謂つた。此等のナヘミは苗忌かと思はれる。忌といふのも只嫌ふといふので無く、一日戒慎して勞作を控へたのであらう。東京に近い南多摩郡では、苗代四十九日目を苗忌の祝と謂つて糯稻の爲に祝をする。さうして其翌日から植付けにかかつた。昔稻荷様が唐から米の種をもち來り隠して置かれたのが、四十九日目に見たら青々と芽を吹いて居た。糯は米のもとだと謂つて、其爲に此祝をするのだと傳へて居た。五十日といふのが多分古來の植ゑしほであつたらうと思ふ。

ナヘヤク 熊野の色川村などは苗代四十九日目を苗厄といひ、此日は田植も耕作もしない。同じ紀州の上山路でも、四十九日が苗厄の日であるのが、田植耕作を禁じたのは寧ろ其前日の四十八日目で、是をばダイヤクと呼んで居る。

シジフクナヘ 伯耆でも播種後四十九日目を四十九苗と謂つて、此日田植をせぬ習はしがあ

る(因伯民談一ノ五)。

ナハシロヤク 苗代に靱を下してから六十一日目を、苗代厄と稱してその苗代田に行かぬ處がある(有田民俗誌)。伊勢の飯南郡でも水口祭から四十九日目と六十一日目を苗厄と謂つて、家の者は一切田に近よらぬ。犯すと死ぬとか目が潰れるとか謂つて、どうしても田に水を當てねばならぬ時は人を頼む。六十一日目は同じ干支の日といふも同じである。この二度の日は祭の日ではなかつたかと思ふ。もしさうだつたら謹慎は當然のことである。苗代の場に行かぬといふのも、神がそれへ降りたまふものと思つたからとも見られる。

ゲンジキ 駿河の富士郡では、夏至の日に苗を植ゑるのをゲンジキといひ、乞食になると謂つて之を忌む。

イセノオタウエ 五月最初の卯の日を伊勢の御田植と謂つて、越後の刈羽郡などは以前は嚴重な休み日であつた。此日もし勤くと村人の制裁を受けた。休み日に働けば夏の日の夕立が村をよけて通ると謂ひ、そんなに雨をほしがらぬのならば、屋根は入用が無からうといつて屋根を剝がれたさうである。伊勢の御田植の日が、田植に悪い日であつた筈はない。寧ろ餘りに好い日なるが故に、常人は之を避けたものと見られる。この御田植は諸國の農村でも行はれた。例へば三河

の北設樂には、初穂田又は大神宮様の田と稱して僅かばかりの田があり、村の舊家で男の手ばかりで毎年作つて居る處がある。信州小谷の神明様の御田植は、舊二月九日の神態であつた。雪の上に畦をこしらへ、松の葉を苗に見たて、田植をした。羽後角館附近の村の御伊勢の田植は半夏の日で、二把の苗を取つて川へ流す習はしであつた。

ヤマノカミノタウエ 豊岐では舊五月十二日を山の神の田植といひ、牛の使役を戒めた(郷、七ノ五)。

ムイカダ 舊五月六日田植を忌む風は弘く存する。北安曇では是を六日田と謂つて居る。

ボウスバキ 栃木縣東部にては、五月六日をボウスバキと稱し、田植をすることを戒めて居る。

ボウスバキ又はボウバキは、脚が棒のやうになる病氣で、此日田に入ると此病にかゝると恐れて居たのである。那須與一が屋島で扇の的を射るときに、我領内では永くこの一日を休ましめる約束をして、神に祈念したからと傳へられるが、同じ約束の範圍はずつと弘いのである。山を越えて常陸の多賀郡でも、五月六日田に入ると、足が棒足になるといふ村がある。或村では五月五日。

ソガドノタウエ 上總では五月六日又は其前後の一日、蘇我殿の田植と稱して、田を植ゑては悪い日がある。蘇我殿は荒れ日に田植をし、又殿の間から入日を招き返したので、其咎によつ



て没落したといふ。蘇我は市原郡の地名で、そこに古から傳はる口碑らしいが、現在では往々蘇我入鹿の事のやうに考へられて居る。神の御田植日といふ例は外にも多い。六月二十三日を地藏様の御田植、同九日を田の神様の御田植などといふのもそれだが、是にたとへ萬燈をあげ踊を催すなどの行事があつて、田植を忌むといふことは聞かない(芳賀)。

エントイビ 田植をせぬ日。此日田植をして作つた米は神様がよろこばれぬといふ(阿賀)。又コウビに田植をした米は、葬式の飯になると謂つて、此日田植をせぬ土地もある(北設楽)。地火の日といふのにも田畠に入らない。

ナヘドメ 田植中もし雨が降つて寒い日があると、觸れをまはして其日一だけ田植を延期する。之を北嵐とも又苗止めとも謂つて居る(甲斐)。

一二 初 田 植

ウエゾメ 植初め。天草島では舊四月卯の日に、二三把でも苗を挿し、之を卯の月卯の日の植初めと謂ふ處がある。土地の方言でウーナルは多くなることである。其語音によるものゝやうに謂つて居る(民俗志)。

ナヘビラキ 最上郡では苗代種播きから三十三日目に、形ばかりの田植を行ひ、之を苗開きと謂ふ村がある。ヒラキは開始の意かと思はれる。

サンジフサンビラキ 南安曇では種下しから三十三日目を田植初めの日とし、此日は必ず一株でも植えて置かねばならぬといふ。是を三十三開きと謂ふのは一種の諺で、多分サビラキから導かれた言葉であらうと思ふ。

サビラキ サ即ち田植作業を始める日。親播き後三十三日目と定めて居る地方は、南安曇又羽後の仙北郡にもある。後者に於ては田の水口の儘かな面積を劃して之をサビラキ田と稱し、そこへ三把の苗を栽ゑる習ひであつた。其晩には苗取棒を二つ爐の鉤につるして、田の神様へと謂つて小豆汁を添へた膳を供へた。或は朝のうちに田の神に苗を供へて祭り、後その苗を水口に栽ゑた例もある(平鹿)。田植初めをサビラキと呼ぶ土地は、右の二縣の外にも埼玉縣東部、信州では下伊那郡、三河の各郡と尾張の一部。京都周囲の農村でサブラキ又はサブラケと稱して、栗の枝や朴の枝に食物を包んで田の畔に立てるもの、亦此日の田神祭かと思はれる。それから和歌山縣の多くの郡、又徳島縣にもサビラキの名稱がある。三十三日目ではないが、何れも田植開始の日のことである。

サイタテ 田植の初日(伊香)。

サイケ 香川縣西部は一般に、始めて苗を移植する日をサイケ又はサイケンと謂ひ、以前は水口へ實のなる樹の枝を刺し立て、田の神を祭り、家では又赤飯を炊き篩に盛つて豎白に供へた。村によつては此日同じく田を植ゑる家とは火を交へず、めい／＼藁のほでに火をつけて、田へ行くに携へて出たといふ(西讃府誌)。サイケといふ語は又阿波にもあり(勝浦)、土佐でも苗開きの日をサイケと謂ひ、夕方にその植初め田の畔へ杉などの小枝を立てた(風、二九)。淡路島でも田植初めを古くから、サイキ又はサエキと謂つて居た。植ゑる前にかし米(洗米)を袋に入れて田の水口に供へ、その卸しを田主には與へずに、早乙女だけで食べてから田植にかゝつた(風俗傳書)。サエキとサイケと何れが元であるかは、意味が明かでない爲にまだ決することが出来ない。

サオリ 静岡縣の幾つかの郡では、田植初め日の祝をサオリと謂ひ、稻が黒むやうにとて小豆飯に海草の菜を添へて食べる(榛原、小笠)。或はサオラといふ處もあるが、多分はサの神の降りたまふ日であらうことは、田植終りのサノポリと比べて察し得られる。同じ名稱の分布は鳥取縣の一部にも及び、是をワサウエ即ち苗植初め日のこととも謂へば(西伯、因伯民談一ノ五)。又はこの際に祭る神を、サオーサン或はサオリサンとも稱へて居る。通例は十二株の苗を田の縁に近く栽を、其

まん中へ栗の枝に、若海布を御幣の如く下げたものを立て、是に若荷だけと米とを藁の葉に包んだものを結へ付けて供へる(民俗學四ノ五)。

ソウリ 關東では千葉縣の東半分でソウリ又はソウレイと謂ふのがサオリのことらしい。夷隅郡では播種後三十日目の祭だと謂つて居るが、他の郡では何れも田植初めの日がソウリである。香取郡では之をソウレイと訛り、或は挿禮などといふ六つかしい字を宛てゝ居る。對岸の茨城縣内にも同じ名がある。之を一般の田植のことだといふのは(風、三六九)、誤りらしい。それからつと飛離れて、鹿兒嶋縣の喜界島でソオイといふのも、沖縄のアラソウリなどを考へ合せると、やはり同じ意味のサオリなることは疑ひが無い。四月七八日頃の定つた一日で、此日は麥飯を炊いて食べ、又何か海の物を食はぬと誓になると言ひ傳へて、蟹・貝・小魚等を捕つて來て汁の實にする習はしがあるといふ。

タオレ 美濃の加茂郡ではサビラキを又タビラキと謂ふ例もあるから、隱岐島で田植初期の田祭をタオレといふのも、伯耆その他のサオリと同じかも知れぬ。島前の或村々で新曆六月の七日頃に、部落共同して行ふ式である。山から採つて來たハシキといふ木の枝に、その葉毎に五穀を包んで、藁しべで結んでマキを作り、平年は十二、閏年は十三附けたものを、大字のほと中央に

在る田のまん中に立てる。この食物を稻の種と見立てるのださうである。ハシキは或は朴の木ではないかと思ふ。木曾でも同じ頃即ち舊五月の五日に、朴の葉餅といふのをこしらへて田の畔に神を祭る。是も枝に附いたまゝの葉に餅を包み、蒸して巻餅にするのである。

アシソウリ 安房の小瀧神社でサウリの神事といふのは、四月の吉日を擇んで蘆の莖を刈取り、之を氏神並に諸神に献する式であつて、上總でソウリといふ田植始めの行事と、もとは一つであつたことが察せられる。長生郡などでは其ソウリの日、蘆を三本田に立て、三株五株又は七株の苗を其周りに栽ゑて祝ひをする。此式を蘆ソウリと謂つて居る。是はたゞ田の植初めであつて残りの苗は更に期を見て栽ゑるのださうである(南總の俚俗)。

ヨシウエ 東上總では蘆ソウリといふ田植初めの式を、君津郡の方では又葭植といふ。ヨシ即ち蘆を切つて苗を共につかみ、

我よし人よし、人よしわれよし

など、唱へながら、十二株ほど植ゑるのだといふ(民族二ノ四)。期日は新舊六月中の吉日、又は丑の日ともいふ。麥を刈つて神に供へ、それからこのヨシと苗とを合せたものを、二手又は十二手植ゑる。蘆の如くすこやかに、稲苗の成長することを念じたものゝやうである。

アラソウリ 沖縄の田植は季節がすつと早く、舊曆の十二月から始まるのを常とする。此島のアラソウリは其前月中に吉日を擇び、苗代から三本の苗を田に移し植ゑる式である。十二月に入ると更に又ムカヘソウリといふ行事がある(方言二ノ二)。

ムカヘソウリ 舊十二月の田植に先だつこと數日、アラソウリよりは十數日の後に、再び七本の苗を苗代から取つて來て本田に植ゑることを、沖縄ではンケソウリと謂つて居る。即ち迎へサオリ、第二回目の田神祭である。

ワサウエ 田植始めの日をワサ植といふ區域は廣い。現在知られて居る例を挙げると、肥前北高來郡、筑前糟屋郡、こゝでは遠州東部のサオリの如く、小豆飯を炊いて祝し、又田の隅に神酒と共に供へた。さうせぬと田が黒くならぬと謂ふ。豊後でも初田植を根おろしといふ以外に、又ワサウエ・ワセウエなどいふ土地もある。中國では周防大島郡、こゝでも苗五株ほどを家の主人が自ら植ゑ、御飯をツワの葉に包んでサンバイ様に供へる。日は五月の壬癸の日を用ゐるといふ。それから安藝安佐郡と(民俗藝術一ノ二)岡山附近、石見はワビラキといふ土地の方が多いが、鹿足にはワサウエの例があり、出雲にも田の植初めの日をワサウエと謂つて、田の片隅を代に搔いて少しの苗を栽ゑ、そこに栗の枝の花あるものを折りて挿す風がある(民族三ノ四)。鳥取縣は

因伯二國ともにワサウエで、通例初苗を十二かま挿し、蔦と若荷で田の神を祀ることは、前にサオリの條に述べた通りである。それから東へ来て播州の多可郡、攝津の川邊豊能二郡、紀州の日高郡でも又佐渡島でも、共に田植の第一日がワサウエであつて、正月の飾り木を保存して置いて此日焚くとか、小豆飯を炊いて神を祭るとかいふ一定の作法がある。ワセは現在は早熟種の稲のことであるが、本來は馳せると同じで、たゞ早いといふだけの意味であつたらしく、この最初の日に植ゑる苗をワサナへといふ土地もある。さうして又ワサウエをワサ田植ともいふのである。飛騨ではユヒヤ雇ひ人で植ゑる田をホンダといふに對して、何かの都合で家内の者だけで植ゑてしまふ田をワセダと呼んで居る(ひだ人四ノ七)。是も恐らくは早く済ませて置くからであらう。

ノタテ 熊野の東牟婁郡では田の植初めの日、小豆飯を榊に入れ焼味噌を蔦の葉に包み、是に苗三把を添へて飾り、又大植ゑの日を此日きめる。ノダテは野立てかといふ説もあるが、村によつてはノダネともノダケとも謂ふから宛てにならぬ。但し大分縣にはこの日を又ノベダテといふ語もある。

オネオロシ 田植初めの日と呼ぶ名前が、大分縣には甚だ多い(豊後方言集三)。オネオロシ・ネオロシは別にネヅケといふ語もあるから、種下しに對する根下しであらう。

ハツメド 初田植のこと(下野河内)。メドは關東一般に穴を意味する。

コウジツ 田植初めの日。白飯を神に供へ他の仕事を休む(磐田)。

ナヘマツリ 苗祭。ワサ植ゑの日の式。南河内では茅葉と百合二本づゝを田の水口に立て、神酒と數々の食物とを箕に入れて祭をする。其食物の中には他の地方と共通な赤飯、海布、蔦等がある。

タツナノメシ 紀州有田郡で、田植始めの日に神に供へ、又田人に食べさせる飯をさう謂ふ。若薄の新らしい箸を添へる。日高の山村でも、此日祭る神をタツナサマと呼び、早乙女が此飯を食べると腰が痛まぬといふ。東牟婁郡でタツネといふのは此日の祭のことであるが、是も亦同じ言葉かと思ふ。那智村の一例を擧げるならば、十五把又は二十一把の苗を取り、之を三把づゝ三脚形に組合せ、タツといふ木の葉で覆うて、其上に赤飯と魚、蔦と若荷などの肴を載せる。此飯の米は正月に神棚に上げたものを用ゐる。此飯をいたゞいて食べると夏まけをせぬといふ(郡誌下)。

フキダハラ 奈良縣山邊郡で、サビラキの日の田の神の供物である。又福俵ともいふ。蔦の葉に炒豆と米とを包んだもの、平年には十二閏年には十三こしらへて、田には茅十二本を立て、之を供へてから植付けにかゝる。後に家に持つて還つて一同で食べる(なら一五)。

ワカキノオチヤ 筑後八女郡の例。正月二日の若木迎へに、檜の木などを一本伐つて来て貯へて置き、五月田植初めの日に之を焚いて茶をわかし、一同で飲む風がある。それを若木の御茶と謂ふ。

一三 さんばい降し

サンボウソウリ 下總香取郡の田植初めの式に、縦横各三株づゝ合せて九株だけ植ゑることを、土地では三方總植ゑと謂ふさうだが(郷、四ノ一)、サウウエは後から取付けた合理解釋かと思はれる。上總の山武郡ではこの植初めの日をサンボウソウリと稱し、それから更に四五日乃至十日を置いて、本ソウリがあつて一齊に植ゑるといふ(同上五ノ七)。さうすれば是も亦サオリと同じであつて、たゞサンボウといふ語が問題になるのである。

サンボダテ 香取山武の二郡に近接した海上郡では、田植祝をサンボダテと謂つて居る。タツは神靈の出現を意味するから、是も五月の神を迎へることかと考へられる。サンボは乃ちサオリ、サノボリのサと同じであつたのである。中國地方でいふ田の神のサンバイサマを、周防都濃郡の田植唄では三寶様と謂つて居る(無敵集五二〇頁)。

オサバイダ 阿波の祖谷山などでは、田植初めの式を行ふ田をオサバイ田と謂ひ、この日生米や炒粉を蔭の葉又は紙に包んで神を祭り、其前で田植をすることをオサバイ降しと謂ふ。但し此山村ではオサバイの神を蛇だといひ、田植時には蛇を大切にするさうである。蛇の形を假りて現はれたまふといふ意味かと思はれる。

サンバイオロシ 土佐の西部では初サビラキ即ち田植始めの日の式をオサバイ降しと謂ひ、粟の枝を田に立て、是に十二本の葉を結び付ける(民衆二ノ四)。土地によつては此祭を、春の彼岸の中日に行ふ處もあり(土佐風俗と傳説一四頁)、又幡多郡などではサナボリ即ち田植終りの祭をも、オサバイオロシと稱してよく似た式を行ふさうだが、他の地方ではこの後者は、サンバイアゲといふのが普通である。このオサバイ又はサンバイオロシの行事の、今でも正式に行はれて居る區域は、四國は先づ全部、中國地方は西の半分で、其他には只飛びくゝに、稀に痕跡を見る程度であるが、祭り方には可なり明かな一致が見られる。即ち必ず取つた苗を飾ることが一つで、之を供物と見る處と、神の依代と考へて居る處とがあるらしい。次には季節の樹の枝や芒もしくは蘆の莖を、臨時の祭壇に立てること、及び此神に供へた食物に、人を幸福にする力があると信ずることなどである。神降しの折の唱へごと、又は此神をたゞへた田植唄を集めて見ると、古來の信仰

さんばい降し

が少しづつ明かになつて来るやうに思ふ。

けふの田の、サンバイ様をおろすには

どのくぼへ、三すまの窪のまん中へ

斯ういふ種類の歌が、島根廣島の二縣には數多く今もうたはれて居る。

サンバイサマ 田植初めの日のオサバイ降しの祭りには、田の水口に土を盛つて、そこに花の附いた栗の枝など、共に、三株の苗を立てる例が、阿波にも伊豫にも又備後その他にもある。それで此神を三把さまと謂ふのだとの傳へは古くからあつたが(福山領風俗問狀答書)、是は容易には信じられない。言葉の來由はまだ明かでないが、又何故にさういふのかも知らぬが、兎に角サンバイが田神であることは確かな様である。出雲でも同じ一つの田植唄で、甲の郡にはサンバイ様といふ所を、乙では御田の神とうたつて居り(方言考)、或は又タアライ様と謂ふ村もある。但し此名をいふのは主として或地方の田植時で、他の土地他の季節には別に色々の名がある。サンバイ様の信仰にも少しづつ、の變化があつて、中にはその若苗を飾つた木の枝を稻刈りの日まで田に残し、最後の稲束の上に載せて、持つて還るもの(幡多)、又は初田植の祭が終つた時に、

十月の亥の日には戌亥の方から

俵橋金橋で御出でなさつて下さい

と謂つたり、又は

子を投げてつかはさつたら

來年からは親子づれで

おさんばい様をおろします

と唱へると、子が生れると信じて居る處もある(喜多)。サンバイ様の供物は、苗を植えてそこに行き當つた早乙女が取つて、家に持つて還つて分けて食べる(上浮穴)。之を食べると腰が痛くならぬともいふ(美馬)。

サンバイマチ 阿波のオサバイ田も同じ様に、サンバイ様を降す田はきまつて居る例が多い。家の者は夕食が終つてから、一同是に参りに行く土地もある(比婆)。石見那賀郡では、其祭をする田をサンバイマチと謂つて居る。

サバラヒ 舊六月晦日の夏越の行事を、サバラヒと謂ふ土地が山口縣には多い。是と田の神のサンバイ様と、關係が有るか否かは決しかねるが、是にも田植の残りの稲苗を陰乾しにして置いて、牛馬を川へ入れて洗ふといふ風習はある。稻の害虫をサバへと謂ひ、虫送りをサバへ送りとい

さんばい降し

ふのは別の語と認められて居るが、なほ或は起原に於て、繋がるものがないとは限らぬ。安藝や讃岐で田植終りの祝をサンバイといふのは、恐らくサンバイアゲの略語であらうと思ふ。

ソウトクサマ 田植始めの日をソウトク又はソウトクサマと謂ふ地方がある(豊後方言集三)。或は本田植に苗三把を水口に祭り、正月の搗初めに搗いた米を飯に炊いて供へ、又ソウトクオロシといふ田植唄をうたふ例もある(阿哲)。田の神と歳の神とを同じと考へ、正月に田の神の御札と謂つて、歳徳神の像を配る風も東北にはあるから、ソウトクは或は歳徳神の訛りかも知れぬ。

タアライサマ 出雲の能義郡では、タアライ様は田の神の名だと謂ひ、此神を詠じた多くの田植唄がある。

タアライ様は小だてな男 云々
といふ歌もある(俚語集三三〇頁)。

タノカミ 田植唄や祭詞の既に衰へた地方では、田の神は大抵たゞ田神と稱へて祭られて居る。是も春は天より降り、秋は再び降り登りたまふといふ信仰が全国的だが、其祭日は稲作行事の期間よりもずつと離れて居る。關東東北は通例二月と十月で、神は杵の音を聴いて來去したまふと謂つて必ず餅を搗く。能登では田の神の祭が特に殷勤で、春の神は白足だとして白飯を供へ、

暮の田神は赤足だからとて赤飯を上げ、或は田の神様は久しく土の底に居て御目が悪いと謂つて、食物を一々説明して供へる風もある(珠洲)。九州殊に薩摩大隅には、田の畦に田神の石像が多く、村々でも田の神と謂つて、二月と十月の丑寅の日に祭をする(肝屬)。二月には田に降り、十月には山に行きたまふといふ。舊の九月に此神を祭る例も往々ある。つまりは稲作の始から終まで、田にいます神と信ぜられて居たのである。神の御姿は定まつた像が無く、我々のまぼろしはまだ自由である。魚とか虫とかの形を假りて人に見えたまふことがあると傳へられて居る。

タンテンジン 壹岐島では田の神を田の天神といふ名がある。島根縣などの田植唄の中にも、サンバイ様は日を父とし、水を母として高山の頂に、春毎に生れ降りたまふやうに歌つたものが多い。

一四 田人と田植飯

タウエグミ 田植組といふ名は以前の記録にもある。土地によつては是を臨時の申合せとせず、常設の団体として、頭番を以て地神祭などを営むものもあつた(周防佐波)。

モアヒウエ 共同の田植(見島)。或はモアヒダとも謂つて、頼母子と同じ組織で、毎年順番に或

一人の田植に、勞力を助成する方法もあつた(肝屬)。

ヨエタツクリ 東北では一般に、ユヒをヨエ又はヨイと謂ふ。その結ひに由つて共同の耕作をするのを結田作り(稗賈)。主として田植の際が時を惜む故に、よその手を必要としたことと思はれる。

ユヒダ 特に代ごしらへにユヒを雇ふ場合のみを、結田と呼んで居る土地がある。其場合にも晩には酒食を出し、仕事の十分でなかつた者が、オチチの飯を強ひられるなどの風習がある(双葉)。或は成年の條件として、一人一反の田を打つことを必要として居る土地で、たま／＼幼少の者を元服させるについて、酒を出して青年の助力を頼むことがある。さういふ場合だけをユヒ田と謂ふことになつて居る例もある(行方)。

ヒエトリ 田植を一日にしてしまふこと(北設楽)。稗とは關係がなく、僅かな仕事だから共同のあひまに済ませる意味ではないかと思ふ。

カンナイ 飛騨ではユヒ又は雇ひ人で植ゑる田をホンダと謂ひ、僅かな面積か又は水の手都合などで、家内だけで先づ植ゑる場合をワセダ、もしくはカンナイといふ村もある(ひだ人四ノ七)。其意味はまだわからぬ。

タウド 本來は田人であつて、田植の日に働く男女の全群を意味する語かと思ふが、信州では現在は広く日雇を意味し、タウドに行く又タウド取りなどの語もあり、越後タウド・大町タウド等の名稱も行はれて居る。越後も頸城地方では、田植の日に無償で手傳に來る者のみをタウドと謂ふらしく、佐渡では又田へ出る男の人足のことだといふ(佐渡の民話)。或は正月十四日の晩、田植の演伎をして餅などを貰ひに來る者だけを、タウドと謂つて居る土地もある(南魚沼)。九州の南の方では頸城と近く、小作料を納める代りに勞力を提供することを、作業の種目に拘らずタウドといふ例もあつて(球磨)、是だけを見ると手人の意かと思はれるが、なほ全國を通じていふと田植の場合に限るのが多い。この日働く者のうち男をアトシ、女のみをトンドと謂ふ處があり(南河内)、さうかと思ふと男の働き手までを、シヨトメ即ち早乙女といふ地方もあるのである(由利)。

サツキタウド 五月田植の爲によそから來て働いてくれる人々、五月田人と書くべきである。是を舊十月の十日夜に招いて饗應する處と(北安曇)、又正月望の宵によふ處とがある。此場合には勿論サヲトメをも含ませて謂ふのである。

タチウド 田植の日に田で働く男たちのことで、是をサヲトメの屈んで仕事をするに對して、立人といふのは古語であり、田植唄の戀の詞にもよく詠まれて居る。此語の今も行はれて居るの

は飛騨の山地と能登半島などで、共に之に對して女をサヲトメと謂ふのであるが、なほ後者に在つては立人が竿を以て指揮し又田唄を歌ふ故に、立音頭だなど、誤つた説明をして居る(珠洲郡誌)。しかし其以外に帆をさし水を見まはり苗を取つたりする役も立人である。代すきだけは別にした處もあれば、徳島縣では苗取りを立人早乙女の外に算へて居る(美馬)。青森縣では是をタチドといふ。苗配りの役をも含んで居るのであるが(野邊地方言集)、こゝでも田打人だといふ説があつたらしい。立人の中の差圖役を鉄頭といふ。或は又トネといふ地方もあつた。

シロシ 田植の際に代をかく人。或は男の立人の總稱にもなつて居る(飯島)。

アトシ 田植の男人夫(南河内)。植女の後に居て働くからである。

コバン 田の地均し苗濯ぎなどの役を小番といふ(西山梨)。立人の中では比較的重要な仕事でないからさう謂ふか。

シリワタリ 後渡り。田植の日に苗を配る仕事(扇防熊毛)。植手は植ゑながら後へさがつて行くから、其邪魔にならぬ様に、程よく入用の苗束を配つて行くのである。あいつは尻渡りが上手だといふ言葉は、他の色々の意味にも用ゐられる。

ナヘマハシ 苗を植田に運んであるく役(仁多、南秋田)。又大苗打ちとも謂ふ。マハスは東北で

は運ぶ・贈る、その他多くの意味に使はれて居る。

コシナヘ 苗代から苗を持ち運ぶこと(多賀)。コシは引越しなどの越し。

ナヘウチ 田植する田へ苗束を入れることを、多くの土地で苗を打つといふ。適量を適所へ投込むのだから、十分な経験と相當な力とを要する。大人の役である。此語がもう忘れられて、小苗打ちの名だけ残り、又此方を苗打ちと呼んで居る土地もある。

オホナヘウチ 苗打ちを大小の二つに分けて居る例は多い。大苗打ちは即ち田毎に苗を配る役である。元は籠に入れて背負うて配つたので、早乙女四五人位に大苗打ち一人を要した。早乙女の手で苗の切れざるやう氣を付けて立ちまはらぬと、植手がさし支へて無益にたゝすむ也(私家農事談)。

コナヘウチ 苗打ちの小番。常に子供の役である。中國では苗サバキ、東北では小苗フチ、長者どの、田植などには此連中が多く出て賑はしかつた(薄の出湯)。小正月の田遊びのわざをぎに、女の兒はシヨトメにまやつたと謂ひ、男の兒はコナヤウチまやつたと謂つて來るのが(仙北)、其名残である。能登では苗打ちともコンニヤウチとも謂ひ、終日田に出て居て興奮した早乙女たちにからかはれる(民族一ノ四)。小苗打ちにも御膳をしようなど、謂つて笑はれるので、少年は早く

一人前の立人になりたがる。

トウナイブチ 苗を水田に配り投げること(氣仙)。小苗打ちの訛りかと思はれる。

サナヘブチ 田の畔に立つて苗を配つてまはる役、普通は男の兒を使ふが、少女も加はることがある(由利)。

コナヘクバリ 東筑摩郡では、田植に苗を配る役をコネクバリといふ。子供の役。

コナヘモチ 苗を早乙女たちの手元に配る役、少年である爲によく女たちの慰みものにせられる。中頸城郡の田植唄にも

小苗もちの小やろ

とんびはさらつた

などいふ文句がある。南安曇郡でもコネエモチ。

ナヘモチコドモ 小苗持ちの少年を戯れ詠じた田植唄は多い。石見の邑智郡の一つは、

苗もち子供は蜻蛉を釣れかしの

苗をくれやくと云うて腰をのすによ

即ち苗の催促にかこつけて、腰の痛さを休めたいといふのである。もつとはげしいのは下總海上

郡に、

苗ぶち野郎がちんばだらよかんべエ

びつこちやかたたら來るときに

おらちも腰を休めべえ

といふのさへある(續狸講集)。其苗持ちも今は苗舟で苗を運ぶやうになつて、いちめられずに住む様になつた(安曇山縣)。

タロウジ 田主即ち田あるじの訛りであつて、以前は少くとも大田植には臨場し、田植の缺くべからざる一役であり、従つて又田唄の題材でもあつた。

腰の痛さに立つぞやたるじ

そらに立つとは思ふな太郎次 (西美城)

これなどはまだ監督する人の感じを傳へて居る。奥能登の或舊家では、今でも主人が竹の杖をついて田の畔に立ち、田植の香頭を取る者があるといふ(民族一ノ四)。越中射水郡の牧野村に、昔牧野太郎二といふ長者があつたと傳へられるのは、此村特有の田唄に幾つかの太郎二の歌があるからである(郷誌)。

太郎二の娘はどりやそりや

紋や錦の紐しめて

しかし是とよく似た歌はそちこちの縣にもある。此傳説は全くの誤解である。このタロウジが土地によつては、旦那の次の位といふ作大將のこととなり(北設楽)、又は田植に苗を配る人のこと、もなつて居る(芳賀)。信州でも上伊那などでは、小さな子供の苗配りをする者を呼ぶ名になつて居る。

タヌシ 田主を又タヌシと謂ふ地方も多い。備中川上郡高倉村の囃し田の歌に、

けふの田のタヌシのやかたは

八棟造りの檜はだ葺き

といふのがある。村の人は是を説明して、タヌシの屋形は田螺の殻のことだなどといふ。田螺は百姓の寶で、一日に稻株のまはり七度まはるので稻の爲によい。それで縁喜を祝した歌だともいふさうである。地主を今でもタヌシといふ處は九州にある(速見)。種子島ではタジユウ、淡路でもタズ又はチオヤといふ語がある。共に田主即ち地主のことである。

ウエタウド 田植に働く女をサヲトメ、男をタウドと分けていふ所は多いが、肥前江島には植

田人といふ語がある。但しこの島では備はれて来る人に限られて居る。

サツキランナ 那須では田植の女を五月女といひ、五月女に秋男といふ諺もある(郷土史話)。稻刈りには男の手の大切なことを謂つたものと思ふ。

サヲトメ 或はソウトメ又シヨトメといふ所もあるが、現在この語のなほ用ゐられて居る地域は、東西に亘つて中々広い。但し所謂家早乙女は除いて、カタメ即ちユヒによつて、家々互ひに助け合ふ人だけに限つてさう謂ふ土地があるのは(舞津多田)、是がサヲトメの最も晴とする場合だからであらう。羽後由利郡の沿海では、莊内の方から来る田植時の出稼人が、男女とも自らシヨトメと路を呼びあるいて雇はれる。仙北郡ではヨテナベ即ち最終田植日の夕に小宴を催し、働いてくれた男女を招いて祝ひの歌をうたふ。此時に限つて女を上席とし、之をシヨトメと呼ぶさうである(民族一ノ四)。或は田植の日には既に此語を使はず、只之と因みのある別の場合のみ残つて居ることもある。たとへば備後比婆郡で正月四日又は十一日の鉋始めに、田に松の枝を立て、其周圍に十二本の芒の穂の小さな幣を立てる。その十二本の芒をソウトメと呼んで居る。ハナムスメ 佐賀市の周圍ではサヲトメを花娘と謂ふ。晴の田植日に新装して出るからで、奥羽で一般に花菖蒲をシヨトメといふのも同じ氣持の裏表である。田植女の服装は、少しづつは

土地によつてちがつて居たが、前代の若い女性の好みを知らしめる。上總の君津などでは、腕ぬきといふ筒袖単衣の上に、カンコといふ袖無しの腰までの袴を着、赤い袴に手甲で、もゝ引をはき、手拭の上に菅笠又は編笠を被つた。この手拭は全國一樣に、早くから白の木綿になり、是に桔梗色などの鮮かな模様を染めたのが、流行といふものゝ田舎に入つたものであつた。

イヘサウトメ 田主の家から出る田植女で、本來は他所から来る早乙女と區別する語であつたらうが、其中の一人を殊に美しく着飾らせて、田人に食物を運ぶ役をもたせたらしい。是を詠歌した田植歌の詞章は多い。タロジの娘はどれがそだといふ文句なども、この晝餉持ちの家早乙女のことをいふと思はれる。

オナリド 又はオナリサマ。田植の日に田人に食物を運ぶ役をする女を、中國西部の四五の縣で専らさう呼んで居た。東日本では是をヒルマモチ、古い記録には養ひ女ともあり、現在も炊事と之に伴なふ雑役とに任ずる者をオナリといふ土地は少なくないが、田植の折のオナリ人は更に特別の役目を帯びて居て、たとへば苗取りの束ね藁なども、彼女の手から渡す風もあつた(日本奇風集一〇九頁)。田植唄の中にはオナリ人の美しさと盛装、之をなつかしがり待ち焦がれる心持などを歌つたものが至つて多い。近世は家の娘や嫁でなく、外から雇ひ入れる者が多かつたが、歌

にはしばしば長者の娘などが自ら其任に當り、又は遙々と遠い土地から来ることになつて居る。是が田の神の祭の缺くべからざる仕人であつたことは、阿蘇や豊前、求菩提山の御田祭に、宇奈利といふ女の役的重要であつた點からも察せられる。なほ沖縄の諸島で姉妹をウナリと謂ひ、其生靈を以て兄弟の守護神とする信仰のあつたことも参照すべきである。

サイハカ 田植唄の中には折々出て来る言葉で、或はサイハカノトノといふこともあるが、

わかい娘にさいはかもたし

さいはかよくば 嫁にしよと

といふ歌がある。早乙女の頭をサイハカといふは早苗速と申す心にて候やといふ説もあるが(淡路風俗答書)、此サイは多分サキヤマなどのサキと同じで、五月のサとは關係が無いのであらう。ハカは即ち田植の一人持ちの行數をも謂ふから、是が田植女の群の指導者であつたことは想像せられる。

カナハバ 苗の植幅(周防熊毛)。カナといふのは苗株のことである。カナを小さくもて、又はあらく持てなどいふ由(阿哲)。

ラチウエ ラチは田植の時の苗と苗との間隔。是をめいめいの目分量手加減に任ずのがラチ植

らしく、其爲に仕事のハカが進んだ。乃ち今日の正條繩植に對するものである。ラチといふ語の行はるゝ區域は広く、又大ラチ小ラチの名稱もある(芳賀、西春日井)。飛騨でダチアヒと謂ふのも同じ語の訛りである。或は是を又マチといふ土地もある。

カイドウ 苗と苗との間隔を、横をウマグハノコもしくはコ、縦をケタともカイドウともいふ處がある(安藝山縣)。カイドウが山形になるのをマキドウに植ゑると謂ひ、他人の苗列の方へ曲つて行くのをコツボウ尻に植ゑるといふさうである。コツボウは蟻地獄の方言である。

ナリサホ 植田の畦うらに立てゝ畝あひをきめる小さな竿。ナリは形を作ることであらうか。畝間をサホといふ處は方々にあるから、以前も正條を立てゝ地面を遊ばせぬ様にする心がけはあつたので、只田植女の手の練習が、今よりも重んぜられて居ただけである。

ウルメダ 田植は前面から植ゑて下るのが本式であつたらしいことは、植ゑてしやれ〜といふ田植唄の囃し詞でも察せられる。備中川上郡で其植方をウルメ田といふのは、多分植女田の訛りで、是が古來の手ぶりであつたことを意味するものであらう。

コスリオトシ 竹のそいだものを指にはめて居て、引離す拍子で苗を植ゑて行く方法だといふ

(安藝山縣)。

ツマム 田植のとき一度にやゝ多くの苗を植ゑることを謂ふ。苗代の跡などの虫が付きやすい田はつまんで植ゑる(仲多度)。

コシウエ 腰植をするとオサンバイの神が御腹立ちになる。腰植をすると必ず腰が痛くなるなどいふ(伊豫史談六八)。

アゼマタギ 田仕事はすべて一枚の田をすませば少し休むのを例とする。それを正規の休み時間までは續けて働かせようとする、あそこでは噂跨ぎをさせるとて憎まれ、次第に日傭が得にくくなる(ひだ人四ノ七)。

タナ 田植の時は兩端に熟練した女を配置し、中央に手なれぬ者を置く。それで其部分だけがまだ前の方に残つて居ることを、棚に上げられるといふ。

十八が棚に上げられ苗たもれ

苗たもれサイハカのと

といふ歌もある(一志)。

ツボニスル 中國四國の各地で、田植の女が植ゑおくれて、自分の場所ばかり灣のやうになつたのをツボと謂ひ、わざと斯うして未熟な若嫁などを困らせようとすることを壺にするといふ。

田の畔の一端まで植ゑて来て、くるりと引返す時にこの一人が殊に目立つのである。是を又袋にはいるといふ處もある(揖斐)。

アナニスル 信州では早乙女の一人がハカがおくれて後に残り、又は向きが變つた列の人々から植ゑまはされることを穴に置かれると謂つて、忍び難い恥として居る。同じ言葉は既に百五十年も前から行はれて居た(伊那の中路)。

タイハヒ 阿波では田植の日の泥苗打ちを田祝と謂つて居る(人、一三三)。筑前では又早苗祝と謂つた。

サヲトメテガイ 土佐には近年まで早乙女手がいと謂つて、田植の日に男たちに泥を擲げて戯れる風があつた(風、二九)。テガイはふざけること、テンゴウなども同じ語。

ドログルヒ 五島でドログリ(泥ぐるひ)といふのは田植の日の悪戯。青年が植女の隙を見て苗把を肩にからはせると、女も負けては居ず泥苗を打付ける。豊年を祝する意などいふ。又ダベウチといふ島もある。肥前平島でもドベウチと謂つて居る。

ドロウチイハヒ 甲州などの泥打祝は大田のユヒ田植の日に限られ、特に昨年新婚の者に泥を打つ習ひであつた(風、二二)。墨塗りといふのも古風な悪戯で、初掣にするのみでなく、田植の日

に田主の顔にも塗つた。親方に墨ぬりをするに田の稻の色がよくなると謂つて(直入)。

ナヘウチ 天草島では田植に苗を打ちあふ戯れを苗打ちと謂ふ。こゝでは午前中はしてもよい、晝飯後はしてはならぬといふ(民俗學二ノ八)。

ノロウチ 阿蘇では田植の日にのろ打ちと謂つて、もとは通行人の殊によい衣類を着た人に泥を打付ける風があつた。オスミ田ではお澄といふ女が、武士にのろ打ちして斬られたといふ口碑が傳はつて居る(廣、六ノ四)。

ノタウチ 徳島縣では田祝を又ノタ打ちといふ處もある(美馬)。田植時に植女が青年に對して泥を打ちつけることであるが、時としては只の通行人にも、又巡察にもしたことがある。祝ひましよかと謂つて打つたといふ(郷、四ノ一一)。

タメシ 田飯、田植の日に作つて田の畔に持つて行く飯。又田植飯ともいふ。

タウエメシ 田植の日に田人の所に運んで行く飯。是には常には無い幾つかの作法を伴ひ、單に食品のめづらしいのみで無かつた。正月の新木飾り木を残して置いて焚き、又は年桶の節米を之に炊ぐなども其一例である。三河では以前は田植飯は田人だけが集まつて食し、残りがあれば川に流し又は鳥犬などの爲に野外に棄置いて、家には持つて還らぬ習ひであつた(吉田領風俗問

状答書)。

サツキメシ 田植飯は特に朴の葉を二枚合せて包み、藁で結はへたものをこしらへる地方もある。是にも必ず豆の粉を用ゐる(由利)。男鹿半島には別に五月飯と稱して、女ばかりで集まる田植終り後の祝宴がある。是をも古くは亦サツキ飯と呼んで居た。

マイベレ 能登鹿島郡では田植の日、午前九時過ぎに田へ運んで行く食事をマイベレと謂ふ。多分は前晝の地方音かと思ふ。普通には是をもコビル又はコビリと呼んで居る。田植時の小晝には小さな握飯に豆の粉をまぶし、朴の葉もしくはウルイ(玉簪)の葉で包んだものをこしらへる處が多い(平鹿)。

タナハナ 伊勢河藝郡では、以前は田植の日、必ず飯にコガシをふりかけて食し、之をタナハナと謂つて居た(五倍子雜筆)。東北は大抵炒豆の粉であつて、之を稻の花と謂ふのは、其色の黄なるを稻の花に見立て、祝したのである。タノハナも多分田の花であらう。粉をハナと謂ふのは普通である。

タウエボチ 一名孕み餅、田植の日に田人に食べさす食物、米の粉を練り小豆又は豌豆の餡を包んで草餅のやうにこしらへたもの、大きさは一つ一合ほどのもある(美濃加茂)。

ボチも餅であらうが、握つて作つた食物を皆さう謂ふ。

オザシ 田植の日の夕の食膳には缺くべからざる食物、焼肴のことである。鯛はちめ、このしる等、家々によつて定まつた規模がある。必ず朴の葉の上に一尾づゝ付ける(能登鹿島)。刺鯖のサシと同じ語か。

タツクリ 下伊那の遠山入りでは、田作りといふ小さな干魚は、田植肴として缺くべからざるものとなつて居る。田作りといふ語の起りは是でよくわかる。即ち所謂なまぐさけが無くては、田作りの作業には携はることが出来なかつたのである。

アサゴエ 田植終りの日の午前、赤飯をふかして田に持つて行き、田植をした人全体に食べさせることを朝ごえと謂ふ(吾妻)。此時の箸は正月山入の日に採つて来たぬるで(勝軍木)の木を、十四日の日に孕み箸に削つて、此日の用意にしまつて置いたもの。使用後には是を二三本づゝ各の田の水口に立てゝ置く。さうすると稻がよく稔るといふ。

一五 花 田 植

オホタウエ 大田又は大田植といふ語は、現在はまだ色々の異なる意味に用ゐられる。伊豆で

も信州でも、大田は田植のすんだ日の神祭り又祝宴だといふが(田方、上伊那、北安曇)、大田植といふと田植の一ばんの盛りの日で、是にも亦田の神を祭り、且つ色々の特殊な行事がある(南安曇)。越後では單に最も多く植ゑる日といふが(刈羽)、上總では本田の最も大きな田の植付の日で、サナブリは苗代田まで植ゑてしまつた後に別に祝ふが、この大田植の日にも祝意の酒肴が出る(君津)。紀州でも家の一番大きな田、もしくは骨の折れる田を植ゑる日が大田植で、隣近所の手傳も来て、従つて食物も特に豊かだが、別に苗祭と謂つて三把の苗に、麥粉をまぶした飯を供へ、且つ囃しをして田を植ゑる村もある(那賀)。兎に角に舊くからの作法を重んじ、念入りに仕事をする日であつたことは想像せられるが、是が中國の山間の村に行くと、殆ど經濟約束を離れて、牛を飾つて田を掻かせ、又色々の樂器を入れて、歌ひ且つ飲みつゝ祭禮のやうな賑はしさを植ゑるので、しかも家で持つて居る殊に大きな又大切な田を、是に充てるといふ點では東國の大田植とも似て居る(民族三ノ四)。斯ういふ花々しい催しにまで發達したのは後のことで、寧ろ鄭重を主とした紀州の方が、古い方式に近いのではないかと思ふ。

ホントウエ 中國には一種興行にも近い大田植の他に、別に本田植といふ古式らしいものがあった。此方が却つて東日本の大田植と似て居る。大方は田植の終りになつて、家の者ばかりで行

ふ田植で此日は苗代のあて口に三把の苗を、萱の折箸を添へて立て、是に朴の葉飯とうこぎの浸し物などを供へる。飯の米には正月搗初めについたものを用ゐる。是をソウトクサンの祭だともいひ、家の者はアト参りをしてから田に入るといふ(阿哲)。

ナハシロクツシ 苗代崩し、又親田植ともいふ。親田即ち苗代のこと、此田へ植付をするのが最後の田植である。元は部落中が日をきめて苗代を崩すことになつて居たので、手がおくれると濟んだ人々が来て手助けをしてくれた。其代りには手傳の人に禮をせねばならぬので、人々競うて早くすませる様にした(上伊那)。

ミトダ 豊岐では特定の田の特定の場所に祭る田の神がある。之をミトサマと謂ひ、其田を神田又はミトダと謂ふ。ミト田は神聖視せられて役のある女は入らず、處によつては下肥も使はせぬ。其祭場は田のまん中又は畦に、一定の空地があつて老松などが立つて居る。田植の日はそこにきれいに泥を塗り立て、笹で箒を結うて立てる。舊六月二十九日の夏越の日もこゝで祭をした。

オナリマチ 筑前宗像郡では太鼓田の際に、オナリが祭りをする田をオナリ町と謂つて居た。冷飯を握飯にしてユリに入れて頭に戴き、オナリが此田まで持つて来る。歸りには相應の歌をうたつたとある(野阪村太鼓田記録)。

ハナタウエ 大田植即ち囃し田のことを、花田植といふ處がある。昔から何かの祝儀として之を舉行するので、この爲に定まつた組と規約とがある。飾り牛を牽出して代掻きの式を行ふといふ(民俗藝術一ノ一)。

ハナタグラ 花田植に用ゐる美麗なる飾鞍を花田鞍(尾道牛市用語)。田鞍は耕耘用の普通の鞍である。

イサミダ 笛太鼓にて囃しをする大田植、又はその歌曲をいふ。六調子八調子などの名目がある(安佐、俚語集四六七頁)。

タイコダ 太鼓田といふ名は土佐にもある。又囃し田といひ、神田を植ゑる場合の作法といふ。植ゑ方も普通とはかはつて居る。十四五歳の少年數人、笹竹を持ち太鼓を打ち又はササラを摺り、之に合せて田植歌をうたふ(風、二九號)。この田の刈跡は植時まで耕さない。福岡縣の太鼓田も亦一名を囃し田といふ。殊に大きな田を是に宛てたといふから、定まつた神田ではなかつたのである。泥打祝が之に伴なうて行はれた。泥のついた苗を以て紋付の下三寸を打つのが作法であつた。若い者はどこ迄も追うて行くので、晝飯後の田には婆ばかり残つたといふ(宗像)。こゝでは牛掻きの式は無かつたやうである。

ハヤシタ 囃子田といふ名は安藝にも行はれて居る(民俗藝術二ノ九)。こゝのは田歌が最も盛んで又面白い。サンバイといふのはサンバイ竹を手にもつ指揮者のことで、是が親歌をうたひ早乙女が子歌をうたふ。オロシといふのは双方で上下を分けて歌つた。備中の囃子田は又供養田とも謂ひ、牛供養の爲に行ふもので、盛装した牛が多く出た(岡山文化資料一ノ六)。

タバヤシ 田植唄の囃しを以てうたふ歌(石見那賀)。しばく酒宴の席でももてはやされたが、本來は牛を飾り又早乙女にも美装させて、音曲を奏して田を植ゑる式であつた。

ウシクヤウ 花田植は屢々牛の供養の名を以て行はれ、式の中心を田掻きに置き、同時に又畜牛の品評會の觀があつた。代を掻く様式には鶴の巢籠り、七つ入れ子、袈裟結びなどの種類があり、此技術を競べるのも亦一つの見物であつた(日本及日本人 郷土光華號)。出雲備後の境の地が殊に盛んであつた。

タカキ 熊野の東牟婁郡で行はれる牛の田掻きは、初夏の各村の行事で、大田植とは引離して行はれて居る。是も飾り牛を水田に入れて、犂を使ふ技能を競べるのだが、目的はよほど競馬などゝ近い(民族二ノ四)。村によつては是を牛かけとも謂ひ、以前はたゞ裸牛を駆けさせて、其遅速によつて年を占つた式の、次第に農作と提携するやうになつた経路かと思はれる(郷、一ノ五)。大

阪附近でも、以前は牛かけ又は牛の籤入りと稱して、五月節供の日に川の堤へ牛を牽いて来て遊ばせる風があつた(攝陽見聞筆拍子)。中國の牛供養は乃ち是と田植の式との融合したものと見て誤りは無からう。

マハリウエ 諸國の神田や由緒ある田には、代播きの方式が一定して居たと同様に、又苗の植ゑ方にもかへられない慣行が傳はつて居る。是にはそれ〴〵の意味があつたやうだが、今はまだ少しも採集せられて居ない。廻り植は畔なりに植ゑてまはつて、中央で植ゑ終るもの、其他に畔付植・横田植・中割等の名目があつた。中割は田を豎に中から眞直ぐに植ゑて行く方式で、何れも上手で無いと出来なかつた(寒風山麓農民手記)。

クルマダ 飛騨の大八賀村の松ノ木といふ部落に行はれて居る田の植ゑ方。先づ一把の苗を田の中央に置き、それからまん丸に植ゑて廻るのを故實として居た(飛騨山川)。

ヲカノシユ 噺子田のやうに樂器音曲を以て田を植ゑる風は、中國地方の四五の縣を除いてはもう殆ど残つて居らぬと言つてもよい。神社の御田植も多くは早い季節に、たゞ形ばかりを演ずることになつて居る。しかし斯ういふ風習が少なくとも一部には存して居たことは、その正月の田遊びの中からも窺ひ知ることが出来る。ヲカノシユは陸の人たちのことで水田に足を入れぬ

者、即ち音頭を取り笛を吹き太鼓を打つ人のことで、仙臺地方の近世の田植踊には伴なうてやつて來た(新撰陸奥風土記二)。田植唄の非常に數多く、且つ奔放なる變化を呈するに至つた原因も、やはり花田植の特殊なる發達に導かれたもので、しかもこの「陸の衆」は最初から、田人の構成の中には入つて居たものでなからうと思ふ。田噺子は島根縣などでは既に獨立して酒宴の歌ともなつて居るのに、一方には紀州などでは、田植がすんでから田植歌をうたふと、倉の米が泣くといふ言ひ傳へもあつた(南紀土俗資料)。歌の動機目的が少しづつ變つて來て居ることを想像せしめる。

コナヘビキ 小苗引。能登半島では是が田植の日に雇はれて來て、音頭を取る者の名ともなつて居る。以前は大農の家にはオカドといふ出入の者が多く、又濁酒造りも自由であつた爲に、田植の日の夕の慰勞宴には、この小苗引が盛んに活躍した。現在はたゞ朴の葉飯ばかりが、元の如く分配せられるだけだといふ(珠洲郡誌)。

サゲ 田植唄の音頭出しのことで、一名を前立ともいふ(安佐)。花やかな衣裳をして出て來る。早乙女の前に立つて太鼓を叩き、拍子を揃へて歌をうたひ、早乙女も又シタウタ(返歌)をうたひつゝ田を植ゑた。近年農事改良法と共にサゲを廢し、従つて田植に歌うたふことは漸次に衰へ、

たゞ折々の宴席に此歌を以て酒興を助くることゝなつた(俚語集三二六頁)。サゲは太鼓を下げて居るから下げだとの説もあるが(東石見田唄集序)、疑はしい。サゲをサンバイともいふ例は安藝にある。サンバイ竹を手に持つて指揮をすると謂つて居る。

一六 代みて行事

オサナブリ 田植終りの神祭りと祝宴とを、東部日本では弘くサナブリと謂ひ、信州だけは是にオを添へて呼ぶ。サナブリは早苗振なりなど、書物には早く説いて居るが、さう謂つて見たところでは解らぬことは同じだ。是にはやはり全国の實例を比べ合せて見るの他は無いのである。注意すべき一つの點は、同じく田植祝と謂つても其機會は區々なことで、たとへば東北の或地ではサナブリの休みが一週間(津輕)、又は二三日も續く例があり(九月)、或地方では家々の植終りからいふと、若干日の後に行はれる。さうかと思ふと一方には、その即日ですませてしまふ例もある。言葉の内容が既に地方的に變りかけて居るのである。遠江小笠郡のサナブリは毎年一定の日で、子供の管掌する神送りと兼ね行はれる(遠江童詞集)。飛驒のサナブリは午前中に最後の田植をすませ、其午後に小宴を催し、終つて早乙女立人は又次の田植に行くといふから(ひだ人四

ノ七)、家毎にちがつた日を用ゐて居るのである。つまりサナブリの名は同じでも、家で行ふものと村が主体になるのとは別で、その互ひの蔽はぬ部分に、更に色々の名前が出来て居るのである。このサナブリの意味が不明になつて、或は稻刈入後の休みをもさう呼ぶ處がある(鹿角、津輕)。壹岐島でも此日を特に田植サナブリと謂ひ、對馬島などは畠の農事の終つた後がサナブリである。

サノボリ 田植初めのサオリに對する語で、田の神の歸り上りたまふ日といふ意かと思ふが、奥羽關東では一般に是をサナブリと發音し、北陸は更に一轉してサナゴ(若越方言集)、又はサナガボンとさへ謂つて居る(河北)。九州は一部分でサナボリ(東松浦、大分、出水)、もしくはサナボイともいふが、なほ明かにサノボリといふ處が多い。意味が不明になつて田植以外に、麥作りのサナボリ、から芋のサナボリもあることは(獅子島)、壹岐などもよく似て居る。越後その他にもサナボリといふ地方があり、四國は西南の幡多郡などはサナボリだが、他の大部分と淡路、中國でもシロミテの語を用ゐて居ない地域は皆サノボリといふ。其方式には異同があるが、土佐幡多郡などのサナボリ様は、部落全體の田植の済むを待つて日を定め、近い田の一つを選んでそこに餅を供へて田の神の祭をする。是をもオサバイオロシと謂ふのは多分名の誤りかと思ふ。

タノボリ 肥前五島の三井樂などでは、田植終りの祝を田登りといひ、部落全體の田が植ゑら

れて後に之を行ふ(五島民俗圖誌)。是もクビラキと同じく、サの意味が判らなくなつてからの訛りであらう。若狭の遠敷郡では、五月田植の前後の祝を、オヒラキ及びオノポリと元は謂つて居た。共に田のほとりの祭り、方式は他の地のサビラキ・サノポリと似て居た。

ナカサナブリ 田植終りの祝は家々と部落とで、何段にも行はれる例が多い。東葛飾地方でワセアゲと中サナブリ、及び本サナブリとの三度の饗宴があつて、三度ともサクダイ(作大將)を上座にする(民族二ノ五)。東蒲原郡のサナポリは田植後二日目が普通で、その前の日を小休みと謂つて居る。大隅肝屬郡のサノポリも、部落全部の田植が終つた時の祝で、こゝではそれを又ノロオトシと呼んで居る。

ウエサノポリ 播磨多可郡では、村中の田植がすむと、日を定めて神を祭り且つ業を休んで飲食する。植サノポリは多分本サノポリに對する語であらう。此地方の本サノポリはすつと遅く、舊六月に入つて行はれ、虫祈禱など、一緒になつて居る。

コシロミテ 田植しまひの祝を中國地方では、シロミテといふ處が多い。代は植田のことで、ミテルは完了を意味する。之を二つに分けて部落全体の完了を大代みて、自家の田植の終つた日の祝を小代みてといふ例もある(西伯)。

シロミテ 代みてといふ語の行はるゝ區域は、主として日本海側の越前以南、山陰は出雲に及び、岡山縣全部と、飛んで山口縣にも處々この例がある。何れも村全体の田植休みのもので、この語のある土地ではサノポリといふ名は用ゐぬらしいが、しかも田人を招いて饗應し、苗を神棚に上げて祭るといふ類の、式には共通した點が多い。伯耆の一部にはシロミテの日、男女が水を掛け合ふ風習がもと盛んであつて、他地方の田植の苗打祝と近いものがあつた。シロミテは二日あつて、前日は女が男に水をかける日だなど、いふのは當てにならぬとしても、家のと村のと二度あつたことだけは確かである。但馬の長井村では六月二十八日から、七月一日までの三日間半日づゝ休み、之を戯れて白めて赤めて黒めてなど、稱へる(近、一ノ六)。つまりは代みては一日では濟まなかつたのである。

ヨテダウエ 家の田植の終つた晩をいふ(平鹿)。或はヨテナベとも又單にヨテとも謂ふが(仙北)そのヨテは最終の意味で、爰では一般のサナブリに先だつて、先づ家々の祝宴を催し、田人の全部を招き揃ふのである。此夜の食物には必ず小豆汁がある。稻の赤らむやうにといふ祝意であつた(横手郷土史)。

ユアゲ 田植の終つた晩をユアゲといふ處がある(榛原)。サクラ飯五月飯などが此日の定例の

食事だつたといふのは、やはり稲の色づくことを念じたのかも知れぬ。

ネギユ 上伊那では田植の終つた日の晩、農具を洗つて供物をする外に、苗を根のまゝ洗つて風呂の湯に入れ、入浴する習はしがあり、之をネギ湯といふ。神酒すすの口にも苗を飾り、又苗を浸した酒を飲む(民俗學四ノ三)。

テナヘアゲ 苗祭はサビラキ即ち田植始めの日、又は大田を植ゑた日の夕に行ふ例もあるが(紀伊那賀)、更に田植終りの日にも同じ祭をする土地が多い。常陸新治郡では此日をテナアゲ即ち手苗上げと謂つて、苗を三十六本、よく洗つて家に持還りお釜様に供へ、又牡丹餅をこしらへて上げる(民俗學三ノ三)。テナアゲといふ名は又伊豆の新島にもある。

タノカミナへ 香取郡では田の植終りの日、一旦代田に分配した苗を、一把取つて来て荒神様に上げる。此苗はきれいに洗はないと醜い兒が生れると言ひ傳へて、女たちは念入りに洗ふ(郷、四ノ一一)。君津郡でも同じ日に苗を洗つて、男と女と取交ぜをして、小さく束ねて竈の神に上げる。荒神といふのも此地方では竈の神のことである。此神に上げる苗を田神苗といふのは訝かしいが、是は臨時に火の神の祭壇に於て、苗を田の神の依坐として祭る心持かと想像する。羽前山寺村などで田の神祭といふのは、是も植付のすんだ日に、田の一部分に一把の苗を七株に栽ゑ、後直

ちに之を取集め、よく洗つて二把となし、箕の上になこ握飯・あさつき・若海布と共に載せて田の神に供へる。きなこは稲の花、あさつきは稲の實、若海布は稲の葉に擬らへたものといふ(民族三ノ二)。田の神として祭らるゝものは、此苗の他には無いのであるが、同じ箕の上に供物と共に置かれるので、是をも供物のやうに考へたのである。田の神を竈の上で祭る例は東美濃にもある(郷、四ノ一一)。肥前東松浦の山村のサナボリにも、苗三株を荒神様に上げる。後は貯へて置いて、雷鳴の火に焚くと雷除けになる。下伊那郡のオサナブリにも、恵比壽棚へ苗一把を洗つて上げる。是は七月七日の物洗の束子とする。

ナヘボコ 諏訪湖畔の村々では、此邊でいふ大田即ち植終りの日の晩に、苗の長いのを残して置いてきれいに洗ひ、之を以て稲の實の形に握つたむすびを包む。それをお苗ぼこと謂ふ。それからこの苗ぼこ三くりを一升枡に入れて恵比須様に上げる。其時枡をゆすりながら唱へる詞、

ひる田、ひる田

けふの田植はひる田植

一東三把に五斗七升

畔を枕に寝るやうに

代みて行事

苗ぼこは翌朝下して焼いて家内中で食べる。食べると夏負けをせぬといひ、又蠅をまちがへて食つても中らぬともいふ(旅、食物誌)。

タガヤ 筑前志賀島で田植の終るとき、萱を一結び結んで輪となし、それに色のつかぬ梅干と若海布の根とを懸け、飯を供へて田を祭る。之を田萱といふ。田植に牛を使つた人が、後に其供物を食べる。

アラナへ 下五島の岐宿村では、田植の後で早乙女が苗をよく洗つて十二本づつ、田主の處へ持参する。之をアラナへと謂ふのは洗ひ苗であらう。田主は之を受けてめい／＼に酒手を與へる。それを拒むと女全体で胴揚げにした。通行人にもこの洗ひ苗を出して、酒代をねだることがあつたといふ(五島民俗圖誌)。

クロヨセ 家々の田植終ひをサノボリと謂はぬ土地では、是に代る色々名稱がある。畔寄せといふ語も其一つで、香取郡の一部では是が田の神苗を荒神様に上げる日である。但しちがつた用ゐ方をして居る處もある。たとへば印旛郡では、田植終つて最初の休日を手休め、それから又一日置いて畔寄せの休みがある。或は豫め田植にかゝる前に、村一統の畔寄せの日をきめる例も香取にはある。之を定める前に村内に亡者が出來ると、其年は畔寄せが無いことになる故に、大病

人でもあると急いで其日を決して置くといふ(郷、五ノ一)。即ち共同の神祭をする日だつたらしいから、この畔寄せなどはよほど本サノボリの方に近い。

シグレイハヒ 田植終りの日の祝を、シクレ、シグレ祝又はクロヨセといふ地方がある(稻置、北相馬)。餛飩や饅頭をこしらへて一日休む。シグレの意味は不明である。

ゴンゲノボウ 三河の東部から遠江にかけて、田植のすんだ夜をゴンゲノボウと謂ひ、又植上げとも謂つて居た(吉田領風俗答書)。牡丹餅をこしらへて田植に携はつた人をもてなす。又惠比須様を祭り、其年の苗の最も姿のよいものを二把、根をよく洗ひ揃へて其の前に供へる。苗の根がこんがらかつて居ると家内不和の虞があるといふ。苗は翌日取卸して天井に吊して置き、盆前佛壇の金具などを磨く料とする(民族一ノ四)。或は田植のすんだことをボウになつたともいふが(田嶺炬燵話)、語の起りはまだ明かでない。

ムシリ 肥前下五島では田を植終つた夜、トマメ(蠶豆)とあられとを炒つて荒神様に供へ、夕食後には主人先づ食べ、ユヒの人々が取合つて食べる。是をムシリと謂ふ。此晩は主人か又は作男の一人かは湯に入つてはならぬことになつて居る。

ウエツケゴモリ 東彼杵郡の萱瀬では、サノボリの前に植付籠りといふ日があつた。田の神の

祭にも曾ては物忌を必要として居たので、是は其名残を語るもので無いかと思ふ。

シバイアゲ 田植しまひのことを香川縣ではさう謂ふ。

スネホシ 田植後の祝日は休養と慰勞とが主になつて、追々に新らしい名が出来た。さうして其意味が又土地土地で稍違つて居る。騰乾しは水田に入らぬ日のことだが、部落全部の田が植終つた日の翌日、一日休むのをさう謂つて居る處がある(安藝山縣)。

ノアラヒ 田植が済むと働いた人たちの着物をすつかり洗ふ。是を野洗ひと謂ふ(南安曇)。野洗ひは田植後三日の中にせぬと病氣になるといふ(北安曇)。是も植付籠りの一つの形かと思はれる。

ノロオトシ 部落全部の田植がすんだ時に行ふ休み。サノポリと同じといふ(肝屬)。

ドロヨコヒ 田植後の休日、三日ほど續く(樂上)。或はノロヨカヒ(東國東)。ヨコヒ・ヨカヒは憩ひの訛、ノロも泥である。

ドロオトシ 中國地方には弘く行はるゝ語。田植過ぎての休み日である。或は婦人ばかりで氏の社殿に會食し、又は家族全体の慰勞の宴をする。大抵は部落共同の休みであるが、土地によつては家の田植のすんだ日をさう謂ふものもある(邑智)。内容は一致して居ない。

ソフオトシ 田植終りの休養(飯井)。又ソポトシといふ村もあるが、ソフは田漕のことだから泥

落しも同じい。舊六月一日をソフ落しといふ處もある(丹羽)。

シフオトシ 香取郡でいふ漕落しは、田植後の總休み、日は區長がきめる。正月祭禮に次いで百姓の楽しむ日だといふ。常陸南部では、田植後の祝宴を漕抜きと謂つて居る。

タガリオトシ 天草島で田植後の休みをいふ。タガリは水田の沈澱物だといふから、ソフオトシも同じであらう。

フナヤマ 田植休みのこと。タガリオトシのことで、現在はたゞ休養の意味に使はれるが、以前は必ず海に遊びに行くものときまつて居た(天草島民俗誌)。

ガニオトシ 豊岐では田植がすんで始めてイソに行く日をガニ落しといふ。このガニも蟹では無く、タガリ落しのタガリと同じ語であらう。魚釣りなどにもよく行く。

アシアラヒ 長崎縣野母半島の蚊焼村などでは、五月田植後の磯遊び舟遊びを、足洗ひと謂つて、以前は恒例になつて居た(民俗研究五)。小豆島では麥刈終りの祝宴を足洗ひと謂つて居る。

ニゴリマツリ 肥前江ノ島では、田を植ゑ麥を取り芋をさしてしまふと、濁り祭といふ祭を行つた。一名を足洗ひ、頭屋があつて其支度の爲に數日間魚を捕る。上五島の有川にも同じ名の祝祭があり、佛の供養をするといふ。

クハバラヒ 日向の椎葉では、初夏の農事の一段落付いた時を鉞ばらひ又はサノポリと謂ふ。豊後でもサノポリをクワライ又はクヘアラヒといふ處がある。

マンガラヒ 上州の新田郡では田植終了の祝(民俗學二ノ七)。小縣郡の馬鉞洗ひは代掻きのすんだ日の祝である。

テヤスメシヤウクワツ 東葛飾郡の手休め正月は、部落全部の田植が終つて後の一般の休日である。此地方では別に其以前に家々の田植終りに手傳人を褒する祝があり、それを田植正月又はサナブリと謂つて居る。

ヤシミヨウ 越前今立郡、阜月仕事の全部を完了した祝の休み、加賀の方では之をヤスンギヨウと謂ひ、休み業などの字を書いて居る(能美)。

ケツケヤシミ 紀伊那賀郡で田植後の休みをいふ。是に二通りあつて小休といふは家限り一日、区内一般に休むのを大休みといふ。南河内では是をケカケヤシミ、攝津川邊郡ではネツケヤシミ又はサナブリと謂ふ。

シツケヤシミ 田植後の休みは正月と同じやうに、幾日か續く所に意義があつたものらしい。東北にはもとは七日も續く例があつた。伊豆田方郡などは現在は新曆七月一二の二日間に互り、

第一日を馬鉞洗ひ、二日目をしつけ休みと名づけて、供物を捧げ神を祀る例がある。舊の六月一日を大切な節日とする全国的の風習と、關係があることは疑ひが無い。

テツボヤシミ 東牟婁郡で田植終りの共同の休み。名の起りは不明。此日寺で祈禱があり、其御札を受けて來て田に立てる。

タヤシミ 小縣郡で田植祝の休みをいふ。下伊那では普通にノウタテ。新嫁掣の里に行く日になつて居る。今は大抵半夏生から三日下り。稲刈後にも同じことがあつて、是は秋立てと謂つて居る。

ノアガリ 又植付休みともいふ。一部落共同の休み。柏餅・小麦團子の類をこしらへ手傳の人に餉り又は招く。日雇賃の勘定も此の日にする(印南)。此休みの日は土地によつては遅く、新七月の上旬にする例もある(員辨)。とにかく田植直後ではないらしい。

ノウドン 田植休みの日の食物には、米はもう乏しいので、新たに收穫した小麦を用ゐることが多い。ノウドンも其一つで、ノアガリの日にきまつて作る饅頭である(碧海)。ノアガリ・ノウタテのノ又はノウは、野でも農でも當らぬ様に感じられる。別に其語の起りがありさうである。

サノポリモチ 淡路の仁井村などのサノポリは、以前から舊六月十五日ときまつて居た。この

日サノポリ餅といふ餠をまぶした餅をこしらへる。秋田津輕の方でも舊例としてサナブリ餅を作り、是を串にさして魚の鱈と共に、窓や戸口に挿す風習があつた(外濱奇勝)。是などは又サナブリ團子とも謂つて、米の餅では無かつたやうである。

カヘルノオヒアヒ 播州東部では六月四日を本ノサポリと謂ふ村がある。此日は粽を作り、又小麥粉のゆで團子をこしらへて、神を祭り人々も食べる(加東)。是を蛙の負ひ合ひといふのは、やはり水田のほとりに供へる風があつたからかと思ふ。

ゴンガツメシ 五月飯は田植の日に、田人に餉る食物のことであるが、是を田植終つて後の祝祭の式の名に宛て、居る土地がある。秋田縣男鹿半島の五月飯は婦女ばかりの催しで、現在は新曆六月二十五日から五日間、寺の本堂を借りて豊かなる酒食の會をする。其際に春の田遊びと同じやうな田植の演技があり、又放縱なる歌舞があつた。頭番をトメと謂ひ、終りに又トメ譲りの式を行ふ(民俗學四ノ八)。此會合は又サツキメシとも謂つて、百五十年前にも既に盛んであつた。酒宴に先だちて墓を祭り、祖靈の位牌に供養することが、寺を會場とする一つの理由だつたらしい(小鹿の鈴風)。

テンノリ 田植休みをテンノリ又はテノリといふ風は、津輕にも南部領北部にもある。餅を搗

くのが例で、其餅を爐の鈎に供へ、後に下げてから打ちかいて腰の痛い所に塗る風習もある。是も一部落共同の休みである。天晴りの意かといふが確かでない。五月節供の前後の、御田の神の水口祭をもテンノリといふ村がある(館村誌)。

ゴコク 部落共同に行ふ田植後の休み(東牟婁)。五穀祭といふ名が修驗道などにあつて、是はその語の下略であらう。

タウエウチアゲ 大分郡ではサナポリ・ノロヨコヒを、又田植打揚げと謂つて居る。打揚げ通例酒宴の意味に使はれる語である。

タウエビマチ 上總ではサナブリは家々の田植終りの祝をいふらしく、部落全体の休みは別に田植日待といふ。日数は二日又は三日、區長が日を定め、もとは聲の高い者をして村を觸れあるかせた。

をとこそんなのお日待でござるよう

けふから三日田植日待でござるよう

但し午前中は働き、午後七時まで休むのみだつたといふが(君津)、日待といふ名があるからには共同の神祭が曾てはあつたのである。

シロミテツヤ 長門阿武郡の例、代みての祝の日の會食。食物は持寄りで會場だけに頭屋があつた。ツヤは通夜であつて夜伽も同じく、今は主として凶事にのみ用ゐられるが、本來は日待と同じく神を祭るために起き明すことで、乃ちこゝでも植籠りの式が行はれて居たのである。

キマツリ 亥祭又は田祭ともいふ。植付の終つてから最初の亥の日に、田の水口に薄三本を立て、上を結び、其下に藪又は桑の葉を敷いて、團子といりぼしなどを供へて祭をする(養父)。

タマツリグサ 亥の日を田神祭の日とする例は他にもある(多可)。祭の式はオサバイ降しの日とほゞ同じく、栗の枝と萩・薄・あぶぎ葉・こまつなぎの五種の植物を一つに束ね、是を田祭草と謂つて田一區毎に一つづつ立て、其上に小麦粉でこしらへた焼餅に味噌を塗つたものを載せ供へて田の神を祭る。日は六月末の亥の早朝といふから、多分田植を終つて後の祭であらう。

一七 草取り・水まはり

アヒマウエ 苗の補植(三方)。越前の方でウセシルといふウセも空隙のことであらう。

又ケタウエル 田植後補植又は苗を根付かせる作業をいふ(東奥日用辭典)。

ウキナヘナホシ 浮苗なほし。田植の後数日のうちに、田を見まはり浮いて居る苗をなほす。

シヤナゲ即ち残して置いた苗の半分は是に使はれる(ひだ人四ノ七)。

エツケガキ 常陸の東南部で田の除草をさう謂ふ。植付掻きだらうといふ(風、三六九)。

アラクサ 田の草取りの第一回、是がすむと草取休みがある。それから二番草三番草を取る。

特別に草の多いときはもう一度取る。それを取上げと謂ひ、終つて取上げ休みがある(近、一ノ三)。或は三本鉞でかちるのがアラクサで、之に次いでカキナラシ又はヒキナラシと稱して手で掻きまはして草を取るといふ(北葛城)。其次に跡に残つた大きな草を取るのがアヒクサである。

カツバナシ 田の一番草(幸手方言誌)。

又リグサ 田の最後の草取(備後府中方言集)。

又リタ 草取りの最後に、水を切り出してから手で均らすこと(北葛城)。此地方では草取りを總稱してシユウリスルと謂ふ。

ホウジ 稲田の稗を抜取ること(久慈)。南安曇で小稗取りといふのは苗代田の草を取ることの意味する。手のかゝる仕事であるといふ。

タコスリ くれこわしの小さなので、稲の上根を摺り切る仕事(邑樂)。

ケラガキ 畦に近い稲の一株は、雨や水で株の土が高くなり、蟻蛄が其土に横穴を掘つて、田

に入り稻を食ひに来る。それを防ぐ爲に土を取除き、いつも其株が水の中に在る様にする。その作業を蟻姑掻きといふ(ひだ人四ノ八)。

ミツマハリ 水田によく水が當つて居るかどうかを見てあるくこと。又水見ともいふ土地が多い。以前は是が田主の大切な一役であつた。それで昔話の蛇掣入や猿掣入、三人ある娘の一人を嫁に遣らうといふ物語の、葛藤は始まるのであつた。

ドヨウノマタミツ 土用の又水といふ諺がある(攝津三島)。土用に入つてからもう一度、灌漑の更に必要な時があることを意味する。

ホミツ 稻の穂の出るのを助ける爲に、一時又水を入れることを穂水(仲多度)。是がすめば池じまひであつて、水入れの仕事は完了する(飾磨)。

ヤクミツ 稻の大花元花の頃に、水が無いと穂こしらへが出来ぬ。それで此時に與へる水を役水といふ(三豊)。

又レホ 稻の開花時に雨がそば／＼降るのを濡穂といふ。濡れると却つて實入りがよいといふ(岡山方言)。

ヨケ 稻が相當に熟すると落水をするが、其時水はけのよい様に、田のまはりの稻を引上げ

て水の通路をつけることをヨケといふ(小縣)。阿波でも其爲に溝を掘ることをヨケと謂ふ。ヨケを田の畔の意味に用ゐて居る土地もある。

ミタレホリ 河内では稻を刈る前、水はけをよくする爲に溝を掘ることをいふ。ミタレは多分水垂れであらう。埼玉縣東部でも水抜きの爲に、田の周りに細い溝を設け、之をネキボリと謂つて居る。

一八 虫追ひ・稻祈禱

イネノムシ 中國地方で稻の蟲といふのは、古くから傳はつて居る害虫駆除の行事のことで、名稱は唱へことの文句から出て居る。其方式は著しく雨乞と似て居て、夜分炬火を連ねて田の中の路を村境へ行くものと、日中に鉦鼓を鳴らして行くのがある。何れも蟲を送るといふのは、是を里に入つて駐つて居る目に見えぬ靈物の所爲と信じた結果である。

ムシガミオクリ 虫追ひの行事には、全國ほど一致した幾つかの様式がある。藁で人形を作つてそれを行列の中心とすることが一つ、其人形の藁を苞にして、是へ食物を充たして送る例も折々ある。それから害虫を籠に入れ又は葉に包んで、其人形に持たせる場合も多い。つまり害虫を統

率する力のある者に依頼して、連れて歸つてもらはうといふ趣意である。蟲送りの期日は却つて一定しない。越後では蟲追ひを蟲神送りといふ處もある。北蒲原の蟲追ひは舊七月七日の七夕送りにする村が多く、東蒲原の蟲神送りはサナボリの翌日、即ち田植後三日目にも行はれて居る。

サネモリマツリ 肥前五島島の蟲送りは實盛祭と稱して、方式が頗る盆の精霊舟に似て居る。

約三尺の長さの麥稈舟二隻を作つて、是に帆を張り、棒の實でこしらへた人形を乗せ、十二三歳の少年たち之を昇き鉦を叩いて

後生よ 後生よ

さねもりどんの 後生よ

と唱へながら、村を廻つて終りには海に流すのである。豊岐では舟は無いがやはり鉦を叩いて人形を送る除蟲式を、實盛祈禱と謂つて居る。大分縣では實盛追ひ又は實盛送り、四國にも中國にも同じ名の行事が、つい此頃まで行はれて居た。紀州の串本附近のは松明の行列であつて、其先頭に立つ者の唱へ言は

實盛どのは、よろづの蟲を

御伴につれて、お通りなされ

といふのであつた(民族二ノ四)。サネモリは現在或一種の害蟲の名と認められて居る。出雲方言考にはヨコビヒといふ蟲のことといひ、齋藤實盛稻に躓き倒れた爲に討たれ、其遺恨によつて死して稻を食ふ蟲となるといふとある。

サバエムシ 吉野郡では田の害蟲をサバエと謂ひ、「サバエ蟲高野の山へ送れ」など、唱へて、蟲送りをする村がある。昔實盛が高野の山を焼き坊主を殺したので、坊主の怨靈が化してサバエ蟲となつた。それを高野へ送り返すのだなど(郷、二ノ五)、實盛との因縁を語り傳へて居る。

周防長門でも苞蟲をサバイ又はサバアと謂ひ、やはり

サバア様の陣立ち

さねもりどんは御伴よ

など、唱へて、鉦太鼓で藁人形を海に送つて居る(大津)。サバエ・サバイは田の神のオサンバイとは關係が無く、六月晦日のサバラヒとは内容の繋がりがある。サバラヒは乃ちサに伴なふ清杖であらう。

ウンカンモリ 以前蟲送りの風習が広く分布して居たことは、蟲送場・蟲送山といふ類の地名が、到る處にあるのからも想像し得られる。村を接した土地では其境までしか送つて行かれぬ

が、次の村でも急いで其仕事を受継いで、結局は海へ流し又は山中無人の地まで追込むのであつた。しかしさういふレイの出来の場合に、是を一地に鎮め祭つたのは、やはり送らるゝものが神靈であつたからで、其名残は多くの蟲塚供養塚に留まつて居る。ウンカン森といふ森の神は山口縣などに多かつた。ウンカは即ち害虫で、それを此地に祭つて、其憤りを鎮めようとしたのである。後々の蟲送りも爰を目的地とし、常の日も畏敬して其安靜を攪亂せぬ様にして居た。雲霞山などいふ地名は東北にもあり、そこにはいつ行つて見ても此蟲が居るなど、信ぜられた。

オガノムシ ウンカは雲霞などの字さへ宛てられるが、一匹居てもさういふからとは蟲の名であつた。オガといふのが元の言葉であらうと思ふが、それも現在では土地によつて、色々の異なる虫を謂ふやうである。

ゲントクムシ 又善徳蟲。浮塵子と字にかいた害虫のことである(與謝)。此名稱の起りについては傳説がある。

ムシサシ 螟蟲。夏マジが吹くと蟲さしの害が甚しいといふ(岡山方言)。

シハク 稻の害虫にシハクといふのがある(北津輕)。等に油を塗つて田面を流し、或は長い繩を曳いて稻の葉から拂ひ落す驅除法が古くからあつた(外濱奇勝)。

イラ 稻いもち病のこと(日高)。いもちといふ言葉は髮毛などの汚れ油ついたものにいふのが元らしい(さと言葉)。北伊勢ではイモチ送りをする。其方法は松明の行列で、鉦太鼓を打つて村境に送ること全く蟲送りと同じであつた(員辨)。

カニガミ 天草島などの棚田では、蟹が田境の石垣の穴に棲んで、稻を噛み倒す害も大きく、之を防ぐ色々の方法が設けられて居る(郷、二ノ七)。

イナギタウ 稻祈禱。蟲送りと同じ日に、寺で集まつて念佛をすることをさう謂つて居る土地もある(喜多)。未だ濟度せられぬ亡魂が、風雨旱蟲の害をもたらすといふ信仰は、全國に行渡つて居たのである。早魃は日本でも亦惡靈の力であつた。故に其神を送却することが、雨を乞ふ手段ともなるわけである。疫神を送ることも趣意は一つで、従つて方法が皆よく似て居る。鉦鼓は恐らく兎神の好まざる音であつた。鐵砲が輸入せられてからは是も亦屢々利用せられる。但し他の地方の稻祈禱には、今少し積極的に、農作の繁榮を念じたものもあつて、此爲にも色々の呪法は行はれて居た。

ヤウキイハヒ 駿河安倍郡には陽氣祝といふ祭がもとはあつた。日は舊曆六月と七月の十七日。以前は業を休み穀作の豊饒を祈り、家々の祝事があつた。

カゼマツリ 風害豫防の祈願も鳥追や土鼠打と同様に、年の始の吉日に行ふのを有効とする例がある。豊後直入郡では、舊正月と七月との四日を風祭といひ、この一日畠に入らぬことにして居る。

カザヒマチ 多くの土地では風祭は八朔の前後を以て行はれる。現在は無事に厄日を過ぎたといふ慶びの爲の祭もあるが、之を風日待といふのは忌籠りである。即ち戒慎によつて事前の不安を散するが趣旨であつた。

アメカゼマツリ 東北では雨風祭に人形を作つて、村の境の地まで送つて行く風が今もある。方式は蟲送りや咳氣神送りとよく似て居て、人形は普通男女の二體を設けた。是を焼棄する火祭などもあつた。是も亦風雨を神のわざと見て居た例である。

テンキマツリ 雨乞のちやうど反對で、晴を祈る祭である。温度の低くなり易い山間の村では、雨乞よりも必要が急であつた。信州にもある。

タメグリ 阿波の麻植郡では、盆の十五日に夫婦つれ立つて、自家の耕作する田畠を廻る風習がある。之を田巡りと謂ひ、地神への御禮だと考へられて居る(旅、盆行事號)。

タホメ 八月朝日の朝、主人が田に出て作物を譽める風習は、全國に亘つて處々できく所だが

筑前の各郡では普通七月七日の朝、徳利を持つて歩き、「よか御田ねエ」など、謂つて田の畔で酒を飲む。斯うすると稗が稲に負けて成長せぬともいふ(博多年中行事)。

イナカガミ 北秋田地方に以前あつた慣習。かづらを長い串に挿んで田の畔に立てる。風の患ひ無からんことを御歳の神に祈る捧げ物とする(贅の概)。普通は舊七月の行事であつたが、出穂を見ると六月中にもしたといふ。土地によつては之を田鏡といひ、鏡といふことに意味があるらしいが、農民はカガミを稲の穂の垂れることに解して居た。

ウマコツナギ 藁や眞菰で造つた馬を、神祭りに使ふ例は多く、或は端午の日に又は七夕の日の行事ともなつて居る。陸中上閉伊郡の馬祭は又馬と繋ぎともいふ。日は六月十五日、一尺ほどの馬を藁で作つて農神様に上げる。其口にはシトギを食はせる。農神は此馬に乗つて出雲に行き、一年中の農事の相談をなされるといふ(民俗研究九)。或は紙に板木の繪を捺して、やはり口のところを塗る。出駒入駒二度の祭があるともいふ。

アヲギタウ 東牟婁郡では青祈禱、又は丑の日祭といふのが、以前は舊六月丑の日の行事であつた。現在は七月十五日に行はれ、従つて丑の日祭の名は廢れた。青稻成育の祈禱を神社で行ひ其御札を受けて來て青田の上を振りあるくといふ。

ウリキタウ 徳島縣では瓜祈禱といふのが、夏の農作の祈禱であつた。瓜を供物として神を祭るので、祭らるゝは多分水の神かと思ふ。

一九 案山子

ソメ 田に立てる鳥おどし、標準語でカガシと謂ふものを、信州でも附近の尾張三河美濃でも、共にソメと謂つて居る。カガシは悪臭を放つて鳥獸をいやがらせるもの、たとへば女の髪を挿んだ串などの名に限つて用ゐられるのは(下伊那)、寧ろ其語の語義に合して居る。人の姿に似せた案山子を、是と區別して他の名を以て呼ぶのはわかる。たゞ其ソメといふ語の由つて來る所を詳かにせぬのみである。

オドシ 案山子をオドシといふ地域は中國四國、又九州北陸にも及んで居る。或は又オドセ(喜多)、オドロカシといふ處もあるから(下新川)、語の意味は判る。薩摩の伊唐島では用の濟んだオドシは、家の暗い所に藏つて置いて翌年も使ふ。使はぬものは大掃除の時に焼くといふ。(カガシアゲ・ソメノトシトりの條参照)

トボシ 九州地方の西北部だけは、案山子をトウボシ又はトボシと謂ひ、鴉トボシなどの名も

ある(佐賀、平戸)。土地によつてはトボ(東彼杵)。壹岐でトボシといふのはトシヤク(稻積)や積肥の上に、雨覆ひとして載せる藁の屋根形のものゝことである。是をトベともトボとも謂つて、區別しようとして居る地方もあるが、本來は一つの語であるらしい。

カジメ 日向の山村では案山子、及び猪害を防ぐ縄張り等をも合せてカジメと謂ふ。特に鳥おどしをトリカジメともいふから、カジムはおどすを意味する動詞のやうにも想像せられるが、やはり又シメといふ語と關係があり、多分はカガシと同じカで香注連であらうと思ふ。

ヤイジメ 案山子をシメと謂ふのは阿波の祖谷山、大隅の種子島などに例がある。シメを畠の畝を立てる目標の木の名として用ゐて居る處も九州にはあるから(玉名)、起りは占有の標識であり、それが鳥獸にも通ずる如く、昔の人は考へて居たのであらう。信州三河などのソメも、或はこのシメからの分化かも知れぬ。日向の椎葉あたりでは、猪の害を防ぐ爲に、人の毛髪を少し焼き焦がして、串に挟んで立てるのをヤエジメと謂ふ(後狩詞記)。飛騨では野猪の皮を用ひ、之をヤキタテと謂ひ(飛州志)、或は鹿の脂を煤と和して塗り付けるのをヤイズミといふ地もあるといふから(和調葉)、焼注連であることは疑ひが無い。奥州東磐井郡などにも、馬の毛を焼き黒めて串にさして畦に立てる風があつた(配志和の若葉)。但し是は只鹿おどしといふだけで、ヤキカガシとい

ふ名は却つて節分の夜の行事だけに遺つて居る。

サルオヒトリオヒ 遠江磐田郡などの山村では、山田の上に板をつり下げて、夜中之を敲いて鳥獸を追ふので、其板を猿追鳥追と謂つて居る。其爲に小屋をかけ、戸口に丸太を横たへて終夜野獸を追つて居たといふ土地もある。盲人を此役に使つたといふのは(山郷風物誌)、安壽對王の昔語りにも似てあはれである。

ポツトリ 山水の流れを利用して穀類を精げる臼を搗くものを、ポツトリ又バツタリと謂つて居るが、本來はたゞ自動式の害獸驅逐法であつたらしい。九州では是に近いものにウサギツツミがあり、是も今ではソウヅヤサコンタロウと同じに、水揚げ米搗きの用に供せられることになつたが、名の起りは夜分不意に音を立てることに在つたやうである。伊勢の飯南郡などで、バツタ又はバタコといふのは所謂添水(シヨウヅ)に鳴子を取附けたもので、是も亦一種の改良装置であつた。

クロビ 呼火。東北では山間の田を鹿の害から防ぐ爲に、藁や柴を田の畔に焚き棄て、來る風がもとほあつた。

モグライシ 土鼠石。山間の田畠に置いて、むぐらもちの近よつて來るのをおどす石(北設樂)。

土地によつては此石に石灰の水などを白くかけて、夜來る獸を脅かさうとしたものもある。昔話の幸運獵師譚に、五羽の雉を打つた銃丸がもぐら石に中つてはね返り、又別の山に居る三羽の雉を撃つたなどいふのは、此石のことである。

二〇 掛穂行事

カリカケ 稻の刈入れよりはまだずつと早い頃に、刈掛といふことをして神を祭る風習がある。小縣郡では秋の社日の日、餅を搗いて田の神を祭り、稻を田から一株だけ抜いて來て田の神様の前に掛ける。家には其爲に刈掛の柱といふのがあつて、それへ一年中下げて置く。魚の骨が咽に立つた時は、其糞を三粒嚙むと治ると謂つて居る。北安曇の刈掛は二百十日の風祭の日、もしくは舊七月二十七日の尾花祭の日に、稻穂を取つて來て氏神・田の神・道陸神などに三筋づゝ供へる。或は別にさういふ日を定めずに、たゞ稻刈の初日にこの懸穂の式を行ふ地方もある。上州吾妻郡などでは十二月になつて、田植に手傳つてくれた人に米の飯を配る慣行があり(旅傳、九ノ二)、是をも刈掛と謂つて居るが其理由はわからぬ。

ホカケ 稲の初穂を掛ける行事であるが、土地によつては刈入れの日より前に、主人の年日などを選んで式だけをする者がある。備中上刑部村の例は苗代田のまん中に、割竹を月の数だけ立て、それに何本かつゝの稲穂を掛ける他に、又氏神や小祠や墓の前、家の自在釣などにも掛ける家がある。ロツクサン(土公神)の穂掛だけは穂のまゝで棚の上に保存し、牛馬の後産の下りぬとさなどに食はせる。紀州の上山路村では、稲の刈初めをする田の口に、細い竹を門形に括つて立て、それに二三本の初穂を掛ける。長門の蓋井島では、家の内外の神々に全部、根を上にしてネコモといふ海草と共に掛け、伯耆の中津でも氏神の戸などに掛けるのが穂掛である。其以外にも新穀取入れの最初の祝を、ホガケといふ土地は多い。

ホガケル 上下伊那では稲に限らず、初めて作物を取るのが皆ホガケで、今日は南瓜をホガケルゾなどといふ。胡瓜をホガケタのは川へ流して水神様に上げる。それからでない人は食べなす。

イヌノホカケ 麥作にも穂掛の祝がある。新穀を粉に挽いて嫁の在所へ送ることをホガケといふ處もあれば(上伊那)、これで餛飩や焼餅をこしらへて手傳の人を呼ぶのをさういふ土地もあるが(南北多摩)、古くは初穂を畠や家の軒に掛けたものらしい。阿波の祖谷山などは今も其風があ

つて、是を犬の穂掛と謂つて居る。長門の向津具でも、昔弘法大師が唐から麥粒三粒を盗んで、杖の下に匿して持つて還る際に、向ふの犬がそれを咎めて吠え、却つて其主人に打殺された。仍て今でも麥を收穫するたびに、竈の上の壁に初穂を掛けて、犬の靈を吊ふのだと言ひ傳へて居る。但し稲の初穂もやはり同じ荒神様の壁に掛けるのである。

カケホ 初めて刈入れた稲の穂を三四本、神前にかけて又焼米を作つて食べる風習を、懸穂といふ地方がある(美田)。或は田の水口に小さなハサを立て、是へ二穂三穂掛けて、田の神に上げるといふ例もある(北設楽)。以前は月の数だけ即ち十二の穂、閏年には十三穂を二所の小さいハサに掛ける例もあつた。此穂の米だけは別にして置いて、赤飯その他の神供の飯にまぜて炊いたといふ(三州吉田領風俗答書)。

イツクイネ 秋の收穫の後、各自の軒に稲をつるして置く。之を一束稲と謂ふ(小縣)。刈掛とは別で、秋田山形の二縣などで、イナカズと謂つて居たものに近いやうである。

カミノホ 筑前の遠賀郡の一部では、稲刈に先だつて田の畦に青木を立て、海に出てオシホイを取つて来て、それを二三束の稲に掛けてから刈初める。そのオシホイの海草を掛けた二三束の稲を神の穂と謂ひ、神棚に掛けて神の初穂とする(漁村民俗誌)。

ハツホマツリ 豊前京都郡で稻刈の初めに、月になぞらへて十二株の稻に河塩をかいて之を諸神に奉る。荒神様の初穂には別に三束の稻と、糶摺毎に米一升づゝを供へ、麥は三本の穂を六月の戌の日に荒神に上げる。初穂祭は收穫の作業が終つてから、新穀を炊いで神に進らせ、各人も共に楽しむ例が多い。(ソウモクの條参照)。

スクマムリ 八重山の石垣島では、この名をもつ貝塚があつて、定まつた家筋の者が、毎年稻の初穂を持つて来て此塚に上げる。スクマとは此初穂のことで、家々皆それを僅かづゝ切つて来て神を祭るのである。スクモヅカといふ塚は東日本の諸縣にも多く、長者の糶穀が積んで塚になつたなどいふ傳説もあるが、其スクボとスクマとは、八重山では二つ全く別な語であり、塚の名の由来は他に在つたのである。

オハナトリイハヒ 神に供へる米を花米といふのは例が多い。安藝中野村では、ハヤモノ即ち早稻のまだ軟かい穂を十束か二十束刈取つて、焼いて搗いて焼米を作り神俵に進らす。是をヒラゴメ又ヒライゴメ(搦米)と謂ふのは古語である。オハナ取も亦初穂祭であらうが、此地方では穂掛けの行事は無いらしく、たゞ以前この日必ず南瓜を食べ、その無いのを恥としたといふことである。

ワセツキ 石見ではまだ十分に熟せざる稻を刈取り、焼米にすることを早稻搗と謂ふ。それを重箱に入れ南天の葉を添へて、農家互ひに遣取をする風があつた。美作では掛穂の日に焼米を作つて食べ、もとは其日から夜なべが始まつたといふ。日は備中と同じく主人の年日などを選んで實際の刈入れよりは十分早かつた(美田)。苗代祭の日の糶焼米に對して、此方は若く柔かく、ひしげて居るからヒラゴメといふ處が多い。風味も全く別であつて、今でも年寄には懐かしがられて居る。

カリソメマツリ 稻の刈初めの日の御日待をカツツオメ祭といふ處がある(芳賀)。實際稻刈にかゝると日待などをして居る暇は無いから、本來は其以前に日を定めて此祭をしたことと思はれる。或は又最終の日に掛穂の式を行ふ例もある。此方は或は延期とも見られるが、それはまだ確かでない。(カツチギイネの項参照)。

ホウネンサマ 豊年様、又御初穂様ともいふ。ことしは豊年と思ふ年には、休みを欲する若者たちが、俵に稻穂を括りつけて、それを區長の家の庭にそつと置いて來ることがある。之を受けた區では神を祭り休業し、其晩は又人に知れずに、どこかの區に持つて行つて置いて來る。わかるといけないといふ(芳賀)。即ち是を神の意と見ようとしたのである。

ミツカボシ 稻刈前、其年豊作とわかると祭をする處がある。之を三日盆といふ(鹿角)。
ソウモク 滋賀縣では秋祭をソウモクと謂ふ村が多い。早稻の刈入れに際して其初穂を神に供へることで、早穂御供と書く例もある(あられ六ノ九)。或は相撲の音といふ説もあるが、角力を必ず行ふといふ事實は無い。佐賀縣でも秋の豊收の終つてからの休がソウモクだが、是は草木祝といふ字を用ひて居る(民族三ノ四)。石州では時候陽氣のことで、よいソウモクでありますなどいふ。主として春の初だけにいふ由。

アヲザシ 麥の穂掛行事は阿波の麻植郡、又讃岐の一部にもある。其日は麥が熟してからの戌の日を選んで刈そめを行ひ、麥畠に桑の枝を籾のやうに挿込んで、二本の穂を是に掛けて地神を祭り、残りは家に持還つて神佛に供へ又軒端にも二本を挿し、其餘を以て青ざしといふ食物を作るといふ。青ざしは古い食物で、辭書にも見えて居るが、之を穂掛の日にこしらへるといふことはまだ知られては居らぬ。

二一 稻 刈

タトリ 鹿兒島縣などでは、稻刈をタトリと謂ふ者がある。田取であらう。田といふ言葉の感じが元は少し變つて居たのである。八丈島で稻をタブといふのも田穂らしい。或はサノポリなどのサと、關係のある語音であつたらうか。

アキシ 稻刈に働く人といふことであらうが、特にこの農繁時だけの雇人を秋師と謂ふ土地がある(日高)。アラシコといふ語なども、略同じ意味に用ひられて居る。

アキランナ 秋の農業に雇はるゝ女。長門風土記には、「五月女といふは田植の頃五十日を限り、秋女といふは秋の頃百日雇ひ入るゝ也」とある。

イナヨリ 刈稻を束ねる束ね藁には、地方名が至つて多く且つ色々の作法がある。通例藁の穂先を結び合せ、ごく簡略に搓つたものであるが、隠岐では稻束に限つて之をエナヨリと謂ひ、麥を束ねるのはムギエイソ、薪などを束ねるのはユヒワラと呼んで居る。前の二つは共に正月二日の藁叩き初めの日に作つて、入用の時まで蔵つて置く。此藁を打つ際は正月の取米を少しばかり、藁穂に載せるといふ。

イイデ 稻麥を束ねる爲に、藁の穂先を結び合せたもの(壺岐)、結手であらう。肥後の玉名郡は之をイナジといひ、以前は又ムスデとも謂つた。肥前の平戸ではイジ。

ユツツラ 刈稻を束ねる藁繩を、茨城縣ではユツツラ又はユツツオと謂ひ、草などにはマツツラと謂つて居る。ツラは葛のことであらう。埼玉縣に來るとユツラ・エツラ又はエツリともなつて居る。

ユヒソ 攝津豊能郡などでは、稻一把を結ぶ藁をユヒソ、柴等には別にサンバイコといふ名がある。東把の稱へ方は古制を存し、手一ぱいの稻四つを一把、十把を一束とした。今は三つかみが一把、その十二把が一束となつて居る。關東の方は既に稻には一把といふことを謂はず一タバといふ。以前は片手三つかみが一たば、今は器械になつて二つかみを一たばにする。ユヒソといふ語も亦少し崩れて、常陸南部では二つ繋いだものを大ユツツオ又は稻刈ユツツオ、繋がないのを只ユツツオといふ。下總印旛郡などは之と反對に、前者をユツツオ後者をハンソと謂ふのは、ユヒソを一ツかと誤解したからで、他の郡では之をリツツとさへ發音する者がある。ソは本來は麻の苧のことだが、後には細大すべての緒をいふやうになつた。

クサイソ 稻を束ねるユヒソが、信州では多くイイソになつて居る。製作は一握りの藁を二つに分けて先を結ぶこと他の地方のユヒソも同じである。やはり正月二日の仕事始の日に、男は必ず之を作つて神棚に上げた(上伊那)。クサイソとは朝草などを結ぶユヒソだが、時としては六尺

ばかりに切つた繩をもさういふことがある。

サバイソ 紀州ではユヒソをイソと謂ひ(那賀)、又サバイソといふ處もある(有田)。サバクといふのは一握みの藁を二つに分けることかと思ふ。一把の稻にはそれを結び合せるほど長いものはいらぬのだから、必ず斯うして使用するのは作法であらうと思ふ。

テネソ ネソは山中で薪などを結はへる自然の樹枝又は葛で、正しくはネリソ、ネルといふのは捻ちることであつたが、讃岐では藁の穂先を合せて作物を結はへるものもネソである。稻束だけは特に穂先でなく、根の方を結び合せるといふ土地もあるが(仲多度)、其説明はもう傳はつて居らぬ。或は之をテネソといふ地方もあるといふ(ホトトギス五ノ三)。

ツナガヘ 稻や草を束ねる爲に、穂先を繋ぎ合せた藁(米澤)。乃ちツナギアヒの意であらうと思ふ。秋田縣の雄勝郡では之をツナギと謂ひ、岩手縣の氣仙郡ではシナガイ、東津輕ではシナゲと呼んで居る。何れも稻刈用に用意せられるもの。

ツガヒ 佐渡では藁數本を繼合せて、藁などを束ねるのをツガヒといふ。繼合ひの約だといふ説もあるが(佐渡方言集)、二つ合せたものをツガヒといふ語は既にあるから、新たな變化と見るに及ばぬ。能登半島では之をチガヒといひ、繩にもチガヒにもかゝらぬといふ諺もある(民族三

ノ一。備前邑久郡ではツガエ又はツガワ、以上三つは共に藁の穂先を繼合せ、稻などを束ねるに用ゐられる。薩摩の谷山あたりへ行くと、髪を結ふときの紐をもチカイと謂つて居る。言葉の起りはもう忘れられて居るのである。

スナイ 飛驒では撻りの十分でない繩をスナイと謂ひ、信州下高井でも藁を叩かずに其まゝ絢つた繩がスナエだといふ。是だけで見ると素絢ひの意とも考へられるが、青森縣の上北郡などのスナイは、又シナイともチカイとも謂つて、正月初めの山祭に、鴉に餅を投げて遣る時に使ふ藁の飾繩のことである。其製式は土地によつてちがふが、餅を其間に挟んで空に向つて揮り、もしくは樹の枝に掛けて置いて鴉を呼ぶことは、津輕秋田も共通であり、其折の喚聲はコロコロ又はロウロウ、或はシナイシナイ・チカイチカイなども謂ふのである(人、四〇)。多分は是も亦稻の束ね藁から出た語と思ふ。

スガイ 刈稻その他を束ねる爲に穂先を結び合せた藁を、スガイと呼んで居る地域は弘く、北は福島縣の岩瀬郡あたりから、南は伊賀の阿山郡にも及び、その中間の静岡縣各郡もスガイであるが、こゝでは只兩端を結んだだけのものと、絢ひ合せたものがある。東京府西部から甲州信州にかけてはスゲエと謂ひ、飛驒に越えると又スガイである。ツガヒといふ言葉の轉訛ではない

かと思ふ。ツガヒをスガヒと發音する例は東北になら有る。たとへば鹿角では鶏一すげアなど、謂つて居る。

クサスゲ 刈稻を結はへる藁繩のことで、是は兩端を繼合せたものでないが、やはり正月二日朝の絢ひ初めの仕事にして居る。其日は暗いうちに起きて長さ一尋のものを百筋、恵比須様に上げて置いて其年の麥刈稻刈に使ふ(東筑摩)。草を束ねる藁繩をクサヘズ、是も正月の仕事始に絢つて、オイベツ様に上げて置くといふ(諏訪)。

テワラ 農民が稻刈時に手にはめるもの、指のあまり分れて居らぬ布製の手袋(御津)。手藁といふからには元は藁製であつたらう。手藁といふのは他では洗繩のことだが、是は皆トウラと發音して居る。

エンサラ 深田の稻を刈る爲に、敷物として居る杉の生枝(玉名)。もとは是も藁製で、乃ち圓座藁ではないかと思ふ。

エガリ 稻黄熟後、稻刈に先だつて畦畔に沿うた周圍一筋だけを刈取ること(栗原)。

ダイガリ 讃岐地方に行はれる稻の刈方。周圍を先に刈つて中を残して置く。之に對して端から刈るのをベタ刈といふ。

タナガリ 稲を刈るときに一通りの稲を刈残して伏せ、それを藁にして刈つた分を載せて乾すことを棚刈といひ、其下稲を棚下といふ(小縣)。同じ方法は常陸北部にも行はれる。ぬかり田などですること、三尺おき位に帯状に刈残し、其上へ刈つた稲を列ね乾す(多賀)。下の方は後にカツボシにする。この棚刈に對してカツタバネといふ名稱がある。即ち刈束ねで、刈ると直ぐに束ねて木に懸けるものである。

カツボシ 刈つた稲を其まゝ田に干して置くこと。田が乾いて居る時に限つてするのが普通だが(入間)、棚刈の場合には濕田でも之を必要とするのである。

ナトリ 刈つた稲束を逆さにして田の面に立て、干すこと(北蒲原)。斯うしないとシブ(藁程)がよく乾かぬからといふのは、掛稲の風が盛んで無い爲であらう。或は後熟の効果があつたのではないかと思ふ。

ホダテ 陸前岩沼の附近で、刈上げた稲の穂先を上に向けて立て、置くことを穂立(民俗學五ノ三)。穂ニホにする爲の準備といふ。諏訪地方で田へトヤを立てるといふトヤも似たものらしいが、是は三束づゝ束ねて縛り付けるさうである。

カツキリガイ 武藏の北足立あたりで、稲刈の最終には必ず一つかみづゝの刈株を交互に組合

せて束ねる習慣があつた(風、四六六)。是を刈切替といふのはたゞ互違への意かと思はれる。何か呪術的の目途があつたのである。

カツチギイネ 常陸の新治郡などでは、稲刈最後の鎌を當てた四株ばかりの稲は、互ちがへに束ねて置く。此の稲だけは別にして置いて、其藁は氏神の屋根を葺き、又は注連繩を作る藁に充てる。又其米には足し米をして、師走の月の巳の日に飯に炊き、來年も家に居る者だけに食べさせる。來年は出て行く者には子であつても食はせぬといふ(郷、二ノ一一)。

イナカス 以前稻數と稱して、刈稻の十束毎に一穂づゝを抜き、保存して居たらしい痕跡がある。羽前最上郡では十月の十六日に其穂に餅を供へ、二月十六日を以て其穂の米を田の神に供へる餅に搗く。郷の東田川では正月の飾り物に稻數といふものがあり、是は餅を以て稻の穂に擬することになつて居る(旅傳、九ノ五)。秋田附近の村々では、昔は稻數の穂の米を以て正月十六日の粥を作り、又五月の早乙女の飯を炊き、其藁は早苗の結び藁に用ゐた(米魚の村君)。

カベヲカル 「秋はカベを刈るやうに」といふ文句が、越後その他の田植唄に屢々出て來る(俚語集)。其意味がまだはつきりとせぬが、西頸城では、カベは稻の束數のことだといふ。中蒲原でも、今年の稲は草だけは出來てもカベを刈らぬといふさうだから(高志路二ノ九)、株の太さのことのや

うにも取れる。

ヤゴ 稲の刈株から又生える芽をいふ(入間)。即ちオロカオヒのことである。是にはママバエ・ヒウナ等色々の名がある(農民語彙)。

シトデ 稲のひこばえを、越中では一般にシトデといふ、羊穂などいふヒツジも、同じ語であることが察せられる。上新川では又ニジウデといふ。即ち二重出である。

シツイネ 福島縣の石城郡では、早稲の刈跡にほきる二番もえをシツ稻と謂つて居た。暖かな年には此地方でも二粒三粒實のることがある。鴨の病又は産婦の下痢などに、之を粥に煮て食べさせると効があると謂つて、爐の釣に紙袋に入れて吊して置く家もあつた。

二二 稲場 稲架

イナバ 福島縣の石川郡などで、村に近い草場をエナバツコ又はエナバといふのは稲場である。東蒲原などの稲場はハゼの未だ普及しなかつた頃、こゝに稲を集め、天気になると乾し、荒れると積んで置いたといひ、今でも芝などの生えた空地である。南蒲原でも稲場又稲寄場と呼ぶ村持の

草原は有るが、近頃は之をソウゼンバ即ち馬の血取場だけに使つて居る(三條南郷談)。下伊那方面でも農家に近い芝原をイナバと謂ふが、今は子供の遊び場となつて居る。ハザ掛の近代の發達であることが是でわかる。上總の山武郡でノウバといふのはニホ場らしい。近江の湖南地方では之をバンと謂つて居る。

ケラバ 加賀では屋敷まはりの稲置場をケラバと謂ひ、又其稻積の巨大なものを、ニウ(ニホ)に對してケラバと謂つて居る。ニウは一つが五百束まで、ケラバには千數百から二千束の稻を積む(海、四ノ五)。越中でも千束ケラバの名があり、又「ケラ場流して穂を拾ふ」といふ諺もあるが、同時に稻ニホを設ける場所をも其名で呼んで居る(富山近在方言集)。この語の起りはまだ明かでない。同じ越中でも土地によつては、藁吹のことをケラバと謂ひ(下新川)、或は家の軒先をもさういふ處がある(東礪波)。イナバといふ名稱も元は此地方にあつたと見えて、稲の藏入を終つた日の祝を、稲場祭といふ語が傳はつて居る。

ハンバ 田畠の一隅を開き残して、稲架などを立てる處を石見ではハンバ、隠岐では又ハンバと謂ふ。信州などは山の中の僅かな平地をもハンバと謂ひ、通例さういふ處で辨當を使ふからとて、飯場などの字を宛てゝ居る。ハバといふ地形語と關係があるらしい。

ハゼバ 佐渡で稲乾場のことをいふ。ハゼ即ちハサ木を立てる場處の意。越後では普通ハサバと謂ふが、ハサをハゼ・ハセウなどいふ者も稀でない。

ワラガケ ハサには作りハサと木ハサとがある。後者は天然の木を其まゝ稲架に利用するものであるが、是を簡明に藁掛といふ地方もある(入間)。耕地四邊へ藁掛となへ、小木を栽うるは隣人協議に任す云々(民事慣例類集)。

カケネ 掛稻、ハデのことである(高市)。

ミチキ 稲架をイナギといふ古語は、京都の四周には残つて居る。肥前神崎郡などは之をミチキと謂ふ。

ハデハツカ 刈稻はハデに二十日置くといふ意味の諺である(阿哲)。此地方のハデは普通六竿がけ即ち六段で、二段目にスケ即ち支柱二本をすける。竿の幅六尺を一間(ヒトマ)と呼び、一間から四斗俵一俵取れると目算する。ハデ・ハゼ・ハサ等は何れが正しい語といふことを知らない。古歌には又ハツ木ともあるから、田の端にある木といふ意味だつたことは察せられる。甲州などはハンデである。

ハズ 稲架即ちハサ木を上伊那ではハセ又はハゾとも謂ふらしい(川島村郷土誌)。遠江の濱名郡

ではハズと謂ふ。丸太と丸太との間をマといふことは備中と同じく、マの數と段の數及び角度は家によつて異なる仕來りがある。横の竿は竹で、其竹の二つに稲束のヌガイが挟まる様に懸ける。穂先は表へ出し根の方は裏へ出すが、下の一段だけは逆に穂先を裏へ出して置く(土の番二二ノ三)。普通路傍に接近して立てるのは、監視の便からであらうと思ふ。

ワラバセ 稲架をハセといふ語は弘く行はれて居るが、土地によつて製式に著しい異同がある。たとへば下北半島の海側にあるものなどは、左右合掌作りにして伏屋の形であり、是に粟藁麥等も掛けて乾した。斯うすると雨に沾れることが少なく鳥にも荒らされることが無いと謂つて居た(牧の朝露)。福島縣相馬地方などいふ藁バセは、藁の堆積で其形がニホに近く、又其頂にはトバといふものを載せてあるといふ。

ハサゴヤ 稲架に使用するハサ木は、田のへり家の背戸などに横たへて置いて、必要の期間だけ出して使ふことにして居るが、其場所が土地によつて區々である。飛驒の白川村のハサ小屋は三間に三間といふ大きなものがあり、養蠶道具なども此中に併せ藏して居る(旅傳、八ノ一〇)。

オダカケ 稲架を茨城縣ではノロシ又はオダ、二つの語が並び行はれて居るが、後者の方が新しいといふ説がある。しかし之に使ふ杭をオダアシといふ語も存し、又オダカケ・オダギとい

ふやうな複合詞も出来て居るから、或はもと小田小屋などいふ名稱が、移つてハサ木のことになつたのでは無いかと思ふ。

ノロシ 九州中國又熊野では衣掛竿、即ち衣紋竿以前の兩端を緒で吊つたものをナラシといふ。關東でいふ稲架のノロシが、是と一つの語であつたことは疑が無い。ナラスは均らすで平らなるものといふこと、ノロシは其起りをもう忘れた爲に、今では竹矢來をさへさう呼んで居る(北足立)。

ナルキ 信州ではハサの横に渡す棒や竿をナルと謂ふ。紀州でも淡路でも共にナルであつて、ナルイは同時に平坦なるを意味する形容詞であるが、それが一轉して其ナルに用ゐられる様な細丸太を、ナルキ又はナルンボウと謂ふ土地も多い。たとへば東筑摩で三九郎の心棒に立てる木もナルである。四國北九州などでは山から木を出し修羅の横木をナルキといふ。稲架の材料だけは特にハザナル(磐田)、又ハセザホとよぶ地方もある(津輕等)。(なほ地名のナロの條参照)。

ナダラ 隠岐ではハサ即ち稲を架ける棒をナダラ、出雲の簸川郡では其稲架を設ける乾場をさへナダラと謂つて居る。やはりナルと同様に平らなるを意味した語であらうが、是には別に漁村の魚乾物の影響も想像せられる。此方は魚棚即ちナダナの訛りである。

オシボウシ 吉野の北山村などで、稲掛をオシボウシと謂ふのは、ウシといふ語から出て居るのであらう。ウシは四脚を踏みひろげた形が、牛に似て居る所からさういふらしく、他の色々の木の組合せにも用ゐられる名だが、稲架だけをウシと謂ふ土地も無いではない(伊豆、津久井)。紀州の西部で之をウマサテといふのも、同じ動機からかと思はれる。

サギツチヨ 稲架即ち刈稻を架ける装置を、阿波の祖谷山でも福島縣の海岸部でも、共にサギツチヨと謂ふのは、杭を立てた形が正月の所謂左義長と似て居るからである。左義長の名の起りが三穂杖であつて、穂杖を三本結び合せて火祭の小屋を組んだからの名であつたことは、單にこの一つの轉用からでも推測し得られる。山で火を焚く場合の急ごしらへの薬籠釣りに、細い棒を三本、上を結んで立てるのを、同じく三穂杖と謂ふ例は越後にも秋田にもある。

サガリサホ 稲架をサガリと呼ぶ例は、紀州の日高西牟婁の二郡にあり、是に用ゐらるゝヒソを又サガリ竿とも謂ふ。サガリ稲束を下げるからの名と思はれるが、通例は竿を七段ほども横たへて乾すものゝ名で、別に一段だけの簡單なる装置は、之をハナチと謂つて居る。其サガリの杭は特に丈夫なものを立てる必要があつたと見えて、又サガリアシといふ名もある。

カコ 吉野で稲を乾すハデの木をいふ。長さ二三間太さ五六寸まはりの、杉又は檜の丸太で、

ヒソといふのも同じものといふ。皮は剥いである。又足場用にも使ふといふ(北葛城)。

ハサビソ ハサ木に供するヒソ。ヒソは古語であり、奈良時代の文書にも比蘇と出て居る。或は檜楚とも書く。

アモ 鹿角郡では稻掛のハサをかく時に、兩側にアモといふ柱を立てる。高さは二間位、幅七寸に厚さ三寸。是にハサコを通す穴をあけるのを、アモ穴とほすといふ。アモの倒れぬ様に副へて立てる支柱をチヂといふ(鹿角方言集)。

ノシボウ 稻木の高い所に稻を掛けるとき、稻束をさし上げる爲に用ゐる棒。さきが二股になつて居る。一名をマタブリといふ(九戸)。

二三 稻村 稻積

イナブラ 古書にイナムラとあるものと、同じ語であることは疑が無い。此語の現實に行はれて居るのは、安房と三浦と志摩との三半島を主とし、遠江駿河では既にやゝ異なる意味にしか用ゐられて居ない。安房でもエナブラは藁や薪などを積重ねたものだといふ者がある。最初から藁

薪だけだつたら、稻村とは謂はなかつた筈である。

フミイナブラ 稻村の大きなもの。稻を横に寝かせて積んだものといふ(庵原)。是に對してモズイナブラといふ語もあるが、それはどういふ形かまだ明かになつて居ない。

イナゴ 三河北部には稻村をイナゴといふ處がある(東加茂)。このゴは或はニホの訛りかも知れぬ。

ワラグ 伊豫では藁のニホをワラグと謂ふ例がある(周桑)。ワラニホの發音變化か、もしくはワラグロの約まつたのであらう。後者は四國に弘く行はるゝ語である。(クロの條参照)。

カリグロ クロは中國四國で塚を意味し、土石その他の物の堆積をいふのが普通だが、土地によつてはたゞ稻村のみを、クロと呼んで居る例もある(美馬、周桑)。カリグロも現在は聞く積上げた藁グロに對して、假に藁の暮まで藁を横に積んで置くものゝ名になつて居るが(仲多度)、もとは或は稻積の形ではなかつたかと思ふ。駿河でいふフミイナブラ以外に、稻をさういふ形に積んであるものを今も伊豫の北部では折々見かける。

キグロ 出雲の能義郡などでは稻村のことをさう謂ふ。別にスズシといふ名もあるから、木グロは木に據つて稻を積んだものかと思ふ。

ワラグロ イナムラに村の字を宛てたのは實は借用で、ブラ・クロと何れが正しいかはまだ決定して居らぬ。イナグロといふ語は今日はまだ使用の例を知らぬが、是と對立して居たかと思ふワラグロの名稱は、土佐にも讃岐にも行はれて居る。野外に稻を永く積んで置くことが不安になつて、藁のクロばかりが盛んに行はれ、一方の名が隠れてしまつたものらしい。

イナグマ 因幡の一部には稻積をイナグマと謂ふ地がある(氣高)。或は稻のクマ又單にクマと謂ふ。スズシ・稻スズシといふ語も共に行はれて居る。

ニホ 刈稻を圓錐形に高く積上げたものゝ名は、ニホといふのが最も古いらしく、少なくとも其分布區域が最も広い。たゞ其發音が土地によつてやゝ變化し、且つ稻そのものを積む風が衰へて、是を他の種の堆積の名に轉用した例が多いのである。ニホを略原形に近く、ニオと謂つて居る處は北信から越後、伊勢の一部と九州の南端に少しくあるだけで、しかも越後などは藁ニホ以外に、木ニホ・杉枝ニホ・肥シニホ等があるのみで、もう稻ニホは無くなつて居る。東筑摩などはニゴ又はミゴと謂ひ、既に藁ニゴのみ多く稻ニゴは殆ど名を存するのみである。甲州から諏訪上伊那にかけてはニヨウ、是も藁か干草の堆積が主であり、下伊那から北三河はニゴ又はニゴボウス、遠州に入るとニンボウといふ處もある。東美濃と飛騨にはニゴ・ニグもあるが、ニユウといふ例

が最も多い。近江もニユウが多く、端々に行くといニヨウ又はニオンがある。次にノウと謂つて居る地方は關東では千葉茨城の二縣、中國では石見と周防とにあり、周防には又ノウグロといふ語もあるが、是等は何れも藁や柴の類を積むだけである。ニヨウと謂つて居る地方は越前の各郡それから東北は略全部であるが、後者には藁柴其他のニヨウと對して、又イナニヨウといふ語も行はれて居るから、穀物のまゝをニホに積む風もまだ絶えては居らぬのである。

ニボシ 稻積をニホといふ語の起りはまだ明かでないが、丹生・壬生又は新嘗などのニフと、因みのある語だらうといふ折口氏の説が夙く出て居る(海、四ノ三)。贊といふ字を以て漢譯せられて居た我々のニヘが、或はこの兩者の聯絡を示す鍵であるかも知れぬ。稻村をニエと呼ぶ例は、志摩の南岸からたゞ一つ出て居る。其ニエの蓋になる藁製の飾物をボシと謂つて居る。ところが熊野吉野の山村に入ると、ニボシはもう藁グロの名になつて居り、更に他地方では只ボウシと謂つて、この藁の堆積をさす例も出來て居るのである(棟原)。(ボウトの條参照)。

ホニホ 秋田縣北部の村々で、田の畔に棒を一本立て、それを中心に稻束を掛けるものをホニヨと謂ふのは、多分藁ニホに對する穂ニホであらう。宮城縣では又ホンニヨウと謂ひ、乃ち本ニホといふ様な感じを以て呼んで居る。ニホを稻穂のまゝで積んだものに限り、其他の堆積には

別の名を與へた例は、大隅の肝屬郡などにある。こゝではニホを引いてからでない、落穂を拾ふことを許さなかつた(旅傳、八ノ一)。伊勢の一志郡境村なども、ニホは刈稻を積んだものゝことで、北信などでいふ藁ニホは別にスキと謂つて居る。稲は穂先を中にして圓く積上げ、一番上の列だけは、穂を外側に垂れた逆穂を使ふといふ。三河作手郷のニゴにも、全然是と同様式のものを目撃する。乾いたものを濡らさぬ爲、又野猪の害を防ぐ爲ともいひ、十日間位は斯うして置くことが稀でない。東筑摩のニゴにも形によつて多くの種目があり、其中には又本ニゴがある。

フナニホ 信州でフナニゴ又はフナニヨといふものは、現在は何れも藁の貯藏法で、其形が幾分か筥を葺いた船に似て居る(上伊那、東筑摩)。多分は香川縣のカリニゴなどと共に、元は穂のある稲を斯うして暫く置いたものであらう。

ソクニゴ 藁を束にして一本の樹木のまはりに積むものを、美濃の加茂郡ではソクニゴといふ。ニゴはニホである。是に對して圓錐形に積上げたものを丸ニゴ、此語は又信州にもある。

タテボク 飛驒の白川の萱ニウは、長い丸太棒を田に打込み、それを中心に萱束を寄せめぐらして、其上へ笠を被せた様に古萱を蔽ふ。その棒をタテボクと謂ふ。ボクはホコと同じく、棒を意味する古い日本語である。

チノウ 常陸多賀郡などのノウ即ちニホは、藁や薪を積む場合でも、下に木を組んだ臺を設ける。之に對してぢかに地上に置くものを地ノウといつて早く始末する。

ミヨウツンブラ ニホは信州でもミヨ・ミゴといふ者が折々ある。其轉訛は京都にも古くからあつた(かたこと五)。「穂を拾うてメウに進らする」といふ諺は「釋迦に説法」といふのと近く、無用の好意を嘲けた意味があり、乃ち又三百年前までは、ニホに向つて供物を上げて居たことを證する。駿河富士郡の一部では、ミヨウツンブラといふのが積藁のことであつた。ミヨウは即ちニホで、ツブラは稲村のブラやグロと共に、圓く積上げられたものゝ名である。カイツブリ又は鳩といふ水鳥を、ミヨチン又はミヨチンブラといふ處は他にもある。多分この方が前で、富士山麓だけが後に稲村の名に用ひ出したのであらう。

イネコヅミ 豊後から日向にかけて、ニホ即ち刈稻を圓く積上げたものを、コヅミ又は稲コヅミと謂ふ村が多い。是に對しては又藁コヅミといふ語もある。薩摩のコヅミはすべて藁塚であるが、大隅に行くと今でも穂の附いた稲をコヅム處が多い(郷、四ノ九)。或はコヅミといへば柴や刈草の堆積をも含み、コヅムと動詞にすると稲を積むことになる例もある(八女)。コヅムを小積むのやうに解して、藁でも薪でも假に置くことをコヅムといひ、又はコヅルとさへいふ處があるが

コヅミの元の起りは穂積であつて、動詞化は寧ろ後の事ではないかと思ふ。

イネマヅミ 沖繩では稻の穂積をイネマヂンと謂ひ、文字には稻眞積と書いて居る。是は家の前庭の中央に、濕氣を防ぐ木組の臺をして、穂先を中にして圓く積むことは、他府縣の穂ニホ・本ニホと全く同方式で、筋供その他の米の入用の度毎に、稻束をそれから取下して搗いて使ふのだから、乃ち終年を通じての貯藏法である。奄美大島の特色たる常設の高倉と、形状構造を同じくすることは一見してわかる。たゞ後者は鼠害を防ぐべく、著しく柱の脚を鬮げて居るだけの差である。

トシヤク 石見では藁の堆積をトシヤクといふ。稻積の漢字音かといふ説(田雲方言考)は正しいと思ふ。筑前地ノ島などはトウシヤクとも謂つて居る。此語の分布は山口縣殊に長門、豊後北半にも及んで居る。但し豊後では肥料の海藻を積んだものまでがトシヤクであり、長門も豊浦郡はトチャク、阿武では中心に木の杭を立てたものに限るやうにいふが、「トシヤクの様な灸をすゑる」といふから、圓いものなることは確かである。筑前の島では麥をトウシヤクするなども謂つて、元の意味は既に忘れられて居る。薩摩の飢島などは、藁束を舟ニホのやうに横にこづんだものはテイサクと謂つて居る。

ノバエ 阿波の名西郡では、藁ニホをノバエと謂ふ。野とは田の畔のことで、之に對して薪を山に置くのを山バエと謂ひ、又積方によつて堅バエ横バエの名もあるといふが(郷、四ノ六)、ハエの意味が不明だから、なほニホヤノウと關係ある語かもしれぬ。

スズシ 埼玉地方では、立木を中心に藁を積上げたものを木ズルシと謂ふ(幸手方言集)。近くに類例は無いが、このスルシはスズシではないかと思ふ。スズシの分布地域は因幡伯耆出雲、更に嶺を越えて安藝の一部に及んで居る。現在は大むね藁ばかりを積んだものゝ名であるが、なほワラスズシ又藁ズシといふ語の弘く存するのを見れば、本來は稻積が主であつたことは察せられる。是と近畿のスズキ、東海のスズミ、又は稻の花をスズバナといふ語など、關係があるだけは疑が無い。雲州では是を又シジシともシンシともいひ、藝州には又シシクロといふ語もある。

スズキ 稲村をニホと謂つて居らぬ地域の中で、最も有力な異名はスズキである。稻の穂積をスズキと謂つた記録の中心は紀州であるが、大和も殆ど一圓が今はスズキで、或は又スズキと澄んで呼ぶ所もある。それから攝津川邊郡、近江も甲賀愛知伊香の三郡に此語が採集せられ、志摩は大部分、伊勢は西端の山村がスズキで、平地に下るとスズミと境して居る。此言葉の起りはまだ明かとは言へぬが、大體に立木又は杭を中心とした藁積を今はさう謂ふらしく、奈良縣などで

は木を用ぬものをイモスキなど、區別して居り、或は木に寄せて積むことをスキといふ土地もあるから(近江愛知)、或は本來はニホの頂上に附ける藁の飾物から出た名ではなかつたかと思ふ。さうすると祭の曳山をスキと謂ひ、又は祭禮のスキ提灯など、いふもの、是と關係あることがわかり(南大和方言集)、更に進んでは徳芒花薄のスキも、共に神祭の徽章から出た、共通の名であつたことが察せられるのである。

スキ 伊勢の飯南郡などは、實を取つた稲藁を積重ねたのをスキとも又スキとも謂ひ、スキは斯うして乾すからスキだとして居るらしいが、是は志州の船越で、稲村をニエといひ、其頂の覆ひをニボシと謂ふと同じく、ボシはもとニホの頭に缺くべからざる藁飾のことである。スキも本來其部分だけの名であつたのが、いつの間にか稲村全體を意味するやうになつたのかと思ふ。スキ・スキシ及びスキの名の類似は、行く／＼此方面から説明し得る時が来るであらう。スキといふ語の區域は、伊勢の北部から始まり、尾張三河の低地部に及んで居るが、現在はすべて藁を積上げたものゝ名で、其容積も奥州のニョウの如く大きくない。伊勢員弁郡には八束スキ、又は十束スキの名がある。藁十二把を合せて一束、通例それを八つもしくは十合せたのを、一スキと謂つて居るのである。三河の方では正月七日の夜の火祭に、年占として焚く

二つの萱の大簀をスキといひ(幡豆)、又は十二月の山の講の日、同じく焚揚げる藁と竹とで造つた祭小屋を、スキと呼んで居る例もある(碧海)。稲村が現實に藁を積んで居た時から、スキは既に其頂に取附けた藁又は萱製の飾物の名であつたらしい。信州でも松本地方のニゴの種類にスキメゴがあり、阿波の一部にも稲村をスキメゴ、又はスキメと謂ふ處がある。民家の屋の棟の飾りにも、スキメドリなど、いふ名があるのは、起りは鳥類の雀ではなかつたやうである。

ツボケ 美濃の揖斐郡の奥では、藁束を積重ねたものをツボケと謂ふが、播磨の佐用郡などは之を藁グロと謂ひ、たゞ其頂上を覆ふ三四束の藁束だけをツボケと謂つて居る。是と多分同じ語かと思ふツボケ又はツボキは、中部播磨に於ては藁ニホのことであるが、攝津の有馬郡でいふツボキは、田の中に僅かな藁束を置いて、笠のやうに藁を其上に被せたものゝ名である。但しニホをツボケといふ例は岩手縣にもあり(稗貫)、ツボケは此地方では又丸瓢の名であるから、是だけは或は全體の名が、逆に頂上の特色ある覆物の名に、移つて行つたかとも考へられる。

シラ 南方の八重山群島に於ても、シラといふ語が相接近した二つの意味を有つて居る。即ち與那國島に於ては稲積の頂の飾がシラで、下の部分は是をナオテと謂ふに反して(旅傳、九ノ一〇)

石垣島の方では稻村そのものがシラである。マヅン(眞積)といふ名はこゝにもあるが、それはただ納税の以前の假置場らしく、農民の手に残る種籾と少量の薬用米とは、シラに保管して置くといふから(同上、盆行事號)、此方が常設のものらしい。注意すべき一事はこの方面の島々に於て、シラが同時に人間の産室を意味して居ることである。與那國島のシラは通例は蒲葵の葉を以て飾つて居る。秋の頃島の母親たちは、このシラの上に米の握飯をそつと置き、是を北の空から雁が持つて来てくれたと謂つて、小さい兒どもに與へるのださうである。

ボウト 稻村をボウト又はボウトウといふ例は、攝津の武庫川邊豊能の三郡、阿波にも徳島の附近にさう謂つて居る處があるといふが、此語の由来はまださつぱり判らぬ。或は是も頂上の薬飾から移つた名ではあるまいか。紀州日高郡では、スズキの上に被せる薬をボウシともテボとも謂ひ、尾張の西部などには、稻村そのものをタンボといふ村がある。ボウシは帽子のやうな感じで使つて居る人もあらうが、スボシ・ニボシ・トボシ等の例を比べて行くと、帽子より新しく出来た語とは思はれぬ。大和の十津川では稻村そのものをススキ又はススキボウシ、徳島地方ではイナムラボウトと謂ふさうだから、兎に角この二つの語は共に覆ひ薬の名であつた。

ニゴブタ 稻積の一番上に載せる薬を、埼玉では蓋薬と謂ひ、三河の東西加茂ではニゴ蓋と謂

つて居る。ニゴはニホの訛りである。

ワラトベ 筑後八女郡などでは、苧田の中や畔に竝べた薬コヅミの上に、又薬製の笠のやうなものをつつ載せて居る。是を薬トベと謂ひ、それを載せたコヅミだけを、薬ニホと謂ふさうである。名稱は土地によつて區々だが、ニホに此薬覆ひをせぬものは殆ど何處にも無い。雨に沾らさぬ爲と今日は解する者が多いが、それにしては大抵皆小さい。別に占有者の意思に出た、もう一段と深い目的のあつたことが推測せられる。トベを九州の各地でトビ又はトボシ、或はトワラなどと呼んで居るのは、古語のトマ・トプサ等と關係のある語であらう。讃岐でも薬數束を寄せ束ねて、薬塚の頂に被せることをトビニスルと謂つて居る(仲多度)。

二四 苧上げ稻上げ

ニホブリ 稻苧上祝をいふ(東頸城)。多分はもとニホの完成を祝する意味から、始まつた名であらう。

カリゴメ 攝津川邊郡などで、苧上祝をさう謂ふ。鎌に御飯を供へる日である。此地方では稻

苧上げ稻上げ

扱終りの祝もコキゴメ、臼摺終りの祝もスリゴメと謂ふ。此コメは米で無く、葎籠り年籠りなどの籠りと同じで、この際改まつて神を祭つたことをいふのであらう。

カミカリアゲ 舊九月三度の九日を、秋田地方では共に刈上の節供と謂ひ、共に餅を搗いて祝し、又は刈稻二把を箕に入れ鎌を添へて神前に供へる。田の神様は此日の餅を食べて、十月の旅に立たれるといふ。三度の九日といふのは家々の農作手順によつて、何れかの一つを主として祝つたらうが、北地の秋は早いから、初の九日にももう此祝を舉行し得たのである。下越後の農村では新暦九月の末の九日、もしくはそれよりも早く刈上を祝ふ例がある。此日にはまだ實際の刈入は済んで居らぬので、此日の餅には型ばかり新穀の粒を剝いて入れた。即ち是には他の地方の掛穂祭の趣旨が、多分に加はつて居るのである。村によつては此日を神刈上と稱し、是に對して別に家々で牡丹餅を食ふ日を、内刈上と呼んで居る(北蒲原)。前者は言はゞ公式の刈上祝、田植終りの日の村サノボリに該當するものである。

カリアゲモチ 刈上祝の日は餅を搗き田の神に供へるを例とする。或は稻刈録にも餅を祝ふ家もある。秋田縣九月の三九日を其節供とするに對し、南へ下るほどづゝ其期日が遅くなる。宮城縣でオカリアゲと謂ふのは通例舊の十月朔日、福島縣は同九日から十日への一晚で、此夜の餅は

蛙が田の神の使になつて背負つて行くなどいふ(石城)。常陸の北部でも十月十日を以て、盆正月同列の大切な一日とし、之を刈上と呼んで居る。群馬埼玉長野の三縣にかけて、農家少年の樂しみにして居るトホカンヤも同じ日で、是も稻刈の終りの祝だが、其收穫を積んで置く場處の如何によつて、祝の心持に若干の差異があるやうである。以前は一般に稻を穂のままで、貯藏する期間が長かつた故に、刈上げが最も記念すべき一區切であつた。それが靱俵となり、次に玄米の摺上げを続けるやうになつて、今や刈上餅はたゞ中間の小手續でしかない。それをなほ大切に守らうとして居るのは、古い感覺の殘留といふべきものであらう。

ヤマカラゲ 能登には新暦十二月の中頃になつて、ヤマカラゲといふ收穫終りの休をする處がある(風至)。このカラゲも刈上げであらうが、實際は稻刈後もなほ多忙で、すぐに祝宴に入る餘裕が無いのである。中部以西には刈上げ祝といふものは少ないが、肥前の東松浦などではコギアゲ即ち稻扱終りの休を、又刈上げ脛の祝と呼んで居る。つまりは延期して後の祝と合併したのである。

カリミテ 福井石川の二縣では、稻刈上げのすんだ日をカリンテと稱し、今でも牡丹餅などをこしらへて祝意を表して居る。ミテルは此地方で満了を意味する動詞だつたが、それが不明にな

つてカリンテと謂ひ、能登の人などはカリンチョウとさへ謂つて居る。

カリマハシ 刈リミテといふ語は中國地方でも折々聴くが、土地によつて稲刈祝を刈マーシといふ者もある(玖珂)。岐阜縣東部では又カリカブ(加茂)。多分以前は刈株祝と呼んで居たものであらう。

カマアゲ 信州では稲刈のすんだ時、又萱刈の終つた際にも、鎌上げといふ小さな祝をする(北安曇)。即ち鎌納めのことであるが、之を上げるといふのは道具に對する敬意かと思はれる。この日は鎌を洗ひ飾つて食物を供へるのが古式であつた。

カマヲサメ 近江野洲郡の鎌納めは、收穫の終りに手傳の人々を招くことであつた(郷、五ノ六)。北河内でも鎌納めは十一月に行はれる。即ち農事全體の完了した後に、舉行する祝をさう呼んで居るのである。

カマイハヒ 中國各地で刈上げの祝をさういふ。鳥取縣氣高郡などの鎌納めは、鎌を神棚又は床の間に飾り、赤飯や餅を是に供へた。稲拔終りのコキイハヒの時にも、亦稲拔器を飾つて同じ様な祭をしたといふことである。或は刈上げといふ語の代りに、鎌祭といふ語を用ひて居る地方もあるが、是なども曾ては此祭をして居た名残に相違ない。

カマアガリ 田又は麥畠を、全部刈終つた時の祝(上飯島)。

カマハラヒ 肥後の阿蘇谷では十月二十日頃に、鎌はらひといふ行事がある。即ち稲を三日ほどの間地乾しにした後、之をコヅミに積んでしまつた晩、おはぎ餅をこしらへて祝ふことである。

此頃ちやうど玉蜀黍の收穫があるので、其完了と合せて鎌はらひをする家がある(旅傳、六ノ四)。カマツカアラヒ 鎌柄洗。刈上祝のことである。稲刈の終つた晩の内祝で、必ず牡丹餅がありのつぺい汁がある(中・北蒲原)。信州で何々アゲといふ場合を、越後では何々アラヒといふのは是だけでない。略してはたゞカマツカとも謂ふ者がある。石見で刈上祝をカマクビといふのも略語らしい。

カマノメシ 鎌の飯。稲刈上の後、鎌を箕の中に置いて飯を上げて祭る。其飯を鎌の飯といふ

(南大和方言集)。

イネアゲ 稲揚げは田から稲束を家に運ぶことで、刈上祝を嚴重に行ふ土地では、此日には別段の祝は無い(雄勝)。ところが信州には稲こきが済んだ後で、稲揚げといふ祝をする例が處々にある。稲こき終りの祝は即ちコバシアゲであるが、此方は新らしい糯稻が米になるまで、却つて延期せられるのは、其餅の手傳の人々に食はせ又配らなければならぬからで、つまりは米穀調製

の技術の改良せられた影響である。所謂稲揚げの日には川へ泥鰌を捕りに行き、之を稲揚げ泥鰌と謂つて吸物にし、エビス様に供へ又人も食べる(上伊那)。東筑摩などのイニヤゲはコバシアゲの別名の様になつて居る。乃ち牡丹餅を作つてエビス様に上げ又マンガの神様にも御禮に上げる。此邊でマンガといふのは稲扱器のことである(郷土一ノ四)。イネアゲは又或土地では正月の忌詞にもなつて居る。即ち年越には寢床を敷くことをイネヲツムといふに對して、元朝未明にそれを片付けることを稲揚げと謂つて居る(美濃)。この偶然の例によつても判る様に、稲揚げはもと稲をニホから取卸して來ることであつたので、即ち刈上祝よりも、又大分後の行事だつたのである。

イノヲサメ 八丈島で刈上祝をさういふのは稲納めで、多分は稲村を積上げた日の祭であらう。

ニハアゲ 庭上げを刈上祝と同じ意味に使ふ處もあるが(阿波祖谷山)、庭は作業場のことだから、是は稲村から稲を運んで來た後の祝になるのである。

ニナハハツシ 羽後の平鹿郡などでは舊十月、農家稲揚げを終ると親しき人々、又手傳の人たちを招いて饗應する。是をニナハツシと謂ふのは荷繩はづしである(横手郷土史)。十月一日を荷

繩はづしの朝日と呼んで居る土地もある。刈揚げ節供の日から算へて、稲を田に置く期間が是で大よそは察知し得られる。

アキイレ 伊豫の周桑郡などは、關東の十日夜と同じに十月亥子の日を以て刈揚げの節日として居るらしい。乃ちこの日より以前に田を刈る場合には、六株だけの稲を刈らずに田に残し、亥子の日、主人自ら初とツガヒの藁とを持つて、田に行つて其六株を刈り、

お世話はんになりました。さアいにましヨヤ

など、謂つて荷支度をして、わざと重さうな身ぶりで歸つて來る。之を秋入れと謂ひ、家では大黒様に燈明を上げて祭り又祝言を唱へる(郷土研究彙報一ノ七)。中部地方のエビス様と對立して、四國と北九州とでは大黒様が田の神である。

ヲカイレ 阿波では田畠の作物を全部收穫することを岡入れといふ。瓜とか茄子とかは入用づつ採る方が主だが、稲にはそれが無いから明白にホカケと對立する語である。讃岐の岡入れは田の刈をさめに限つていふ。ヲカの神即ち保食神の家に入りたまふ日といひ、小豆飯を炊いて杵に盛つて家の神々に供へ、一家祝ひをする(仲多度郡史)。或は又地神さんが、田の最後の稲束に附いて、家に歸つて來られる日だと稱して、以前は嚴重に此式を行ひ、親戚と手傳人にと小豆飯を配

つた。

トビイリ 阿蘇では稻コヅミの稻を家に取入れる時に、是と一緒に大黒様が、田から家に歸つて來られるといひ、其晩はお萩か團子かをこしらへて祝ひ、神棚の大黒様に神酒を上げる。之を飛入りと謂つて居る(旅傳、六ノ四)。

ヨセダイコク 壹岐では稻の取寄せを終つた日の晩、一把の稻を荒神さまに上げ、又御飯を一升俵に入れて供へる。是を大黒祝又は大黒上げと謂つて居る。取上げの當座は忙しい故に儀式だけにして、すべての仕事が終わつて後に、親類を集めてゆつくりと祝宴を張る。或は此日の祝を寄せ大黒といひ、別に稻こきのすんだ後に、コギアゲ大黒といふ第二の祝をする例もある。

ウシノイネ 九州北部では一般に、霜月最初の丑の日を以て秋の田の神の祭日とし、その神をウシノヒサマ又はウシドンと呼んで居る。丑の稻は即ち此日の神に供へる稻、もしくは神の依坐であつて、やはり愛媛縣の秋入れと同じく、田に二握みほどの稻を刈殘して置いて、主人自ら苜りに行く作法を傳へて居る土地もある。是もわざと重いくと謂ひつゝ擔いで歸り、土間の大竈の前に臼を立て、手箕に其稻を安置して神酒を供へ、且つ色々の祝ひ詞がある。

オウシサマ 筑前志賀島で御丑様といふのが、霜月丑の日の田の神祭である。丑の稻と同じに

稻を箕に入れ、臼の上に載せて祭るのである。田の神の田から歸つて來られる日を、祭るといふ風習は全國的と言つてもよい。普通は舊十月で二月の同じ日と、出入二度祭るのが例であるが、能登半島などは霜月の五日又は四日で、之を田神迎へといひ(鳳至)、又はアエノコトとも謂ふ(珠洲)。九州の丑神様は大黒様のやうに、考へられて居る土地も多い。丑の日は必ず子の日の翌日といふ意味かと思ふが、今では是をたゞ飼牛の慰勞の日の如く考へて、祝つて居る例も稀では無い(企救、南松浦)。作神又は作り神の御姿として、惠比須大黒の御像を家々に祀ることは、信仰様式の著しい變化であつたが、現在は其影響が既に弘く及んで居り(日高、東蒲原)、儀禮の名稱は是が改まつて、愈々根源を尋ねることが難くなつて居る。しかも年毎に春秋の兩度、此神の降りと昇りとを祭る習のみは昔のまゝで、日は土地によつて僅かづゝちがふが、舊曆十月なかばから後の祭は、すべて農作の神の役目を果して、山に御還りなされる日の御禮申しであるといふことは、今もほとんどの全國を一貫した農民の古い考へ方であつた。(サクガミサマの條参照)。

カガシヒキ 越後の南魚沼郡などは、舊十月のトホカンヤ(十日夜)には餅を搗いて田の神を送ることにして居るが、案山子は只もう用が無くなつたと謂つて、此日を以て撤去するだけである。然るに信州に入るとほとんどの各郡ともその案山子を迎へて祭るのが、十日夜の主たる行事であつ

た。是をソメの年取と謂ふ村と、單に案山子上げといふ處とあるが、必ず蓑笠を着せ符熊手を兩の手に持たせ、邸内の清い地に立て、餅を供へて祭るといふ作法は、まだそちこちに残つて居る。此日は案山子の神が天に上る日といひ、餅を蛙が背負うて御伴をするといふ者もあり(諏訪)、或は此日を山の神祭と謂ひ、又は山の講の日とも謂つて、案山子が田守を終へて山の神様になる日だといふ處もある(南安曇)。京都附近の村でも古くはカマシメタテと謂つて、家の内に鍬鎌を立て蓑笠を着せて祭る習はしがあつた(匠材集)。越後の案山子引なども以前は之を田の神の依坐として、祭つて居たものであらうと思ふ。(ソメノトシリ参照)。

二五 庭 仕 事

アキマトヒ 收穫後の色々の作業。稻場から庭拂まで(相馬)。マツフは片付ける又取纏める意味だが、近世は此際にすべて米にしてしまふから、其分量が非常に多くなつた。

ニハシゴト 田畠より刈取つた穀類を、家の内で處理する作業(隠岐)。ニハといふのは仕事場の意味だが、關東では重複してニハバといひ、ニハバ道具などといふ名稱もある。内庭・白庭・坪

庭なども、亦それ々の作業の場であつた。

ニヤ 庭の一隅に設けた收納小屋だけを、ニヤと謂ふ土地がある(邑樂)。起りは是もニハである。天候の故障の多い地方では、其ニハは建物の中に在つた。

スノウバ 上總は各郡とも物置をスノバ、又はスノウ場と謂つて居る。即ち其中で收穫物を處理するのである。スノウは漢語の收納の國音で、吏員が使ふから農民も眞似たものと思はれる。

近江の一部では小作料をもつて来る日がスノウだが、遠江などでは作物の調製をシナベルといひ、又秋シナベといふ語もある。九州の方にも物を片付けることをシナベル(長崎)、又掃除する整理するをシノブル(天草)などといふ動詞が出来て居る。

オシノバ 出雲の仁多郡などは内庭をオシノバ、即ち大農がこゝで年貢を量らせたのである。

シノグラ 肥後の球磨郡で物置をシノグラと謂ふのは收納倉である。甌島の海岸には村から離れて、幾百の小屋を建て列ね、其中で時々々の農産物を調製し又藏置する。それを收納小屋と謂つて居る。シノウといふ名詞も九州には広く行はれ、或は麥シノウ・大根シノウの語があり(豊後方言集)、又連枷の作業をシノウといふ處もある(豊後)。シノベヤといふ物置小屋の名は、又往々にして中部地方にもある。